京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2018-12

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇一八-一二　平安京右京七条一坊十二町跡

平安京右京七条一坊十二町跡

2019年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京七条一坊十二町跡

2019年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、施設整備に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

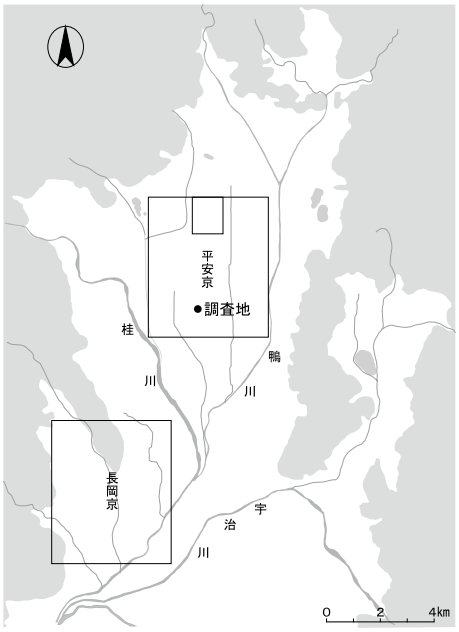
令和元年10月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	平安京跡　（京都市番号　15Ｈ394）
2	調査所在地	京都市下京区西七条北東野町90ほか
3	委　託　者	京都市　代表者　京都市長　門川大作
4	調 査 期 間	2018年４月20日～2018年11月30日
5	調 査 面 積	2,037㎡
6	調査担当者	鈴木康高・モンペティ恭代・末次由紀恵・岡田麻衣子
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「西京極」・「島原」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	分　　析	鉄滓の分析は、日鉄テクノロジー株式会社に委託した。
14	本 書 作 成	鈴木康高
15	執 筆 分 担	鈴木康高：１～５ 付章：日鉄テクノロジー株式会社
16	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
17	協　力　者	調査・整理作業にあたっては、下記の方々からご教示頂いた。記して謝意を表します。（五十音順、敬称略） 網　伸也、五十川伸矢、大道和人、西山良平、平尾政幸



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
（１）調査に至る経緯 …… 1
（２）調査の経過 …… 1
２．位置と環境 …… 4
（１）位置と環境 …… 4
（２）周辺の調査 …… 4
３．遺　　構 …… 7
（１）遺構の概要 …… 7
（２）基本層序 …… 7
（３）平安時代の遺構 …… 7
４．遺　　物 …… 14
（１）土器類 …… 14
（２）土製品 …… 19
（３）瓦類 …… 20
（４）木製品 …… 21
（５）石製品 …… 22
（６）金属製品 …… 22
（７）鍛冶関連遺物 …… 22
５．ま と め …… 24
付章　鉄滓の分析調査 …… 28

図　版　目　次

図版１　遺構　調査区平面図（１：300）
図版２　遺構　調査区北壁断面図（１：100）
図版３　遺構　調査区東壁断面図（１：100）
図版４　遺構　掘立柱建物１実測図（１：80）
図版５　遺構　掘立柱建物２・３実測図（１：80）
図版６　遺構　掘立柱建物４実測図（１：100）

図版７　遺構　掘立柱建物５実測図（１：100）
図版８　遺構　掘立柱建物６実測図（１：80）
図版９　遺構　掘立柱建物７実測図（１：80）
図版10　遺構　掘立柱建物９実測図（１：80）
図版11　遺構　掘立柱建物10実測図（１：80）
図版12　遺構　掘立柱建物11・12実測図（１：80）
図版13　遺構　掘立柱建物13実測図（１：80）
図版14　遺構　井戸268・617・807実測図（１：50）
図版15　遺構　柵２実測図（１：80）
図版16　遺構　柵３・４実測図（１：80）
図版17　遺構　柵５・６実測図（１：80）
図版18　遺構　１　調査区西部 全景（南から）
　　２　調査区北東部 全景（西から）
図版19　遺構　１　調査区南東部 全景（西から）
　　２　掘立柱建物２と井戸268（西から）
図版20　遺構　１　掘立柱建物３（西から）
　　２　掘立柱建物５（西から）
図版21　遺構　１　掘立柱建物６（西から）
　　２　掘立柱建物７・13（北から）
図版22　遺構　１　掘立柱建物11・12（西から）
　　２　調査区北東部 柵２～５と溝512・529（北から）
図版23　遺構　１　調査区南東部 柵２・３・５・６と溝512・1026（北から）
　　２　柵３ピット1071半裁（東から）
　　３　柵５ピット1101半裁（東から）
図版24　遺構　１　井戸268（東から）
　　２　井戸268掘形半裁（南から）
　　３　井戸268枠内 土器出土状況（南から）
　　４　井戸268枠内 柄杓出土状況（南から）
図版25　遺構　１　井戸617（北から）
　　２　井戸617枠内 土器出土状況（北東から）
　　３　井戸617掘形 土器出土状況（北東から）
図版26　遺構　１　井戸807（東から）
　　２　井戸807隅柱遺存状況（南東から）
　　３　井戸807枠内 土器・骨出土状況（南から）
図版27　遺構　１　溝450（南東から）

２　溝171（北から）
３　ピット430（南から）
図版28　遺構　１　ピット564土器出土状況（北西から）
２　ピット564半裁（南西から）
３　ピット640土器出土状況（北から）
４　ピット661瓦出土状況（東から）
図版29　遺物　井戸807・617・268、ピット564出土土器
図版30　遺物　土製品・瓦・木製品・石製品・金属製品・鍛冶関連遺物

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図（１：2,500）　……　1
図２　調査区配置図（１：1,000）　……　2
図３　調査前全景（北西から）　……　3
図４　アスファルトカッター工事（南東から）　……　3
図５　重機掘削（北から）　……　3
図６　埋戻し（北西から）　……　3
図７　駐車場整備（北西から）　……　3
図８　ラフタークレーン使用の写真撮影（南東から）　……　3
図９　作業状況（北から）　……　3
図10　チャレンジ体験（西から）　……　3
図11　周辺調査位置図（１：6,000）　……　6
図12　掘立柱建物８実測図（１：80）　……　8
図13　柵１実測図（１：80）　……　10
図14　溝171・450・512・1026断面図（１：40）　……　12
図15　ピット430・564・640実測図（１：20）　……　12
図16　井戸807・617・268出土土器実測図（１：４）　……　15
図17　溝171・450・512・1026出土土器実測図（１：４）　……　17
図18　その他の遺構出土土器実測図（１：４）　……　19
図19　土製品実測図（１：４）　……　20
図20　軒丸瓦・軒平瓦拓影及び実測図（１：４）　……　21
図21　「大伴」銘軒平瓦の改刻（拓影１：６）　……　21

図22　木製品実測図（１：４）…… 22
図23　石製品実測図（石１は１：２、石２は１：４）…… 22
図24　金属製品実測図（１：２）…… 22
図25　鉄滓実測図（１：４）…… 23
図26　遺構変遷図（１：1,000）…… 25
図27　椀形鍛冶滓の顕微鏡写真１…… 32
図28　椀形鍛冶滓の顕微鏡写真２…… 33

表　目　次

表１　周辺調査一覧表…… 5
表２　遺構概要表…… 7
表３　遺物概要表…… 14
表４　鉄滓一覧表…… 23
表５　建物一覧表…… 26
表６　供試材の履歴と調査項目…… 28
表７　供試材の化学組成…… 34
表８　出土遺物の調査結果のまとめ…… 34

平安京右京七条一坊十二町跡

１．調査経過

（１）調査に至る経緯（図１）

本調査は、京都市中央市場卸売市場第一市場（七本松駐車場）施設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査地点は、平安京右京七条一坊十二町跡にあたる。整備事業に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）による試掘調査が行われ、平安時代の遺構・遺物が確認されたため、文化財保護課から原因者に対し発掘調査が必要であるとの指導がなされた。調査は原因者から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行った。

（２）調査の経過（図２～10）

調査は2018年４月20日に開始した。調査区は、排土置き場を確保するため１～３区に分け、順次調査を行った。１区は東西28.5ｍ、南北26ｍ、２区は東西28.5ｍ、南北22.5ｍ、３区は東西27

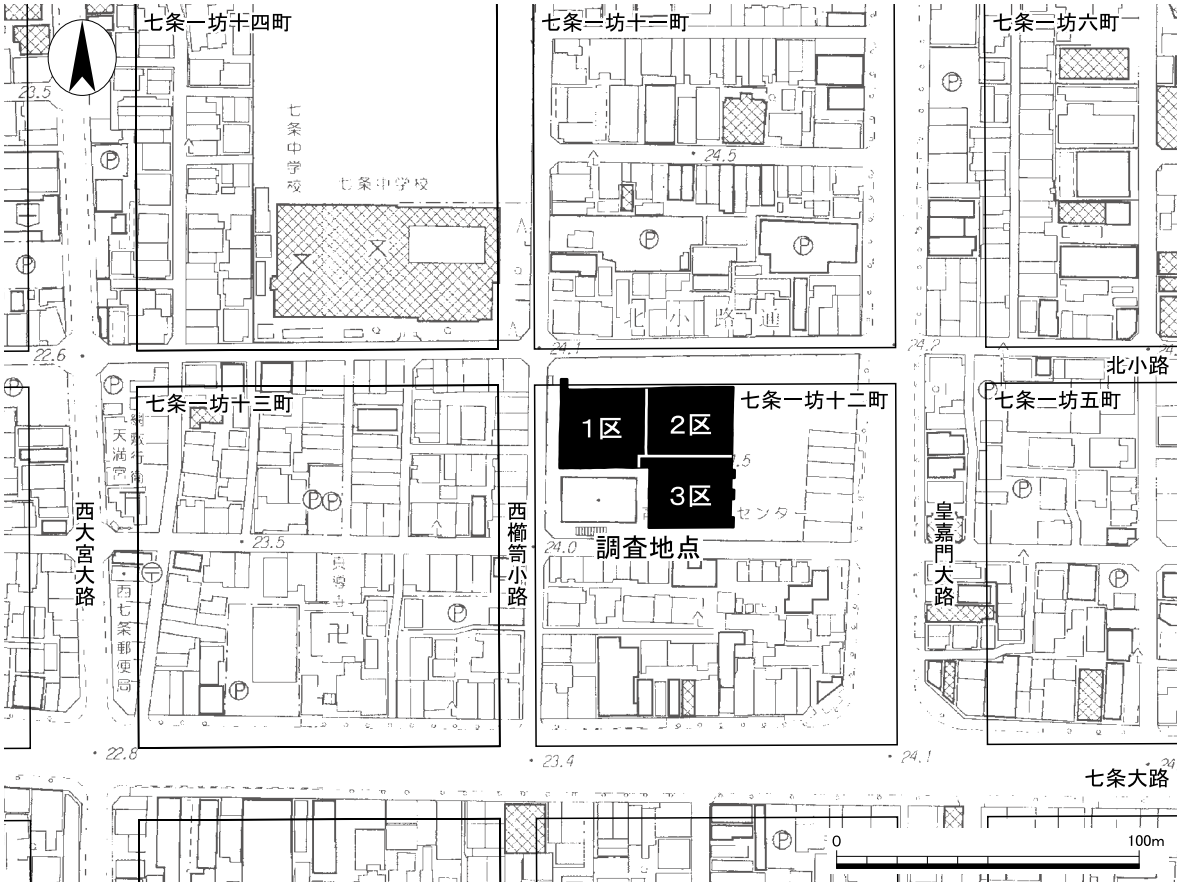


図１　調査地点位置図（１：2,500）

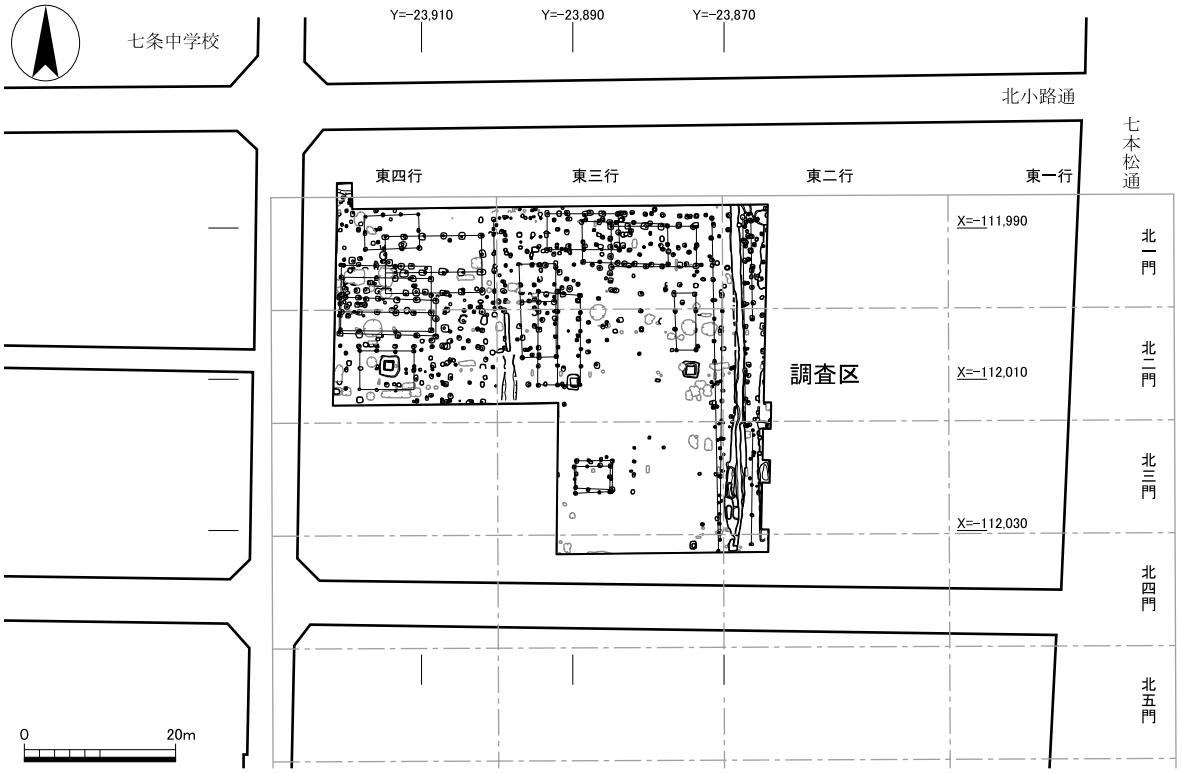


図２　調査区配置図（１：1,000）

m、南北23.5ｍである。また、１区では北小路南側溝の確認、３区では小径東側溝の幅を確認するために、文化財保護課の指導のもと調査区を拡張した。調査総面積は2,037㎡である。

調査では、アスファルトを除去・搬出した後、現代盛土や明治時代以降の耕作土を重機により掘削したところで地山を検出し、この上面で調査を行った。主な遺構には、平安時代前期から中期にかけての掘立柱建物・井戸・柵・溝などがある。検出した遺構は人力で掘削し、図面作成・写真撮影などの記録作業を行った。また、遺構の実測は写真測量を行い、平面図を作成した。井戸はオルソ測量を行い、平面図・立面図を作成した。調査後は埋め戻しを行い、11月30日にすべての作業を終了した。２区については、調査終了後直ちに駐車場として整備し、１区と３区に先立って原因者へ引き渡した。

１区の調査中には、精華大学人文学部フィールドプログラムとして、５月14～18日と５月21～25日にかけて１週間に２名ずつ計４名の学生を受け入れた。また、３区の調査中には、11月７日に京都市教育委員会の「生き方探求・チャレンジ体験」を受け入れ、中学生８名の参加があった。調査中には検証委員である龍谷大学の國下多美樹氏と同志社大学の浜中邦弘氏による検証を受けた。

図３　調査前全景（北西から）

図４　アスファルトカッター工事（南東から）

図５　重機掘削（北から）

図６　埋戻し（北西から）

図７　駐車場整備（北西から）

図８　ラフタークレーン使用の写真撮影（南東から）

図９　作業状況（北から）

図10　チャレンジ体験（西から）

２．位置と環境

（１）位置と環境

調査地点は、平安京右京七条一坊十二町の北西部にあたり、南を七条大路、東を皇嘉門大路、北を北小路、西を西櫛笥小路に囲まれる。この町の土地利用を示す史料は明らかではない。また当地は、平安京西市の隣接地にあたる。西市は東市とともに平安京内に置かれた官営の市で、平安京遷都に先立つ延暦十三年（794）七月に長岡京より移設されている[1)]。『拾芥抄』西京図によると西市は、中心に方二町の「市町」、市町の東西南北それぞれに二町の「外町」が付属する構成で、十字状に土地を占める[2)]。調査地点はこの東外町の東側隣接地にあたる。市は東西市司により管理・運営され、市は月の15日以前は東市、16日以後は西市で交互に開かれ、それぞれの市では取り扱う品物の数や専売品が決められていた[3)]。承和二年（835）には西市での売買がほとんど行われなくなっていたようで、新たに専売品を定め[4)]、承和八年（841）には、西市北東の空閑地に右坊城出挙銭所を設置するといった活性化対策が図られるが[5)]、効果はみられず衰退していったと思われる。

西市衰退後の様子は明らかではないが、これ以降西七条と呼ばれていたようで、11世紀末になると「西七条」に針を製作する職人が居住していたことが指摘されている[6)]。鎌倉時代以降、徐々にこの「西七条」の呼称が定着し、衰退する右京のなかで都市的な空間を形成していたようである。

（２）周辺の調査（図11、表１）

これまでの周辺の調査では、平安時代を中心に鎌倉時代から江戸時代にかけての遺構が検出されている。西市と関連すると考えられる遺構や小規模宅地の様相がわかる調査例がまとまっている。また、本調査区は該当しないが、西市の大部分は弥生時代から古墳時代にかけての衣田町遺跡と重複しており、平安時代を遡る遺構も検出されている。

衣田町遺跡の遺構は、調査５で弥生時代の方形周溝墓と落込み、調査13で古墳時代の流路、調査11で飛鳥時代から奈良時代の流路が検出されている。

平安時代前期から中期にかけての遺構は、西市の周縁部で確認されている。確認できている遺構の性格は、条坊関係・西市関連施設・宅地に分けることができる。条坊関係としては、調査４と６で西櫛笥小路の西側溝、調査17と18で西靭負小路の路面と東側溝、調査21と22で野寺小路の路面と東西側溝、調査14・15・23で七条大路路面と南側溝、調査13で七条坊門小路北側溝が検出されている。調査17～20では溝による小規模区画が検出されており、西市に関連する遺構として評価されている[7)]。宅地としては、調査４と11で様相がわかる小規模宅地が検出されている。この他にも、調査５・６・11・13では掘立柱建物・井戸・柵が検出されており、宅地として利用されていたことがわかる。特徴的な遺構・遺物としては、調査３－１で炉跡と鍛冶関連遺物が出土している。

平安時代後期以降の遺構は、調査14・15・23では七条大路の路面と南側溝が検出されている。特に調査14では現代に至るまで七条大路が連綿と継続して利用されている様子が確認でき、平安

表１　周辺調査一覧表

番号	調査地点	方法	調査概要	文　献
1	七条一坊九町	発掘	鎌倉時代以降の六条大路。	『平安京右京七条一坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-12 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006
2	七条一坊十町	立会	明治時代以前の低湿地。	「平安京右京七条一坊」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989
3	七条一坊十三町・二坊四・五・十二町	発掘	平安時代前期の井戸・溝・集石・柱穴・土坑・土器溜・炉跡。鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物・柵・井戸・集石・柱穴・土坑。江戸時代の掘立柱建物・井戸・柱穴・土坑・落込み。遺物:平安時代前期の鉄滓が付着した土師器甕・杯・皿。	「平安京右京七条一・二坊、西市跡」『昭和52年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011
4	七条一坊十四町	発掘	平安時代前期～中期の掘立柱建物・柵・井戸・溝・土坑。西櫛笥小路の西側溝。	「平安京右京七条一坊」『平成9年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
5	七条一坊十四町	発掘	弥生時代の方形周溝墓・落込み。平安時代前期の掘立柱建物・井戸・溝。	「平安京右京七条一坊十四町・衣田町遺跡」『昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011
6	七条一坊十五町	発掘	奈良時代以前の流路。平安時代前期～中期の掘立柱建物・柵・井戸・水利施設・流路。西櫛笥小路の西側溝。	『平安京右京七条一坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-19 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009
7	七条二坊四町	発掘	平安時代末～鎌倉時代の柱穴・土坑。室町時代の柱穴・土坑・溝。江戸時代以降の土坑・柱穴・土取り穴・井戸。遺物:鎌倉時代後半の鞴羽口・鉄塊。	『平安京右京七条二坊四町(西市)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2005
8	七条二坊七・十町	発掘	平安時代前期の柱穴・土坑・溝。平安時代中期の柱穴。平安時代後期～室町時代の溝。江戸時代の柱穴・土坑・溝。	「平安京右京七条二坊」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985
9	七条二坊八町	発掘	平安時代中期の溝。	「右京七条二坊」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983
10	七条二坊九～十二町	立会	平安時代の流路状遺構・北小路南側溝。時期不明の井戸。	「平安京右京七条二坊」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993
11	七条二坊十町	発掘	奈良時代以前の流路。平安時代前期の掘立柱建物・柵・井戸・土坑。平安時代中期の柱穴・溝。	「平安京右京七条二坊」『平成2年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994
12	七条二坊十二町	発掘	平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物・柵・井戸・柱穴群。	「平安京右京七条二坊」『平成9年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
13	七条二坊十五町	発掘	古墳時代の流路。平安時代の掘立柱建物・井戸・溝・土坑。平安時代中期の七条坊門小路北側溝。鎌倉時代以降の溝。	「平安京右京七条二坊」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993
14	八条二坊一町	発掘	平安時代の七条大路路面と南側溝・流路・区画溝・土坑(井戸か)・柱穴。鎌倉時代～室町時代の七条大路路面と南側溝・区画溝・井戸・溝・土坑・柱穴・土取り穴。江戸時代の七条大路南側溝・溝・井戸・竈・土坑・土取り穴。遺物:鎌倉時代～室町時代の鉄滓。	「平安京右京八条二坊・西市跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994
15	八条二坊一町	発掘	平安時代後期～室町時代の掘立柱建物・柱穴・土坑。平安時代後期～鎌倉時代の七条大路路面と南側溝。	「右京八条二坊(1)」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983
16	八条二坊一町	発掘	平安時代前期の井戸。平安時代中期の柱穴。鎌倉時代～室町時代の土坑・柱穴群。	「平安京右京八条二坊一町」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2011
17	八条二坊二町	発掘	平安時代前期の流路。平安時代前期～中期の西靭負小路路面と東西側溝・区画溝。鎌倉時代の溝・土坑。	「平安京右京八条二坊」『昭和60年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988
18	八条二坊二町	発掘	平安時代前期の流路・西靭負小路路面と東西側溝・区画溝・掘立柱建物・柵・土留め・土坑・護岸施設。	「平安京右京八条二坊」『平成5年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
19	八条二坊二町	発掘	平安時代前期の池状遺構・堤状遺構。平安時代中期の掘立柱建物。室町時代の井戸・土壙墓。	「平安京右京八条二坊」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985
20	八条二坊八町	発掘	平安時代前期～中期の溝・土坑・柱穴・湿地。平安時代後期～鎌倉時代の井戸・溝・土坑・柱穴。桃山時代の井戸・柱穴。江戸時代の井戸・溝・土坑・柱穴。	「平安京右京八条二坊」『平安京跡発掘調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局 1989
21	八条二坊十・十五町	発掘	平安時代前期～中期の野寺小路路面と東西側溝・掘立柱建物・柵・柱穴。室町時代～江戸時代の溝。	『平安京右京八条二坊十・十五町跡、衣田町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-8 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008
22	八条二坊十六町	発掘	平安時代前期の野寺小路路面と西側溝・溝・柱穴群。	「右京八条二坊」『平安京跡発掘調査概報　昭和59年度』京都市文化観光局 1985
23	八条二坊十六町	発掘	平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物・柱穴。鎌倉時代の七条大路路面と南側溝。	「右京八条二坊(2)」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983

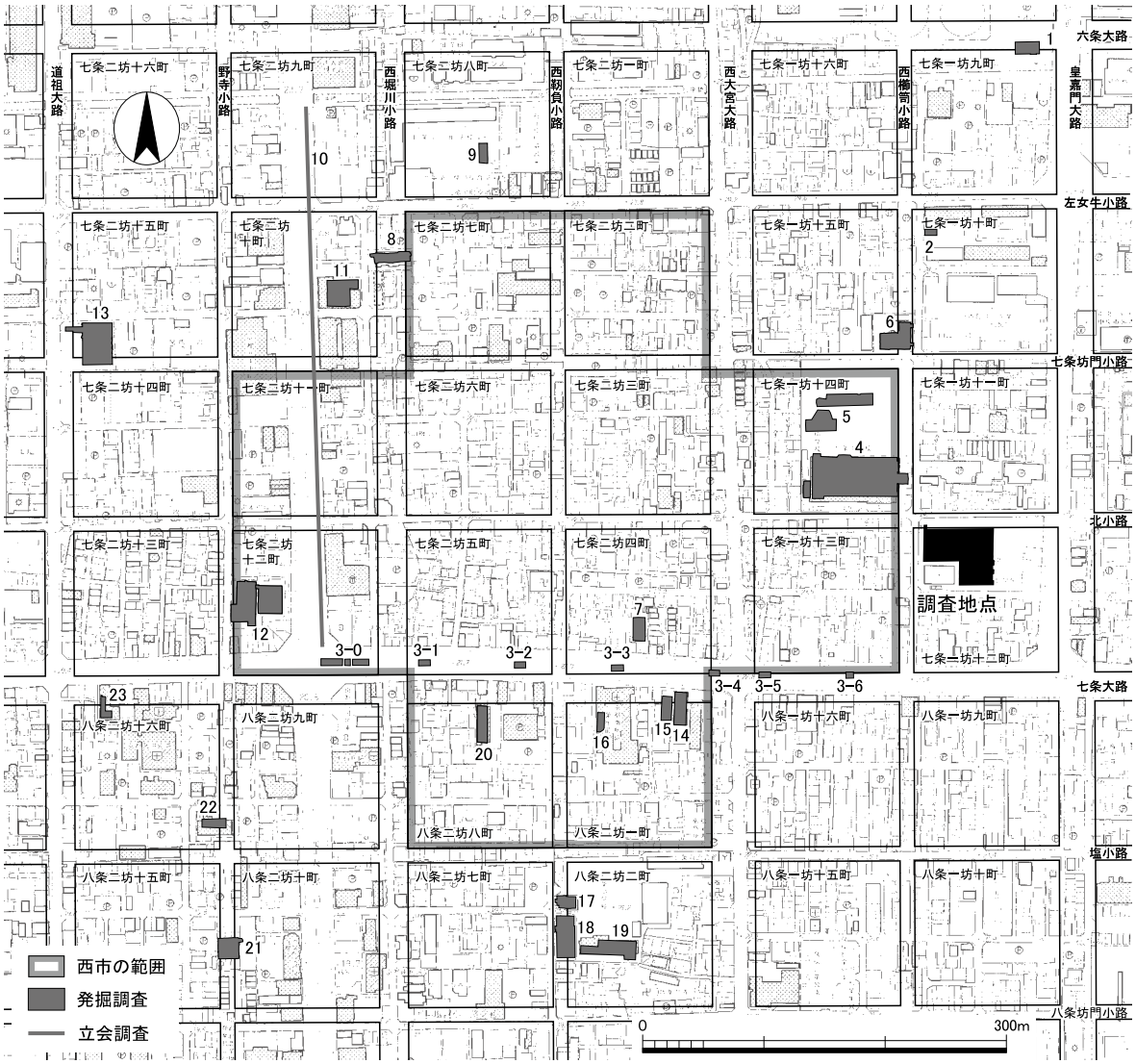


図11　周辺調査位置図（1：6,000）

京内の基幹交通路として維持管理がなされていたことがわかる。この七条大路沿いの調査３や７・12・14～16・20・23で、建物や井戸などの遺構が七条大路に面して検出されている。七条大路沿いから離れると耕作に伴う溝が検出される。

調査７と14や右京七条一坊六町では、鎌倉時代から室町時代にかけての鍛冶関連遺物が出土しており、この周辺で鉄製品の生産が行われていたことがうかがえる。

註

１）『日本紀略』延暦十三年七月一日条

２）『拾芥抄』改訂増補故実叢書22巻　明治図書出版株式会社　1993年

３）『延喜式』東西市司

４）『續日本後記』承和九年十月二十日条

５）『續日本後記』承和八年二月二十五日条

６）久米舞子「平安京の地域社会に生きる都市民」『平安京の地域形成』 京都大学学術出版会　2016年

７）菅田　薫「東西市」『平安京提要』角川書店　1994年

３．遺　　構

（１）遺構の概要

調査で検出した遺構には平安時代前期から中期の掘立柱建物・井戸・柵・溝・ピットなどがある。この他に東西・南北方向の溝を多数検出しており、耕作に伴う溝と考えられる。溝の時期は、埋土の違いや出土遺物から、江戸時代から現代にかけてとそれ以前の大きく２時期に分けることができる。江戸時代以前の溝については時期を示す遺物が出土していないため、その時期は明らかでないが、周辺の調査成果から室町時代以降と考えられる。

（２）基本層序（図版２・３）

調査地点の現地表面は、23.9～24.2ｍで北東部が高く、南西側に向かって緩やかに傾斜する。基本層序は現地表面からアスファルト（厚さ0.1ｍ）、現代盛土（厚さ0.35～0.45ｍ）、明治時代以降の耕作土（厚さ0.1ｍ）、地山層となる。平安時代の遺構は地山層上面で検出した。地山層は黄褐色シルトを基本とし、部分的に黒褐色砂礫がみられる。

（３）平安時代の遺構（図版１・18・19）

掘立柱建物・井戸・柵・溝・土坑・ピットを検出した。

掘立柱建物１（図版４）　調査区北西部で検出した梁行２間、桁行５間の東西棟の掘立柱建物である。方位は北に対して東に約２度振る。柱間は梁行2.4ｍ、桁行2.55ｍの等間である。掘形の平面形は方形ないしは隅丸方形で、その規模は0.5～0.9ｍ、深さ0.3～0.5ｍ。柱当たりは径0.3ｍ程度である。ピット465は掘立柱建物４のピット244、ピット373は掘立柱建物４のピット372、ピット427は掘立柱建物４のピット368、ピット379は掘立柱建物４のピット366によって掘り込まれる。

掘立柱建物２（図版５・19）　調査区南西部で検出した梁行２間、桁行３間の東西棟の掘立柱建物である。方位はほぼ正方位である。柱間は梁行2.4～2.7ｍ、桁行2.4ｍ。掘形の平面形は方形ないしは円形で、その大きさは0.3～0.5ｍ、深さ0.2～0.35ｍ。柱当たりは径0.2ｍ程度である。身舎の北側柱列ピット253・254・256や南側柱列ピット271の柱当たりからは0.2～0.3ｍの自然石が出土している。

掘立柱建物３（図版５・20）　調査区北西部で検出した梁行２間、桁行３間の東西棟の掘立柱建物である。方位は北に対して西に約２度振る。柱間は梁行2.1～2.3ｍの不等間、桁行2.4ｍの等間

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構
平安時代	掘立柱建物１～13、井戸268・617・807、柵１～６、溝171・450・512・529・1026 ピット430・564・640・661・715

である。掘形の平面形は隅丸方形形で、円形のものもある。その規模は0.4～0.7ｍ、深さ0.2～0.5ｍ。柱当たりは径0.2ｍ程度である。

掘立柱建物４（図版６） 調査区西部で検出した梁行２間、桁行５間の身舎の南北に庇がつく東西棟の掘立柱建物である。方位はほぼ正方位である。身舎の柱間は梁行2.1～2.3ｍの不等間、桁行2.4ｍの等間である。北庇の出は1.65ｍ、南庇の出は2.55ｍである。掘形の平面形は方形ないしは隅丸方形で、その規模は0.4～0.8ｍ、深さ0.2～0.4ｍ。北庇のピット230や身舎の北側柱列のピット429には、径0.3ｍ程度の柱当たりが遺存していた。

掘立柱建物５（図版７・20） 調査区北西部で検出した梁行２間、桁行５間の身舎の南に庇がつく東西棟の掘立柱建物である。方位は北に対して西に１度弱振る。身舎の柱間は梁行約2.4ｍ、桁行2.55ｍの等間である。庇の出は2.7ｍである。掘形の平面形は方形ないしは隅丸方形で、その規模は0.6～1.1ｍ、深さ0.1～0.6ｍ。身舎の北側柱列のピット221や南側柱列のピット90・100・175には、径0.2～0.3ｍ程度の柱当たりが遺存していた。

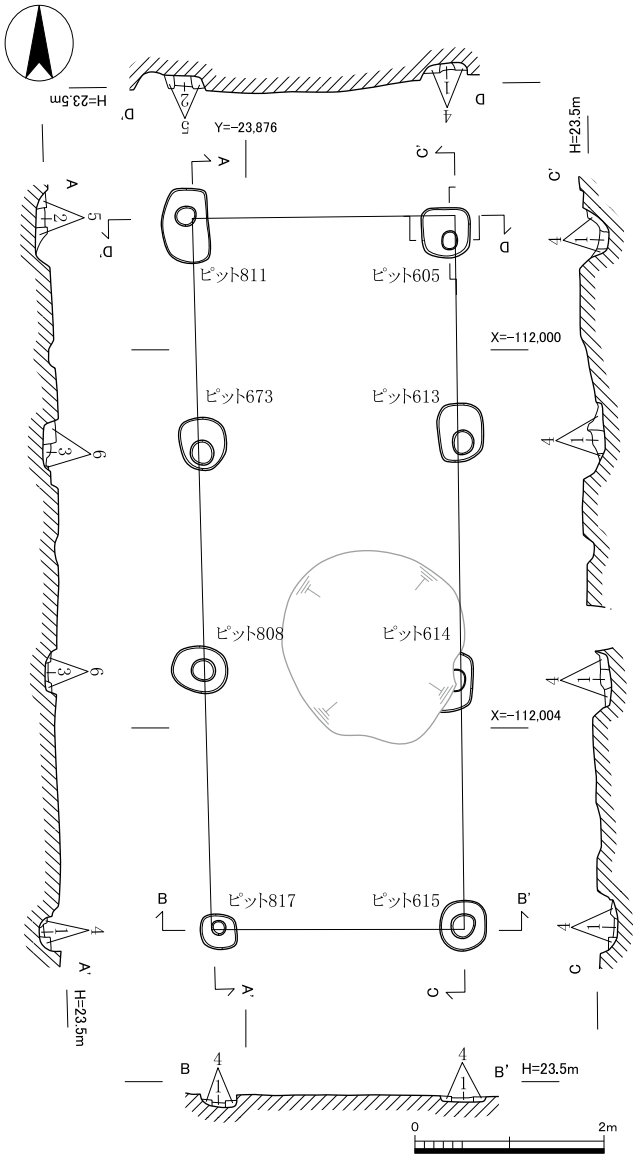


図12 掘立柱建物８実測図（１：80）

掘立柱建物６（図版８・21） 調査区北東部で検出した梁行２間、桁行５間の東西棟の掘立柱建物である。方位はほぼ正方位。柱間は梁行2.4～2.7ｍ、桁行2.1～2.3ｍの不等間である。掘形の平面形は方形で、隅丸方形のものもある。その規模は0.5～1.0ｍ、深さ0.1～0.3ｍ。柱当たりは径0.3～0.4ｍ程度である。ピット656では直径0.3ｍ程度の自然石を検出した。

掘立柱建物７（図版９・21） 調査区中央部で検出した梁行２間、桁行５間の南北棟の掘立柱建物である。方位は北に対して西へ約２度振る。柱間は梁行2.0～2.7ｍ、桁行2.3～2.7ｍの不等間である。掘形の平面形は方形ないし隅丸方形で、円形のものもある。その規模は0.4～0.7ｍ、深さ0.2～0.5ｍ。柱当たりは径0.3～0.4ｍ程度である。北から２間目に間仕切りがある。

掘立柱建物８（図12） 調査区東部で検出した梁行１間、桁行３間の南北棟の掘

立柱建物である。方位はほぼ正方位。柱間は梁行2.7ｍ程度、桁行2.2～2.7ｍの不等間である。掘形の平面形は方形ないしは隅丸方形で、その規模は0.2～0.7ｍ、深さ0.05～0.3ｍ。柱当たりは径0.3～0.4ｍ程度である。

掘立柱建物９（図版10）　調査区北東部で検出した梁行２間、桁行５間の東西棟の掘立柱建物である。方位は北に対して東に約２度振る。柱間は梁行2.7ｍの不等間、桁行2.2～2.5ｍの等間である。掘形の平面形は方形ないしは隅丸方形で、その規模は0.5～0.7ｍ、深さ0.1～0.4ｍ。柱当たりは径0.3～0.4ｍ程度である。

掘立柱建物10（図版11）　調査区北部で検出した梁行２間、桁行４間の東西棟の掘立柱建物である。方位はほぼ正方位。柱間は梁行2.2～2.5ｍの不等間、桁行2.4ｍ程度の等間である。掘形の平面形は方形で、隅丸方形のものもある。その規模は0.4～0.9ｍ、深さ0.2～0.4ｍ。柱当たりは径0.3～0.4ｍ程度である。

掘立柱建物11（図版12・22）　調査区南部で検出した梁行２間、桁行３間の東西棟の掘立柱建物である。同じ位置に重複して建物12が建て替えられており、柱穴の切り合い関係から掘立柱建物11が掘立柱建物12より古いと判断した。方位はほぼ正方位。柱間は梁行1.6～2.2ｍの不等間、桁行1.65ｍの等間である。掘形の平面形は方形ないしは隅丸方形で、その規模は0.4～0.6ｍ、深さ0.1～0.4ｍ。柱当たりは径0.3ｍ程度である。

掘立柱建物12（図版12・22）　調査区南部で検出した梁行２間、桁行３間の東西棟の掘立柱建物である。方位はほぼ正方位。柱間は梁行1.65～1.8ｍ、桁行1.5～1.65ｍの不等間である。掘形の平面形は方形ないしは隅丸方形で、その規模は0.3～0.6ｍ、深さ0.1～0.4ｍ。柱当たりは径0.3ｍ程度である。

掘立柱建物13（図版13・21）　調査区中央部で検出した梁行２間、桁行５間の南北棟の総柱の掘立柱建物である。方位はほぼ正方位。柱間は、梁行の西側が2.7ｍ、東側が3.0ｍ、桁行2.4ｍの等間である。掘形の平面形は方形ないしは隅丸方形で、その規模は0.4～0.6ｍ、深さ0.2～0.4ｍ。柱当たりは径0.3ｍ程度である。

井戸268（図版14・19・24）　調査区南西部で検出した。掘形の平面形は方形で、その規模は一辺約2.7ｍである。検出面から底部までの深さは1.3ｍで、底部の標高は22.1ｍである。井戸枠は方形縦板横桟組で、底部に水溜はみられない。井戸枠は２段構造で、標高22.8～22.9ｍ付近で上段と下段に分けることができ、その規模は内法で上段が一辺約1.1ｍ、下段が0.9ｍである。枠材の遺存状態は不良である。枠材に使用された樹種は縦板がスギ、横桟がヒノキ科と考えられる。遺物は、枠内埋土から京都Ⅲ期古段階[1)]の土器類が出土した。

井戸617（図版14・25）　調査区東部で検出した。掘形の平面形は方形で、その規模は一辺2.2ｍである。検出面から底部までの深さは1.0ｍで、底部の標高は約22.4ｍである。井戸枠は方形縦板横桟組で、底部に水溜はみられない。井戸枠の規模は内法で一辺約1.2ｍである。横桟は縦板下端部とその上方約0.4ｍの２箇所に残っていた。底部には直径５～20㎝程度の礫や瓦が敷き詰められるが、中央部はやや希薄である。枠材に使用された樹種は縦板・横桟ともにスギである。遺物は、

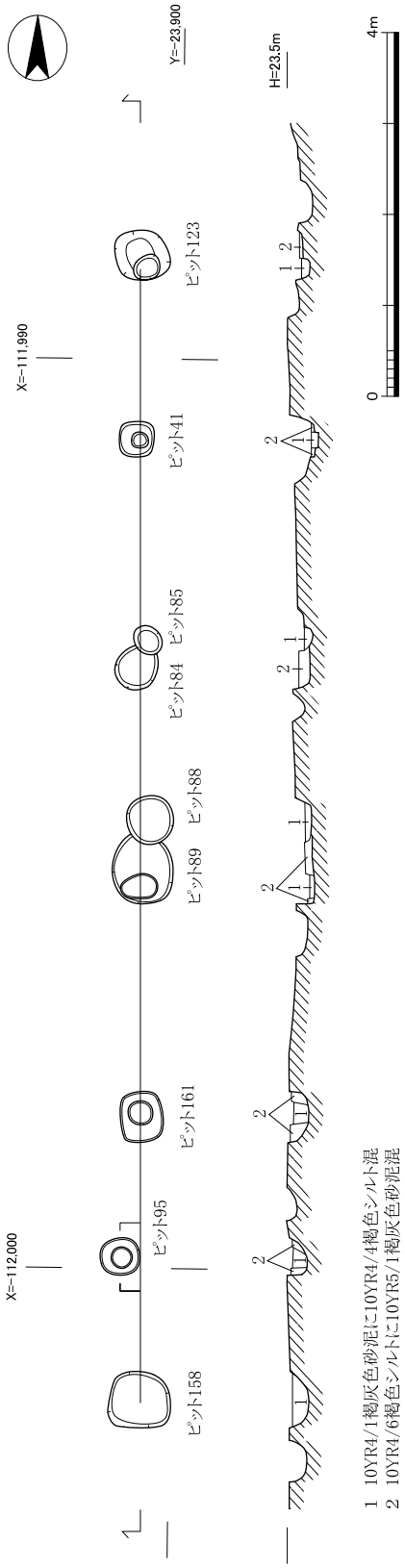


図13　柵１実測図（１：80）

枠内埋土から京都Ⅱ期新段階、掘形埋土から京都Ⅱ期古段階の土器類が出土した。この他に枠内・掘形埋土から瓦類、掘形埋土から製塩土器が出土した。枠内埋土からはモモの種が３点出土しているが、この内２点には食痕がみられる。

井戸807（図版14・26）　調査区中央部で検出した。掘形の平面形は長方形で、その規模は南北2.0ｍ、東西1.6ｍである。検出面からの深さは1.2ｍで、底部の標高は22.3ｍである。井戸枠は方形縦板組で、底部に水溜はみられない。井戸枠の規模は内法で一辺0.9ｍである。四隅には隅柱が比較的良好に遺存するが、枠材の遺存状態は不良で、その痕跡のみが確認できた。枠材に使用された樹種は、隅柱は全てヒノキで、縦板は遺存状態が不良のため同定できなかった。遺物は、枠内埋土から京都Ⅱ期古段階の土器類が出土した。掘形埋土からは土器類の細片がわずかに出土するに留まった。枠内底部の北東隅部からは土師器杯・皿・甕・骨がまとまって出土した。骨は、大型哺乳類のものであるが、遺存状態が悪いため人骨か獣骨かを区別することができなかった。この他に枠内から瓦類と塼が出土した。

柵１（図13）　調査区中央部で検出した南北方向の柵で、東三行と四行の境界推定ライン上に位置する。北側は調査区外に広がり、Ｘ＝－112,001ｍ付近が南端となる。方位は北に対してわずかに西へ振る。５間分を検出し、その検出長は約15ｍである。柱間は2.0～2.4ｍの不等間。ピットの掘形は一辺0.4～0.5ｍ方形ないしは隅丸方形である。深さは0.2～0.3ｍ。一部の柱に建て替えが認められる。

柵２（図版15・22・23）　調査区東部で検出した南北方向の柵で、東三行と四行の境界推定ラインから西へ約１ｍのところに位置する。北側と南側はともに調査区外に広がる。方位は北に対して約１度西に振る。16間分を検出し、その検出長は約44ｍである。柱間1.5～2.3ｍの不等間。ピットの掘形は一辺0.3～0.6ｍの方形で、隅丸方形のものもある。深さは0.2～0.4ｍ。

柵３（図版16・22・23）　調査区東部で検出した南北方

向の柵で、東三行と四行の境界推定ラインから東へ約３ｍのところに位置する。北側は調査区外に広がる。ピット553や816は溝512に掘り込まれる。方位は北に対して約１度西に振る。８間分を検出し、その検出長は約27.5ｍである。柱間は2.8～3.6ｍの不等間。ピットの掘形は一辺0.4～0.8ｍ方形で、隅丸方形のものもある。深さは0.2～0.4ｍ。位置と傾きの関係から柵２と柵３は組合って機能していたと考えられる。柵間の幅は約４ｍで、この間が小径として利用されていた可能性がある。

柵４（図版16・22）　調査区東部で検出した南北方向の柵で、東三行と四行の境界推定ラインから東へ約４ｍのところに位置する。方位は北に対して約１度西に振る。６間分を検出し、その検出長は約13ｍである。柱間は2.1ｍの等間であるが、ピット528と642の間が2.7ｍとなっており広い。ピットの掘形は一辺0.5～0.7ｍの方形で、隅丸方形のものもある。深さは0.2～0.4ｍ。

柵５（図版17・22・23）　調査区東部で検出した南北方向の柵で、東三行と四行の境界推定ライン上にほぼ位置する。南側は調査区外に広がる。方位はほぼ正方位。12間分を検出し、その検出長は約33ｍである。柱間は2.1～4.3ｍの不等間。ピットの掘形は一辺0.3～0.7ｍの方形で、隅丸方形のものもある。深さは0.2～0.4ｍ。

柵６（図版17・23）　調査区南東部で検出した南北方向の柵で、東三行と四行の境界推定ラインから東へ約４ｍのところに位置する。方位はほぼ正方位。４間分を検出し、その検出長は約15ｍである。柱間は3.9ｍの等間。ピットの掘形は一辺0.3～0.4ｍ方形で、隅丸方形のものもある。深さは0.1～0.4ｍ。

柵４と柵６はほぼ同一ライン上に位置することから、一連の遺構と思われる。柵５と柵４・６は傾きの関係から同時に機能していた可能性がある。柵間の幅は４ｍ程度で、この間が小径として利用されていた可能性がある。

溝171（図14、図版27）　調査区中央部で検出した南北方向の溝で、東三行と四行の境界推定ラインから西へ1.5ｍのところに位置する。北端はＸ＝－112,001ｍ、南側は調査区外に広がる。検出長は12ｍである。溝の幅はＸ＝－112,006ｍ付近を境に変化し、南側の幅が広くなる。北側は幅0.5ｍ、深さ0.2ｍで、南側は幅1.5ｍ、深さ0.2ｍである。埋土から京都Ⅱ期新段階の土器類・瓦類が出土した。

溝450（図14、図版27）　調査区北西隅部で検出した東西方向の溝で、北小路南側溝と考えられる。南肩部のみを検出した。検出長2.0ｍ、検出幅1.5ｍ、深さ0.5ｍである。下層には水性堆積と考えられる黒褐色シルトが堆積する。溝の幅が1.5ｍ以上となっており、延喜式の規定より広い。埋土から京都Ⅱ期新段階の土器類・瓦類が出土した。

溝512（図14、図版22・23）　調査区東部で検出した南北方向の溝で、溝の中心を基準にすると東二行と三行の境界推定ラインから東へ1.5～２ｍのところに位置する。北側は調査区外に広がる。南側は調査区南壁際で端部を検出しているが、調査区外の南側に延長している可能性がある。検出長は46ｍである。幅1.0～2.5ｍ、深さ0.3～0.4ｍである。Ｘ＝－112,013ｍより南側では幅が広くなる。３時期にわたる溝を確認したが、出土土器にほとんど時期差がみられないことから短期間の

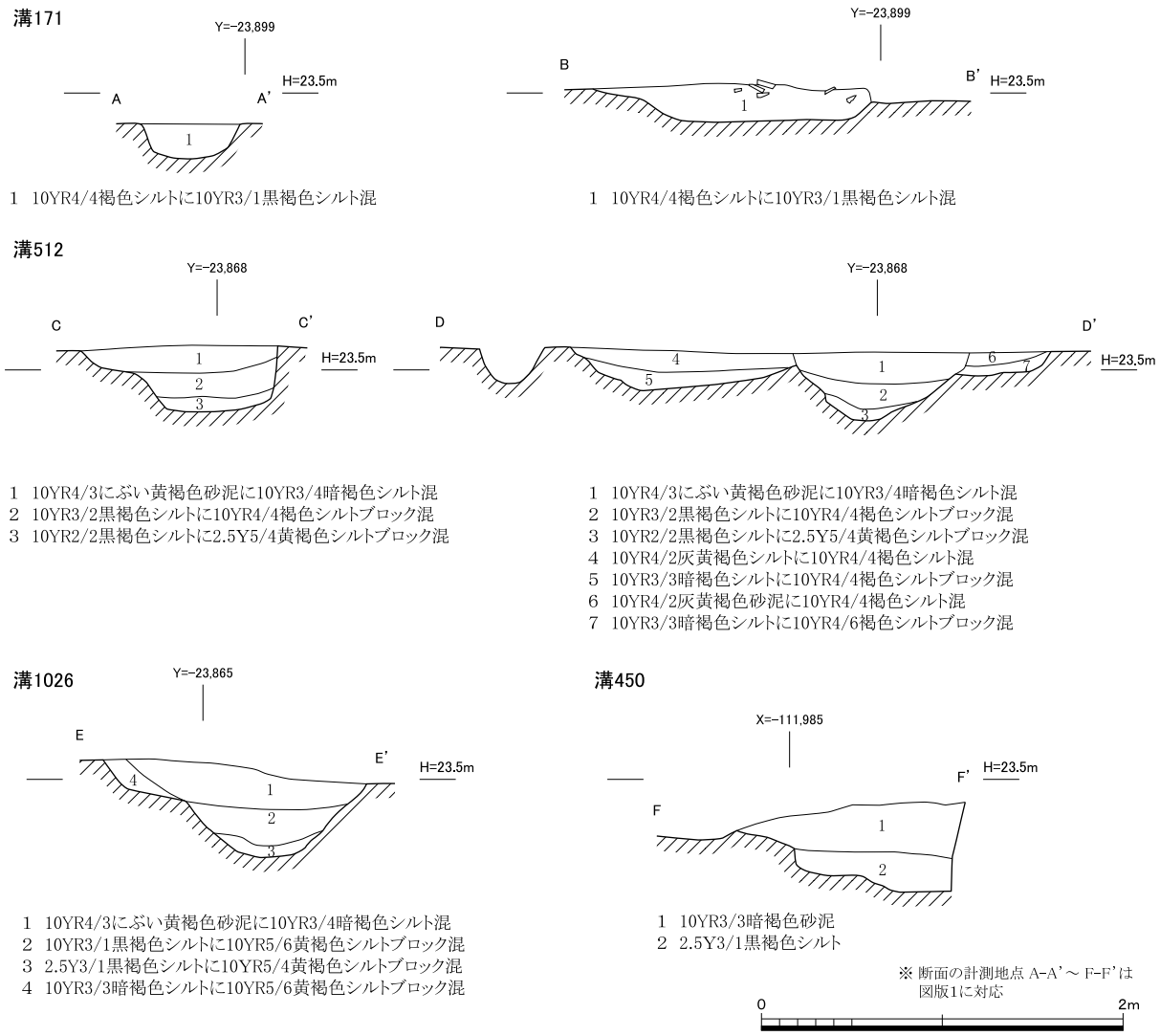


図14　溝171・450・512・1026断面図（1：40）

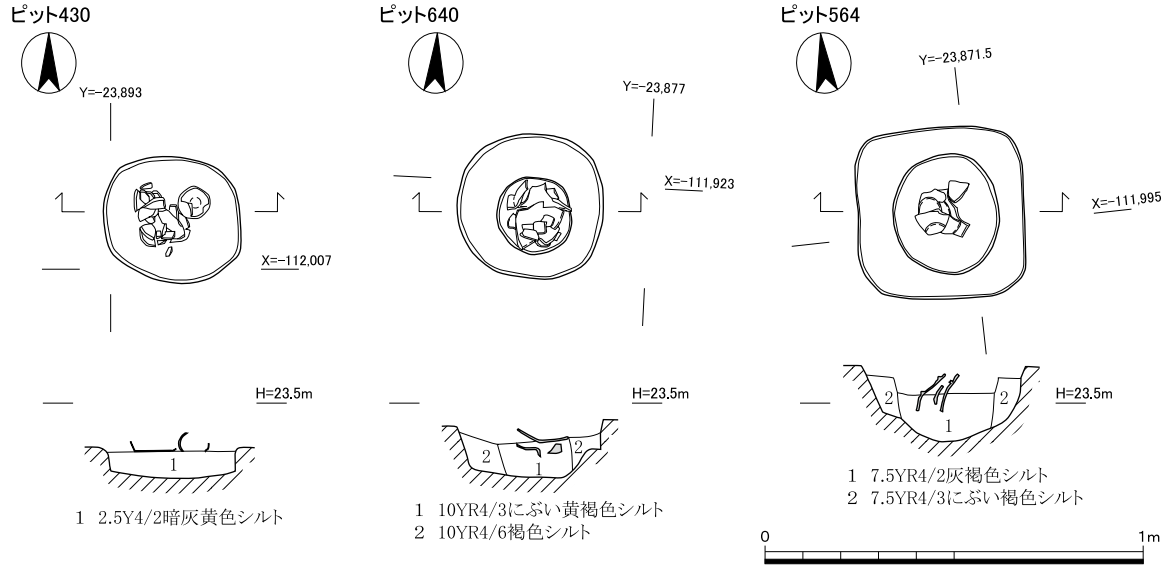


図15　ピット430・564・640実測図（1：20）

うちに造り替えられたようである。埋土から京都Ⅲ期古段階の土器類・瓦類や鉄滓が出土した。

溝529（図14、図版22）　調査区北東部で検出した南北方向の溝である。検出長約8.5ｍ、幅１ｍ、深さ0.3ｍである。

溝1026（図14、図版23）　調査区南東部で検出した南北方向の溝である。検出長約22ｍ、検出幅0.6～１ｍ、深さ0.3～0.7ｍである。Ｘ＝－112,021から南へ３ｍの間は、部分的に深くなる。埋土から京都Ⅲ期古段階の土器類・瓦類や鉄滓が出土した。溝529と溝1026は同一線上に位置することから、断続的ではあるが一連の溝と考えられる。埋土から京都Ⅲ期古段階の土器類・瓦類や銭貨の長年大宝・滑石製品・鉄滓が出土した。銭貨は状態が悪く図化できなかった。

溝512と溝529・1026の間は1.5～2.5ｍで、この間が小径として利用されていた可能性がある。

ピット430（図15、図版27）　調査区西部の掘立柱建物５の南側で検出した。掘立柱建物５の西側柱列の延長線上にあたり、建物の南西隅部から南に1.2ｍの位置にあたる。平面形は直径0.7ｍの円形で、深さ0.1ｍである。埋土から京都Ⅱ期新段階の瓶子と土師器皿が出土した。掘立柱建物５と関連する埋納遺構と考えられる。

ピット564（図15、図版28）　調査区北東部の掘立柱建物６の東側で検出した。掘立柱建物６の南側柱列の延長線上にあたり、建物の南東隅部から東に約２ｍの位置にあたる。平面形は一辺0.5ｍの方形で、深さ0.2ｍである。埋土から緑釉陶器や越州窯青磁、土師器甕が重なって出土した。出土した土器の時期は京都Ⅱ期新段階である。掘立柱建物６と関連する埋納遺構と考えられる。

ピット640（図15、図版28）　調査区北東部の掘立柱建物９の東側柱列ピット626から南側へ0.9ｍの位置で検出した。平面形は南北0.6ｍ、東西0.5ｍの楕円形で、深さ0.3ｍである。埋土から土師器甕、黒色土器椀が重なって出土した。出土した土器の時期は京都Ⅱ期新段階である。

ピット661（図版28）　調査区北東部で検出した長方形のピットである。平面形は南北0.5ｍ、東西0.6ｍで、深さ0.3ｍである。柱当たりからは軒丸瓦と軒平瓦が出土した。

ピット715　調査区北東部のピット661の北側2.4ｍの位置で検出した。平面形は一辺0.6ｍの隅丸方形で、深さ0.3ｍである。柱当たりからは軒平瓦が出土した。ピット661とピット715出土の軒平瓦が接合した。

註

１）　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

750頃			840頃			930頃			1010頃			1080～90頃			1180頃			1270頃			1360頃			1440頃			1500頃			1580～90頃			1660頃			1740年代頃			1820年代頃		
Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ			Ⅳ			Ⅴ			Ⅵ			Ⅶ			Ⅷ			Ⅸ			Ⅹ			Ⅺ			Ⅻ			XIII			XIV		
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

４．遺　　物

調査では整理コンテナにして56箱の遺物が出土した。出土遺物には、平安時代の土器・陶磁器類、土製品、瓦類が大部分を占める。図化していないが、鎌倉時代以降の土器・陶磁器類がわずかにある。土器・陶磁器類が９割を占め、瓦は１割弱である。遺物の時期は、主に平安時代前期後半から中期前半である。

以下では主要な遺構から出土した遺物について種別ごとに概要を述べる。

（１）土器類（図16～18・図版29）

井戸807出土土器（図16、図版29　１～10）　土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器が出土した。時期は京都Ⅱ期古段階である[8)]。

１～６は土師器である。１は小皿で、口径8.6㎝、器高1.7㎝である。外面にはオサエ痕が残る。２は椀で、口径12.8㎝、器高3.2㎝である。３・４は皿で、口径15.1～17.8㎝、器高2.1㎝である。外面はヘラケズリ。口縁部から内面はヨコ方向のナデ。５は甕で、口径10.3㎝、器高9.6㎝である。体部から口縁部は屈曲し、わずかに外反しながら立ち上がり、口縁端部は肥厚する。体部外面は上半が横方向のタタキ、下半が斜め方向のタタキである。内面はナデ。６は無頸壷で、口径13.6㎝、残存高11.0㎝である。口縁端部は面をなす。体部外面はハケ、口縁部はヨコ方向のナデ、内面はナデである。

７～10は須恵器である。７は杯で、口径11.9㎝、器高4.2㎝である。８は壷で、底径3.8㎝、残存高9.8㎝である。底部には糸切り痕が残る。９は甕で、口径17.3㎝、残存高7.2㎝である。口縁部は外反し、口縁端部は面をなす。体部外面はタタキ、口縁部はヨコ方向のナデである。10は鉢で、口径25.0㎝、残存高9.9㎝である。体部から口縁部にかけてはＳ字状に屈曲する。口縁部から体部内面にかけては回転ナデ。

井戸617出土土器（図16、図版29　11～20）　土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・製塩土器が出土した。11～15が掘形埋土16～20が枠内埋土から出土した。時期は掘形埋土が京都Ⅱ期古段階、枠内埋土が京都Ⅱ期新段階である。

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	土師器、白色土器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、製塩土器、土製品、瓦、木製品、石製品、金属製品、鉄滓		土師器28点、白色土器１点、黒色土器４点、須恵器15点、緑釉陶器９点、灰釉陶器６点、輸入陶磁器５点、製塩土器１点、土製品７点、瓦４点、木製品１点、石製品２点、金属製品３点、鉄滓15点		
合　計		68箱	101点（10箱）	０箱	58箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より12箱多くなっている。

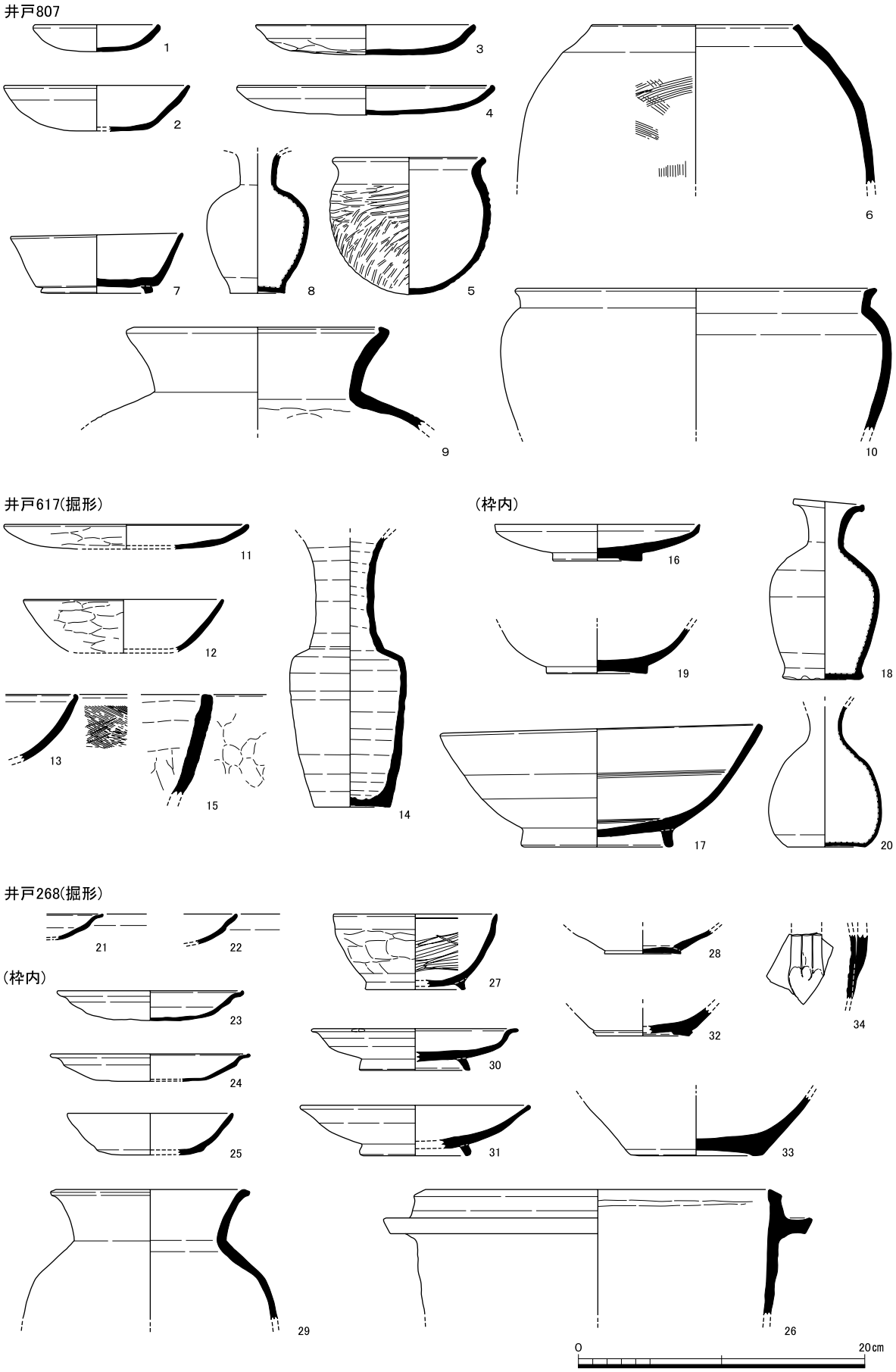


図16　井戸807・617・268出土土器実測図（1 ： 4）

11～13は土師器である。11は皿で、口径17.0㎝、残存高1.7㎝である。12は杯で、口径13.8㎝、器高3.8㎝である。11・12はともに口縁部から内面にかけてはヨコ方向のナデ、外面はケズリ。13は椀で、外面はハケメ。

14は須恵器の壷で、残存高18.8㎝、底径5.2㎝である。内外面ともに回転ナデ。底部には糸切り痕を残す。

15は製塩土器で、残存高7.0㎝である。外面はオサエ、内面には粘土紐痕が残る。

16～18は須恵器である。16は皿で、口径14.3㎝、器高2.6㎝、底径6.2㎝である。削り出し高台である。17は鉢で、口径22.0㎝、器高8.6㎝、底径12.0㎝である。体部外面の下半はケズリ、上半はナデのちミガキ、口縁部から体部内面はヨコ方向のナデ。内面には二条の沈線が巡る。貼り付け高台である。18は壷で、口径4.8㎝、器高7.6㎝、底径4.8㎝である。底部には糸切り痕を残す。

19は緑釉陶器の椀で、残存高3.2㎝、底径7.0㎝である。高台は削り出しによる平高台である。施釉は底部内・外面以外に淡緑色の釉薬を掛ける。

20は灰釉陶器の壷で、残存高9.8㎝、底径5.4㎝である。底部には糸切り痕を残す。

井戸268出土土器（図16、図版29　21～34）　土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器が出土した。21・22が掘形埋土、23～34が枠内埋土から出土した。いずれも時期は京都Ⅲ期古段階である。

21～26は土師器である。21・22は皿で、口縁部は外側に開き、口縁端部はつまみ上げる。23・24は皿で、口径12.9～13.9㎝、器高1.9～2.1㎝である。25は杯で、口径11.5㎝、器高2.9㎝である。26は羽釜で、口径14.0㎝、残存高8.8㎝である。外面に煤が付着する。

27は黒色土器の椀で、口径11.3㎝、器高5.3㎝、底径6.8㎝である。口縁部はヨコ方向のナデ、内面はミガキ、外面はケズリ。

28・29は須恵器である。28は鉢で、残存高1.5㎝、底径5.3㎝である。29は壷で、口径13.3㎝、残存高9.1㎝である。内外面ともにヨコ方向のナデ。

30は緑釉陶器の輪花皿である。口径14.8㎝、器高2.9㎝、底径7.6㎝である。貼り付け高台である。ヘラミガキを全面に施す。施釉は内外面に濃緑色の釉薬を掛ける。

31は灰釉陶器の皿で、口径15.9㎝、器高3.5㎝、底径7.0㎝である。

32～34は輸入陶磁器である。32・33は越州窯系青磁で、底径6.5・8.1㎝である。底部内・外面には目痕が残る。34は長沙窯系黄釉陶器の水注の把手部分である。

溝171出土土器（図17　35～45）　土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土した。時期は京都Ⅲ期古段階である。

35～39は土師器である。35・36は皿で、口径12.4㎝・13.4㎝、器高1.4㎝である。口縁部は外反しながら、外側に開く。37・38は杯で、口径14.1㎝・14.2㎝、器高2.1㎝・2.5㎝である。39は椀で、口径13.9㎝、器高3.8㎝である。口縁部から内面はナデ、外面にはオサエの痕跡が残る。

40は黒色土器の椀で、口径15.1㎝、器高4.5㎝である。内面のみ炭素が吸着する。

41～43は須恵器である。41は杯で、口径12.0㎝、器高3.9㎝、底径7.2㎝である。42は鉢で、口

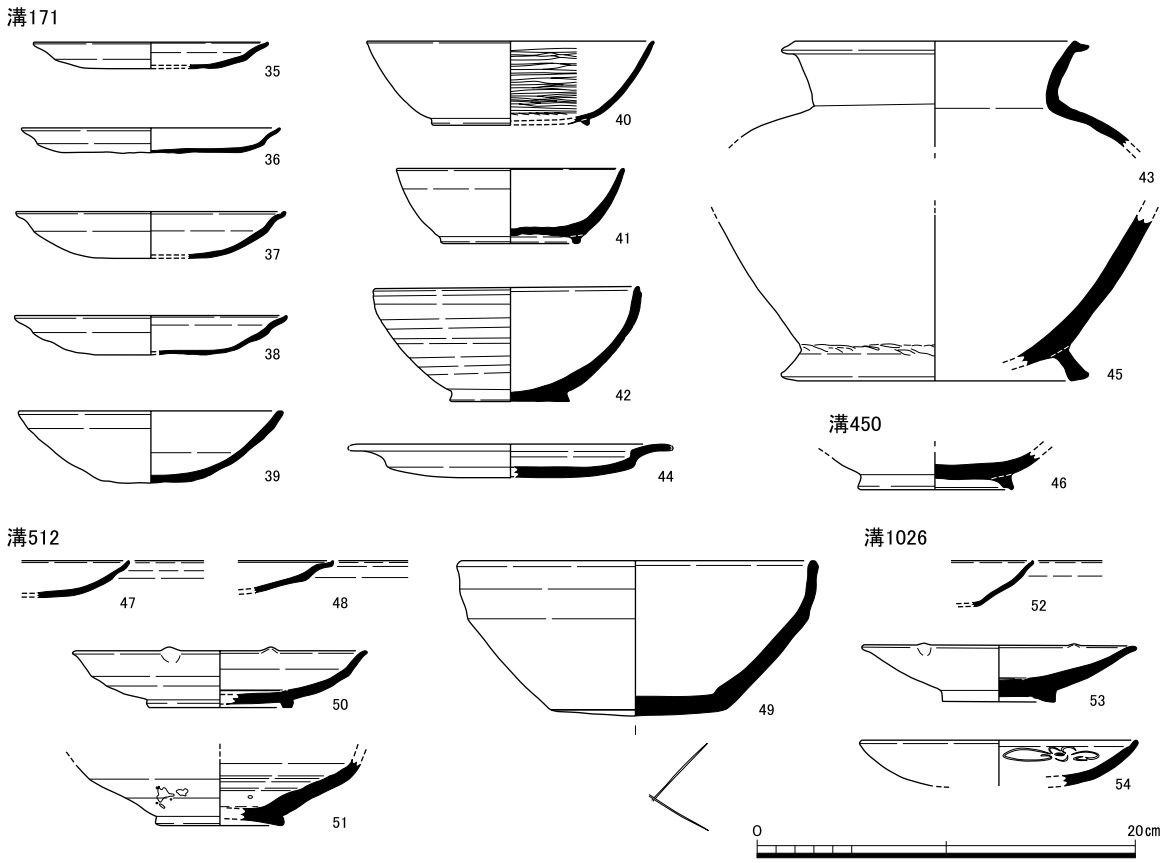


図17　溝171・450・512・1026出土土器実測図（1：4）

径13.8cm、器高6.1cm、底径6.4cmである。外面にはヨコ方向のナデが強く残る。43は甕で、口径14.8cm、残存高5.6cmである。体部から口縁部にかけて屈曲し、口縁端部は外側につまみ出す。

44は緑釉陶器の三足盤で、口径17.2cm、器高1.8cmある。ヘラミガキを底部内・外面に密に施す。施釉は全面に淡緑色の釉薬がかかる。

45は灰釉陶器の台付短頸壷で、残存高8.6cm、底径16.2cmである。内面には釉がかかる。

溝450出土土器（図17　46）　土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土した。時期は京都Ⅲ期古段階である。

46は緑釉陶器の椀で、残存高2.0cm、底径8.0cmである。底部外面には糸切り痕が残る。貼り付け高台である。ヘラミガキを底部内面に施す。施釉は全面に淡緑色の釉薬を掛ける。

溝512出土土器（図17　47～51）　土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器が出土した。時期は京都Ⅲ期古段階である。

47・48は土師器の皿である。48の口縁部は外反しながら外側に広がり、端部は上方につまみ上げる。

49は須恵器の鉢で、口径18.5cm、器高8.2cm、底径9.0cmである。口縁部から内面はヨコ方向のナデ、外面はケズリ。底部外面にヘラ記号がある。

50は緑釉陶器の輪花皿で、口径15.4cm、器高3.0cm、底径7.6cmである。底部内面には沈線が巡る。削り出し高台である。ヘラミガキを底部内面に施す。施釉は底部外面以外に濃緑色の釉薬を掛ける。

51は輸入陶磁器の長沙窯系黄釉陶器の椀で、残存高3.3㎝、底径6.8㎝である。底部には糸切り痕が残る。

溝1026出土土器（図17　52～54）　土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土した。時期は京都Ⅲ期古段階である。

52は土師器の皿である。

53・54は緑釉陶器である。53は輪花皿で、口径14.4㎝、器高3.0㎝、底径6.0㎝である。削り出し高台である。ヘラミガキを底部内面に施す。施釉は底部外面以外に濃緑色の釉薬を掛ける。54は皿で、口径14.6㎝、残存高2.4㎝である。内面には印刻で蝶が描かれる。施釉は内外面にわずかに釉薬を掛ける。

ピット430出土土器（図18　55・56）　土師器・須恵器が出土した。時期は京都Ⅱ期古段階である。

55は土師器皿である。56は須恵器の壷で、残存高7.9㎝、底径4.2㎝である。底部外面には糸切り痕が残る。

ピット564出土土器（図18、図版29　57～59）　土師器・緑釉陶器・輸入陶磁器が出土した。時期は京都Ⅱ期新段階である。

57・58は緑釉陶器の皿で、口径13.8～14.2㎝、器高3.0～3.2㎝、底径7.0～7.2㎝である。どちらもヘラミガキを全面に施す。施釉は内外面に淡緑色の釉薬を掛ける。

59は輸入陶磁器の越州窯系青磁椀で、残存高3.1㎝、底径7.0㎝である。底部内面と外面には目痕が残る。

ピット640出土土器（図18　60～62）　土師器・黒色土器が出土した。時期は京都Ⅱ期新段階である。

60・61は土師器の甕で、それぞれ口径22.4㎝・23.0㎝、残存高6.7㎝・7.0㎝である。60は、球形の体部から口縁部が強く屈曲し、口縁端部は面をなす。口縁部はヨコ方向のナデ、内面にはオサエの痕跡が残る。河内産。61は、長胴の体部から口縁部が「く」の字状に屈曲し、口縁端部は肥厚する。口縁部はヨコ方向のナデ、外面はタタキ。

62は黒色土器の椀で、口径19.2㎝、器高6.0㎝、底径9.4㎝ある。内面のみ炭を付着させる。

ピット1071出土土器（図18　63）　土師器・須恵器が出土した。時期は京都Ⅱ期新段階である。

63は須恵器の杯で、口径12.0㎝、器高4.5㎝、底径8.1㎝である。

ピット742出土土器（図18　64）　土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器が出土した。

64は黒色土器の椀で、口径14.6㎝、器高5.7㎝、底径8.2㎝である。

土坑510出土土器（図18　65）　土師器・白色土器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土した。

65は白色土器の皿で、口径12.6㎝、残存高2.8㎝である。表面が摩滅しているため、調整は不明瞭である。

ピット125出土土器（図18　66）　66は灰釉陶器の椀で、口径14.2㎝、器高4.7㎝、底径6.6㎝で

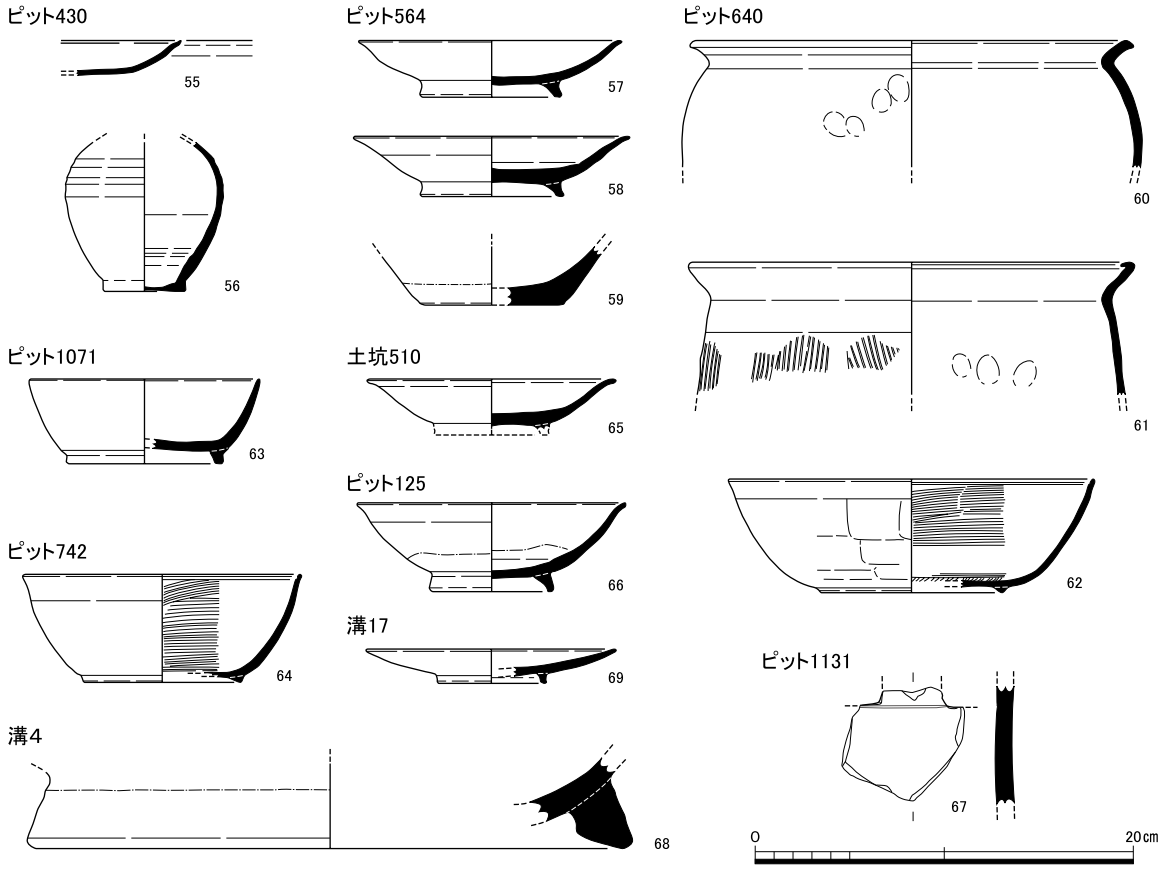


図18　その他の遺構出土土器実測図（１：４）

ある。時期は京都Ⅱ期新段階である。

ピット1131出土土器（図18　67）　67は緑釉陶器の火舎で、残存幅6.5㎝、残存高6.1㎝である。透かし孔が２箇所確認できる。外面には横方向の沈線が１条めぐる。

溝４出土土器（図18　68）　遺構の時期は室町時代以降と考えられるが、埋土には平安時代の土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器が含まれる。68は灰釉陶器の台付鉢で、残存高4.1㎝、底径28.5㎝の大型品である。底部内面と高台外面には釉がかかる。

溝17出土土器（図18　69）　遺構の時期は江戸時代以降であるが、埋土には平安時代の土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・施釉陶器が含まれる。69は灰釉陶器の皿で、口径13.2㎝、器高1.8㎝、底径5.4㎝である。

（２）土製品（図19、図版30）

土馬（土１～３）　５点出土しているが、２点は小片のため図化していない。図化した３点はいずれも手びねりで、表面には指オサエの痕跡が残る。大きさは大小２種類あり、土１・２が小型品、土３が大型品である。

土１は頭部・脚部を欠損する。残存長6.0㎝、残存高4.2㎝、幅3.6㎝である。溝171から出土した。土２は頭部・脚部・尾部を欠損する。残存長5.8㎝、残存高4.9㎝、幅3.6㎝である。ピット1071から出土した。土３は脚部を全て欠損する。残存長9.5㎝、残存高6.4㎝、幅3.8㎝である。ピット

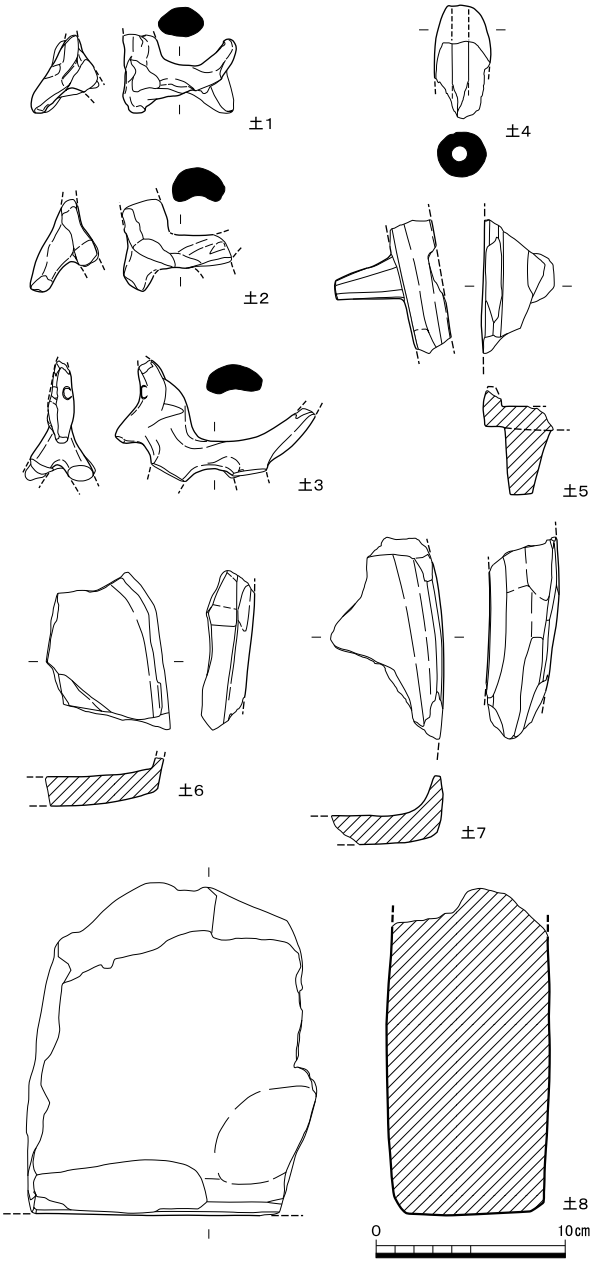


図19　土製品実測図（１：４）

286から出土した。

土錘（土４）　土４は平面形が棗形の土錘である。端部を欠損する。残存長6.0㎝、最大幅3.0㎝、孔径0.8㎝、重量25ｇである。溝512から出土した。

硯（土５～７）　３点出土した。全て風字硯である。

土５は陸部で、脚部が１箇所残存する。外堤は硯面から直立し、脚部はタテ方向のケズリにより多角形である。裏面と側面には灰釉が施される。硯面は使用により平滑となっている。溝512から出土した。土６と土７も陸部の破片である。粘土板の端を折り曲げて成形し、外提外面はヨコ方向のケズリで調整する。土６の硯面は使用により平滑となっており、墨痕が残る。土７の硯面には自然釉がみられる。中心部はやや平滑となっている。土６は溝450、土７は井戸268掘形から出土した。

塼（土８）　土８は塼である。残存長15.6㎝、残存幅18ｍ、厚さ9㎝である。表面はハケメで縁部はケズリ、裏面と側面はケズリ。角部は面取りする。色調は外面が灰白色で一部黒色、断面は灰白色である。胎土には５㎜までの黒色・白色砂粒を多く含む。井戸807枠内埋土から出土した。

（３）瓦類（図20、図版30）

軒丸瓦（瓦１・２）　瓦１は重圏文軒丸瓦である。溝512から出土した。圏線の断面形は三角形である。外区外縁の一部には指オサエが残り、歪んでいる。瓦当裏面はナデ。色調は外面が暗褐色、内面が褐色である。胎土には１㎜までの白色・赤色砂粒をわずかに含む。

瓦２は重圏文軒丸瓦である。ピット661から出土した。圏線の断面形は三角形である。瓦当裏面はナデ。色調は外面が暗褐色、内面が褐色である。胎土には１㎜までの白色・赤色砂粒をわずかに含む。時期は奈良時代。

軒平瓦（瓦３・４）　瓦３は唐草文軒平瓦である。ピット661と715から出土したものが接合した。中央の方形区画に縦方向に珠文を３点配置する。方形区画の中央はやや盛り上がる。曲線顎、

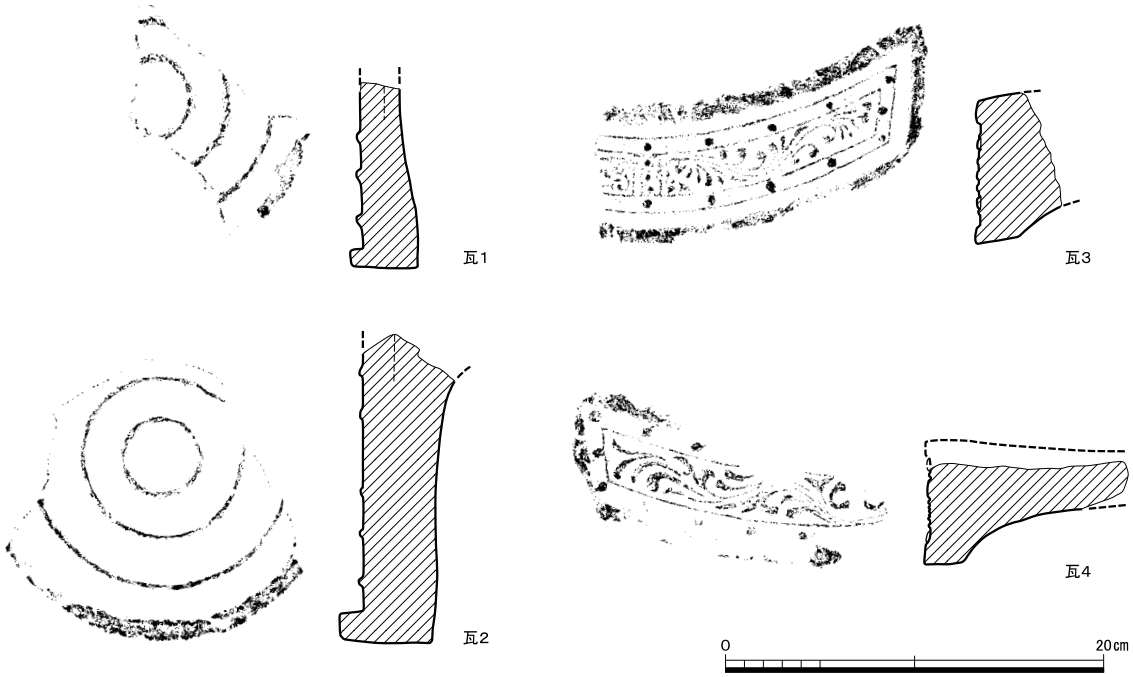


図20　軒丸瓦・軒平瓦拓影及び実測図（１：４）

図21 「大伴」銘軒平瓦の改刻（拓影１：６）

調整は表面の摩滅が著しいため不明。色調は外面・断面ともに灰白色である。胎土には５㎜までの白色砂粒を多量に含む。時期は平安時代前期。笵傷から「大伴」銘軒平瓦（図21）と同笵関係にあり[1)]、方形区画内が改刻されていることが確認できた[2)]。

瓦４は唐草文軒平瓦である。井戸268から出土した。中心飾りは、C字形を向い合せに配置する。曲線顎、瓦当部凹面はヨコケズリ、顎部凸面ヨコケズリ、顎部裏面タテナデ、平瓦部凹面布目痕、側面ケズリ。色調は外面・断面ともに灰白色である。胎土には15㎜までの白色砂粒を少量含む。時期は平安時代中期。

（４）木製品（図22、図版30）

柄杓（木１）　木１は井戸268の枠内埋土から出土したヒョウタン製の柄杓である。柄と容器の一部を欠損する。容器部は土圧の影響で歪んでいる。残存長29.5㎝、幅10.2㎝、高さ10.5㎝である。

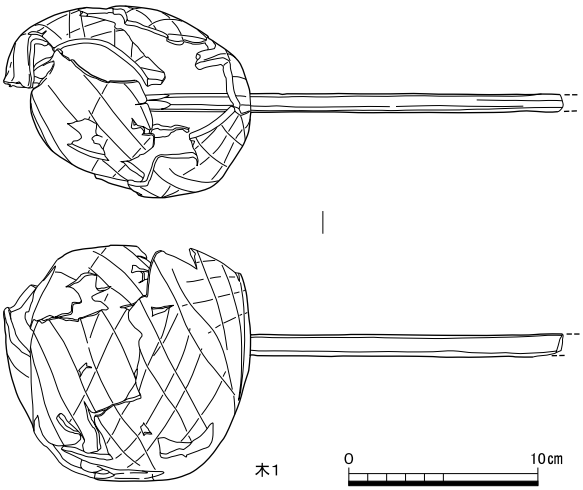


図22　木製品実測図（１：４）

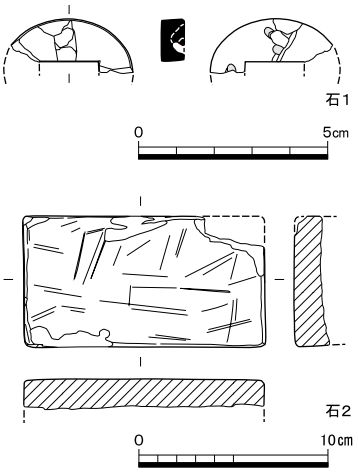


図23　石製品実測図
（石１は１：２、石２は１：４）

ヒョウタンの実の下半部を利用して容器部としている。柄は容器部を貫通する。容器の外面には斜格子状の線刻がある。

（５）石製品（図23、図版30）

石製銙具（石１）　石１は丸鞆で、下半部を欠損し、潜り孔と垂孔の一部が残る。色調は淡緑灰色。残存長1.5㎝、残存幅3.2㎝、厚さ0.6㎝、重量3.6ｇである。ピット129から出土した。

滑石製品（石２）　石２は板状の滑石製品で、平面形は長方形である。背面を欠損する。長さ12.9㎝、幅7.0㎝、残存厚1.9㎝である。表面と側面には製作に伴うと考えられる擦痕がみられる。溝1026から出土した。

（６）金属製品（図24、図版30）

銅製品（金１）　金１は平面形が爪形、断面形が「ロ」の字形の中空の銅製品である。一部欠損する。残存長1.5㎝、幅2.1㎝、厚さ0.5㎝である。溝1026から出土した。

鉄釘（金２・３）　金２・３は鉄釘である。２点とも頭部から体部が逆「L」字状となる。金２は、先端部を欠損する。残存長4.3㎝、幅1.5㎝、厚さ1.0㎝である。溝512から出土した。金３は、完形品である。長さ4.7㎝、幅1.4㎝、厚さ0.8㎝である。表面には木質がみられる。井戸268から出土した。

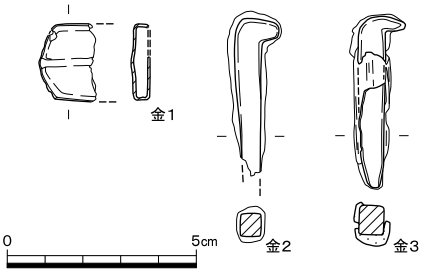


図24　金属製品実測図（１：２）

（７）鍛冶関連遺物（図25、表４、図版30）

鉄滓が平安時代の遺構から15点が出土した。うち５点を図化し、これ以外については一覧表にまとめた。鍛冶関連の遺物は、１～３区にわたってピットや溝から出土しているが、２区と３区の東半で散在的に出土した。出土した遺構はピットから６点、溝から９点で、溝512と溝1026からの

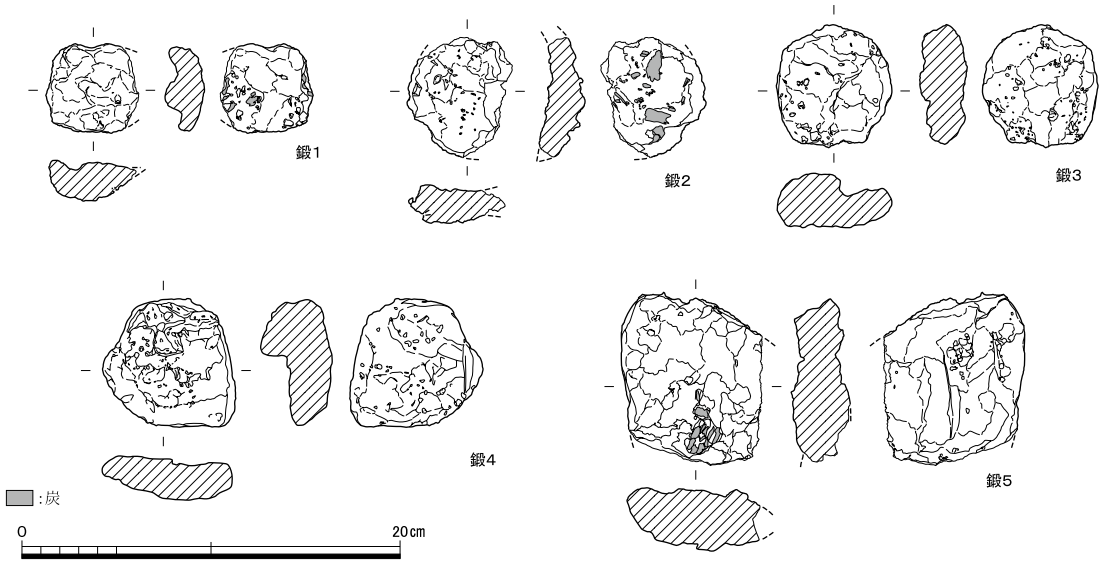


図25　鉄滓実測図（１：４）

出土率が高く、計９点が出土している。

出土した鉄滓はいずれも椀形滓で、平面形は円形や多角形である。表面の中央部がわずかに窪み、底面は滑らかである。大きさから大中小の３つに分けることかができる。鍛１は小型で、一部欠損する。長軸4.9㎝、短軸4.7㎝、厚さ1.0～2.0㎝、重量50ｇである。底面には炭がみられる。炉底粘土の付着はみられない。溝512から出土した。鍛２～４は中型である。長軸6.3～6.8㎝、短軸5.6～7.1㎝、厚さ2.1～3.8㎝、重量66～159ｇである。鍛２の底面には炭がみられる。鍛４の表面は一部が突出しており、その周辺がガラス質化している。鍛２は溝512、鍛３は溝1026、鍛４は柵２のピット1042から出土した。鍛５は大型で、長軸8.1㎝、短軸7.4㎝、厚さ4.1㎝、重量275ｇである。１区掘立柱建物10のピット463から出土した。

表４　鉄滓一覧表

番号	地区	出土遺構	法量(㎜)			重量(g)
			長軸	短軸	厚さ	
鍛1	3区	溝512	49	47	21	50
鍛2	2区	溝512	(63)	(56)	21	66
鍛3	3区	溝1026	65	61	29	156
鍛4	3区	ピット1042 柵2	68	71	38	158
鍛5	1区	ピット463 建物10	(81)	(74)	41	275
鍛6	3区	溝512	(71)	(46)	23	100
鍛7	3区	溝512	42	27	20	25
鍛8	3区	溝512	56	29	19	42
鍛9	3区	溝512	65	38	25	92
鍛10	3区	溝1026	82	62	23	143
鍛11	3区	溝1026	68	57	28	105
鍛12	1区	ピット31	(62)	55	18	57
鍛13	1区	ピット31	(36)	20	10	10
鍛14	1区	ピット31	60	34	26	66
鍛15	2区	ピット766 建物10	42	31	27	23

註

１）『平安京左京四条一坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－10　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年

２）「『大伴』銘が、何から来たか不明であるが、弘仁十四年四月十六日、大伴の名が新たに即位された淳和天皇の諱に当たるため、それを避けて、大伴氏を伴氏と改めしめた記事（日本後記）がある。以来『大伴』銘の瓦は製作を停止したであろう。」とし、瓦が製作されたのは弘仁十四年（823）以降と考えられている。

『財団法人真言宗京都学園洛南高等学校新築体育館用地　埋蔵文化財調査報告』　東寺境内発掘調査団洛南高校班　1981年

５．まとめ

本調査では平安京右京七条一坊十二町北西部の調査を行い、平安時代前期後半から中期にかけての建物・井戸・柵・溝などを検出した。宅地利用の変遷は３時期に分けることができ、１期は９世紀中葉、２期は９世紀後葉から10世紀初頭、３期は10世紀前葉から中葉にあたる。

東三行と東四行の境は南北方向の柵と溝によって区画される。時期によって区画施設が異なるようで１期では柵１、２期以降は溝171による。これによって東三行と東四行は別宅地として分けられ、宅地が東西に２つ並んであったことがわかる。ここでは始めに宅地ごとの建物変遷について述べ、次に小径や鍛冶関連遺物にも触れた上で、最後に宅地の性格についてまとめていきたい。

東三行の宅地

１期では建物６～８・11の４棟がある。宅地の北半部に３棟が集中し、北東隅部に東西棟の建物６が位置する。建物６の東側柱列の延長線上に建物８の東側柱列、南側柱列の延長線上に建物７の北側柱列が筋を通して配置される。また、調査区南半には建物11が単独で位置する。

２期では建物９・12・13の３棟がある。建物９の西側柱列の延長線上に建物13の東側柱列が位置する。建物配置と規模は１期をほぼ踏襲するが、その位置は建物９が１期建物６から柱間２間分を西側へ移動するが、その規模は同じである。建物12については、１期建物11と同じ場所に同規模で建て直しがされている。建物13は１期建物７から柱間１間分を東側へ移動し、規模と構造にも変化が見られる。南北棟の建物７と建物13の規模は、東三行の宅地内で最大規模の建物であるが、柱穴掘形が小規模かつ柱間が不均等で、主屋とは考えがたい。

３期になると、建物配置に大きな変化が見られ、宅地北西部に建物10の１棟のみとなる。また、建物規模も縮小している。

東四行の宅地

１期では宅地北東部に建物５の１棟のみがある。本調査で検出した建物の中では規模が大きく、梁行２間（4.8ｍ）、桁行５間（12.8ｍ）の身舎に南庇（2.7ｍ）が付く。柱穴掘形規模も他の建物に比べると大きく、平面形も整った隅丸方形をしたものが多い。

２期では建物１～３の３棟があり、建物の中軸線と東四行の東西の中心に合わせるように、南北方向に並ぶ。建物１の南北に小規模な建物２と建物３が１棟ずつ位置し、１期とは建物配置が大きく変化する。建物１は１期建物５の身舎とほぼ同規模だが南庇が省略され、その規模を縮小させる。

３期では建物４が１棟のみとなり、２期建物１と同じ位置に建てられる。建物４は梁行２間（4.4ｍ）、桁行５間（12.0ｍ）の身舎に北側（1.5ｍ）と南側（2.4ｍ）の２面に庇が付く。身舎の規模は縮小するものの、庇を含めた規模は本調査で最大である。

宅地の規模と構造

宅地の規模と構造については、その様相が捉えやすい東三行の宅地から見ていくことにする。まず規模については、宅地境の東西両端を確認することができ、東側は柵１ないし溝171、西側は後

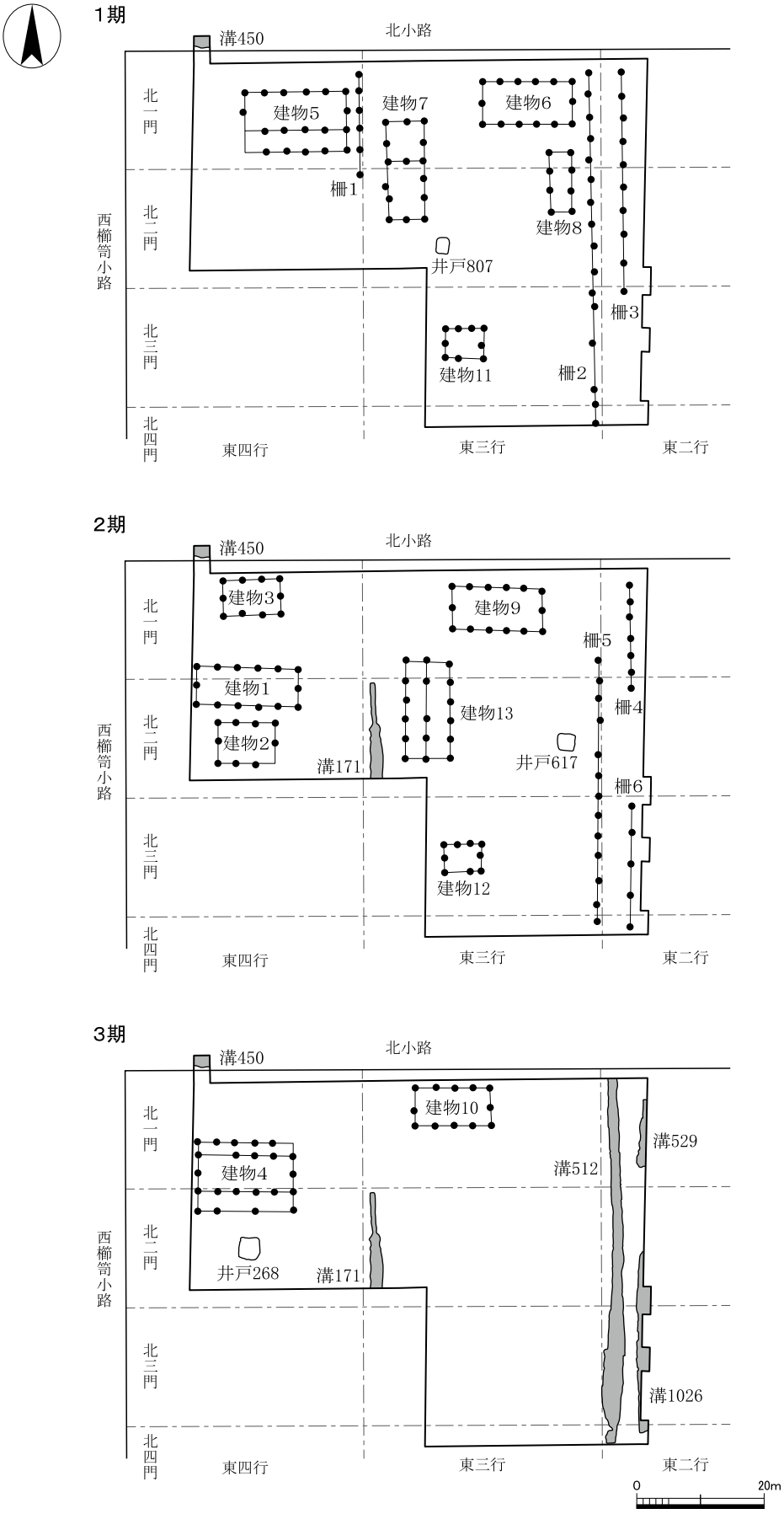


図26　遺構変遷図（1：1,000）

表５　建物一覧表

建物番号	方　向	桁　行		梁　行		庇		面　積 ( )内は身舎	性　格	時　期
		間数	規模	間数	規模	方向	規模			
建物５	東西棟　南庇	5間	12.8m	2間	4.8m	南	2.7m	96㎡（61㎡）	主屋	1期
建物６	東西棟	5間	11.2m	2間	5.3m			60㎡	主屋	1期
建物７	南北棟	5間	12.3m	2間	4.8m			59㎡	副屋	1期
建物８	南北棟	3間	7.6m	1間	2.6m			20㎡	副屋	1期
建物11	東西棟	3間	4.8m	2間	3.6m			17㎡	副屋	1期
建物１	東西棟	5間	12.8m	2間	4.8m			61㎡	主屋	2期
建物２	東西棟	3間	7.2m	2間	5.2m			37㎡	副屋	2期
建物３	東西棟	3間	7.2m	2間	4.4m			32㎡	副屋	2期
建物９	東西棟	5間	11.3m	2間	5.4m			61㎡	主屋	2期
建物12	東西棟	3間	4.8m	2間	3.6m			17㎡	副屋	2期
建物13	南北棟	5間	12.4m	2間	5.6m			69㎡	副屋	2期
建物４	東西棟　南北庇	5間	12.0m	2間	4.4m	北	1.5m	100㎡（53㎡）	主屋	3期
						南	2.4m			
建物10	東西棟	4間	9.6m	2間	4.8m			46㎡	主屋か？	3期

に述べる小径によって区画される。宅地北端は北小路で、南端に関しては北三門と北四門の境で区画施設が検出されていないため、少なくとも北四門も同一宅地と考えるのが自然である。また、建物が小規模であることも踏まえると、宅地は小規模で北一門から北四門までを占める１/８町規模（四戸主）の宅地と想定される。次に構造は、１期・２期の宅地の北半に２～３棟の建物と井戸が集中する。一方、南半には小規模な建物が１棟あるだけで顕著な遺構は見られず、空閑地であった。宅地の北半と南半では利用方法が異なっていたようで、北半は居住エリア、南半の空閑地は耕作地などとして利用されていたと思われる。

東四行の宅地については、調査面積が東三行の宅地に比べ狭く宅地規模・構造ともに不明瞭な部分が多いが、建物規模や構造、空間利用のあり方から東三行の宅地と同規模程度と考えられよう。

西市周辺では小規模宅地の様相がわかる調査事例（表１－調査４・12・17～19）が比較的まとまって確認されている。特に、本調査地北西の右京七条一坊十四町（調査４）で今回の調査と同様の１/８町規模と想定される宅地の変遷が明らかになっている。宅地規模や建物構造・規模に共通性が見られ、この時期の中小規模宅地の一類型と見ることができよう。

小径

小径は、１期・２期には柵２～６によって構成されるが、３期になると柵から溝へ変化する。西側溝は溝512、東側溝は529・1026である。その構造が柵から溝に変化しながらも維持されつづけたことがわかる。また、時期が下がるごとに東側に移動していくが、１期と２期の柵間の距離はほぼ変わらず、約４ｍを維持する。３期の溝芯々間の距離は不明であるが、東西両側溝を同規模と想定すると溝芯々間は４ｍ程度となり、１期・２期の小径の幅と同じである。

延喜式[1)]の記載によると「凡町内開小徑者。大路邊町二。廣一丈五尺。市人町三。廣一丈。自餘町一。廣一丈五尺」とある。本調査例の小径幅は延喜式の規程に近いかたちで施工されていたことが

わかる。ただし、これまでの検出事例[2)]を見てみると幅３ｍ（１丈）以下のものもあり、京内の小径が必ずしも延喜式の規程通りに施工された訳ではない。

鍛冶関連遺物

鍛冶関連遺物として鉄滓が15点出土している。平安時代前期から中期の京内の発掘調査で見つかった鍛冶関連遺物の出土数としては最多である。ただし、坩堝や鞴羽口といった関連遺物や遺構は検出されなかった。鉄滓の自然科学分析（付章）の結果、分析を行った５点は椀形の鍛錬鍛冶滓であることがわかった。うち１点の鍛１（HEI-3）の内部に残る小形の鉄片は、その金属組織痕跡から、刃部をもつ鉄製品を製作するのに適した高炭素鋼が用いられていたことが明らかになった。この時期の平安京内での鍛冶関連遺構・遺物の出土数はわずかで、金属器生産や加工の実態は不明瞭であるが、今回出土した椀形滓は、その一端を垣間見ることができる重要な資料である。

今回の調査によって七条以南に位置する１/８町規模の小規模宅地の様相が明らかになった。その規模や立地から居住者は六位以下の下級官人であったと考えられる。加えて、鉄滓の出土から市周辺の手工業生産の実態についても明らかになった。遺構自体が見つかっていないため、金属器生産が今回の調査で確認した宅地内で行われていたのか、周辺に工房などが存在したのかは不明である。今後の調査によって、平安京内の金属器生産の様相が把握されることに期待したい。

註

１）『延喜式』左京職京程

２）小檜山一良「まとめ（２）小径に関して」『平安京右京六条二坊三・六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007－14　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2008年

付章　鉄滓の分析調査

日鉄テクノロジー株式会社

１．はじめに

平安京右京七条一坊十二町跡では、発掘調査に伴い10世紀前半と推定される土坑や溝跡から鉄滓が複数出土している。発掘調査地区内で鍛冶炉跡などは確認されていないが、地域周辺で鉄器が生産されていたと推測される。そこで鉄器生産の実態を検討するため、出土鉄滓の調査を実施した。

２．調査方法

２－１．供試材

出土鉄滓５点を調査した（表６）。

２－２．調査項目

（１）外観観察

調査前の観察所見を記載した。

（２）顕微鏡組織

鉄滓の鉱物組成や金属鉄部の組織観察を目的とする。遺物の特徴から観察位置を決めて切り出し、エメリー研磨紙の#150、#320、#600、#1000、およびダイヤモンド粒子の３μｍと１μｍで順を追って研磨し、顕微鏡試料を作成した。試料面を金属反射顕微鏡で観察後、特徴的・代表的な視野を選択して写真を撮影した。

（３）化学組成分析

鉄滓の定量分析を実施した。測定元素と分析方法は以下の通りである。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）：燃焼容量法、硫黄（S）：燃焼赤外吸収法。

表６　供試材の履歴と調査項目

符号	地区	出土位置	番号	遺物名称	推定年代	計測値		金属探知器反応	調査項目	
						大きさ(mm)	重量(g)		顕微鏡組織	化学分析
HEI-1	1区	ピット463 建物10	鍛5	椀形鍛冶滓	10c代前半	81×74×41	275	なし	○	○
HEI-2	3区	ピット1042	鍛4	椀形鍛冶滓	10c代前半	68×71×38	158	なし	○	○
HEI-3	3区	溝512	鍛1	椀形鍛冶滓(含鉄)	10c代前半	49×47×21	50	なし	○	○
HEI-4	3区	溝512	鍛6	椀形鍛冶滓	10c代前半	80×46×23	100	なし	○	○
HEI-5	3区	溝512	鍛9	椀形鍛冶滓	10c代前半	65×38×25	92	なし	○	○

二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO_2）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）：誘導結合プラズマ発光分光分析法。

３．調査結果

HEI－１：椀形鍛冶滓

（１）外観観察：やや大形で厚手の椀形鍛冶滓の破片（275g）である。弱い着磁性がある。表面には淡褐色の土砂や茶褐色の銹化鉄が付着するが、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は暗灰色で、上下面は木炭痕が多数残存しており、微細な木炭破片も複数付着する。側面１面は直線状の破面で、中小の気孔が散在するが、重量感のある滓である。

（２）顕微鏡組織：図27①②に示す。滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。

（３）化学組成分析：表７に示す。全鉄分（Total Fe）45.33％に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.07％、酸化第１鉄（FeO）が40.69％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）19.49％の割合であった。造滓成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）は33.74％で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）の割合は2.47％であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.26％、バナジウム（V）が＜0.01％と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は0.18％、銅（Cu）も0.01％と低値であった。

当鉄滓は製鉄原料の起源の脈石成分〔砂鉄（含チタン鉄鉱）：TiO_2、V、鉄鉱石（塊鉱：CaO、MgO、Cu）〕の含有割合が極めて低く、鉄酸化物と粘土溶融物（SiO_2主成分）主体の滓であった。この特徴から、鍛錬鍛冶滓と推定される。

HEI－２：椀形鍛冶滓

（１）外観観察：やや偏平な椀形鍛冶滓（158g）である。弱い着磁性がある。上面端部には黒色ガラス質滓が付着している。これは羽口先端の溶融物と推測される。鍛冶滓の地の色調は灰褐色で、表面はやや風化気味である。表面には、黄～茶褐色の銹化鉄が薄く部分的に付着するが、まとまった鉄部はみられない。また下面には部分的に薄く灰褐色の鍛冶炉床土が付着する。

（２）顕微鏡組織：図27③④に示す。③上側の暗灰色部はガラス質滓（粘土溶融物）である。③の下側および④は鍛冶滓で、白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また滓中の微細な明白色粒は金属鉄である。

（３）化学組成分析：表７に示す。鍛冶滓部分を供試材とした。全鉄分（Total Fe）54.61％に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.04％、酸化第１鉄（FeO）が55.57％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）16.26％の割合であった。造滓成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）23.35％で、このうち塩基

性成分（CaO + MgO）の割合は1.44％である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.26％、バナジウム（V）が＜0.01％と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は0.09％、銅（Cu）も＜0.01％と低値であった。

当鉄滓も製鉄原料の起源の脈石成分の含有割合が極めて低く、鉄酸化物と粘土溶融物（SiO_2主成分）主体の滓であった。鍛錬鍛冶滓と推定される。

HEI－3：椀形鍛冶滓（含鉄）

（1）外観観察：小形で偏平な椀形鍛冶滓の破片（50g）である。広い範囲で黄褐色の土砂が付着しており、着磁性も強いが金属探知器反応はみられない。滓の地の色調は灰褐色で、気孔は少なく緻密である。

（2）顕微鏡組織：図27⑤～⑦に示す。滓中には比較的まとまりのよい銹化鉄（⑤の青灰色～暗灰色）部が確認された。⑥⑦の右側は銹化鉄部の拡大である。内部には針状のセメンタイト（Cementite：Fe_3C）痕跡が残存する。本来は過共析（C＞0.77％）組織の高炭素鋼であったと推定される。一方、⑥の左上は鍛冶滓部分の拡大である。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

（3）化学組成分析：表7に示す。全鉄分（Total Fe）53.70％に対して、金属鉄（Metallic Feは）0.06％、酸化第1鉄（FeO）40.40％、酸化第2鉄（Fe_2O_3）31.79％の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O）は20.06％で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）の割合は2.13％であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.25％、バナジウム（V）が＜0.01％であった。また酸化マンガン（MnO）は0.13％、銅（Cu）は0.01％であった。

当鉄滓も滓部は製鉄原料の起源の脈石成分の含有割合が極めて低く、鉄酸化物と粘土溶融物（SiO_2主成分）主体であった。鍛錬鍛冶滓と推定される。また滓中には、小形であるが比較的まとまった銹化鉄部が確認された。その内部には過共析（C＞0.77％）組織が残存しており、高炭素鋼を加工していたことが明らかとなった。

HEI－4：椀形鍛冶滓

（1）外観観察：やや小形の椀形鍛冶滓の破片（100g）である。弱い着磁性がある。表面には淡褐色の土砂や茶褐色の銹化鉄が付着するが、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は灰褐色で、表面はやや風化気味である。また下面には、灰褐色の炉床粘土がごく薄く付着する。

（2）顕微鏡組織：図28①～③に示す。白色粒状結晶ウスタイトが凝集して晶出する。また滓中の不定形青灰色部は銹化鉄、微小明白色部は金属鉄である。

（3）化学組成分析：表7に示す。全鉄分（Total Fe）の割合は60.79％と高い。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.06％、酸化第1鉄（FeO）が54.13％、酸化第2鉄（Fe_2O_3）26.67％であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O）は11.53％と低めで、塩基性成分（CaO +

MgO）は1.03％であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.20％、バナジウム（V）が＜0.01％であった。また酸化マンガン（MnO）は0.11％、銅（Cu）は＜0.01％と低値であった。

当鉄滓も滓部は製鉄原料の起源の脈石成分の含有割合が極めて低く、鍛錬鍛冶滓と推定される。当鉄滓は特に鉄酸化物（FeO）の割合が高く、主に熱間加工時の鉄材の吹き減り（酸化に伴う損失）で生じた滓と判断される。

HEI－5：椀形鍛冶滓

（1）外観観察：やや小形の椀形鍛冶滓の破片（92g）である。弱い着磁性がある。上面には茶褐色の銹化鉄が点々と付着するが、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は灰褐色で、表面はやや風化気味である。破面や下面には中小の気孔が点在するが、緻密な滓である。

（2）顕微鏡組織：図28④～⑥に示す。④の不定形青灰色部は銹化鉄、素地の灰褐色部は鍛冶滓である。⑤は銹化鉄部の拡大である。金属組織痕跡は不明瞭で、鉄中の炭素量の推定等は困難な状態であった。一方⑥は滓部の拡大である。白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

（3）化学組成分析：表7に示す。全鉄分（Total Fe）49.50％に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.05％、酸化第1鉄（FeO）が52.47％、酸化第2鉄（Fe_2O_3）12.39％の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O）は30.12％で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は3.66％であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.31％、バナジウム（V）が＜0.01％であった。また酸化マンガン（MnO）は0.10％、銅（Cu）も＜0.01％と低値であった。

当鉄滓も製鉄原料の起源の脈石成分の含有割合が極めて低く、鉄酸化物と粘土溶融物（SiO_2主成分）主体の滓であった。鍛錬鍛冶滓と推定される。

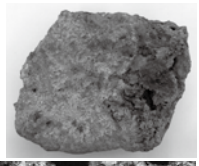
4．小結

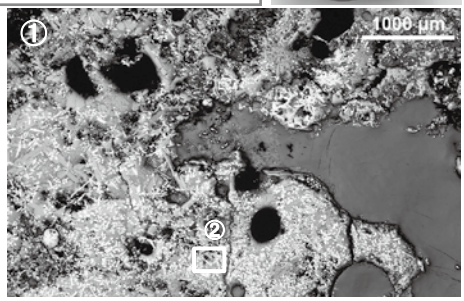
平安京右京七条一坊十二町跡から出土した鉄滓（HEI－1～5）はすべて鍛錬鍛冶滓であった。

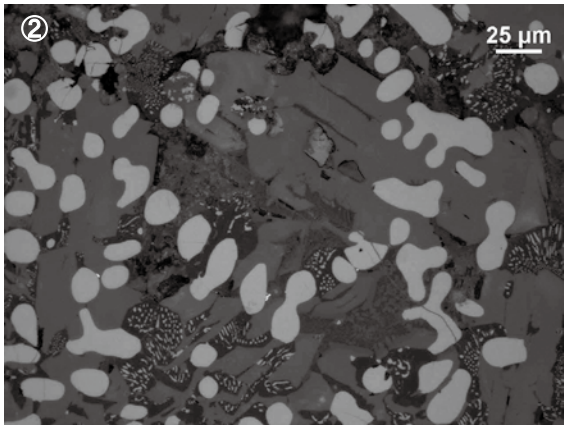
製鉄原料の起源の脈石成分〔砂鉄（含チタン鉄鉱）：TiO_2、V、鉄鉱石（塊鉱：CaO、MgO、Cu）〕の含有割合が極めて低い。鍛冶原料は製鉄原料起源の不純物は除去された鉄素材（新鉄）または廃鉄器で、これらを熱間で鍛打加工して、鉄器を製作したと推測される。

また内部に小形の銹化鉄を含む滓が1点（HEI－3）確認された。その金属組織痕跡から高炭素鋼を加工していたことが明らかとなった。このことから遺跡周辺の鍛冶工房には、焼き入れ硬さが要求される鉄器の刃先の製作などに向いた材料（高炭素鋼）が調達されていたと推定される。

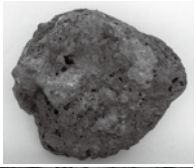
HEI-1椀形鍛冶滓
①②素地：鍛冶滓、ｳｽﾀｲﾄ・ﾌｧﾔﾗｲﾄ

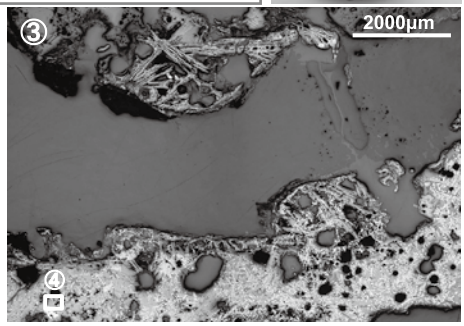


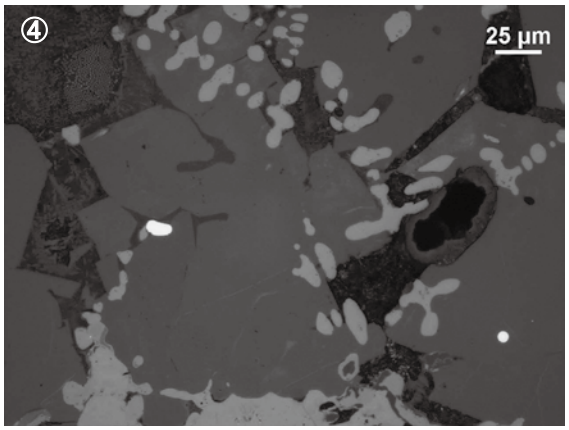




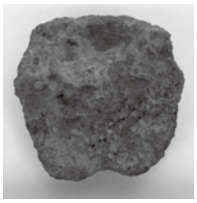
HEI-2椀形鍛冶滓
③上側：ｶﾞﾗｽ質滓、下側：鍛冶滓、④滓部：ｳｽﾀｲﾄ・ﾌｧﾔﾗｲﾄ、微小明白色粒：金属鉄

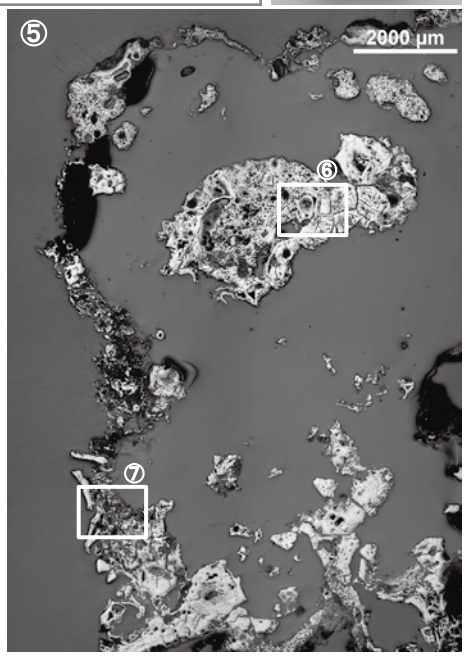


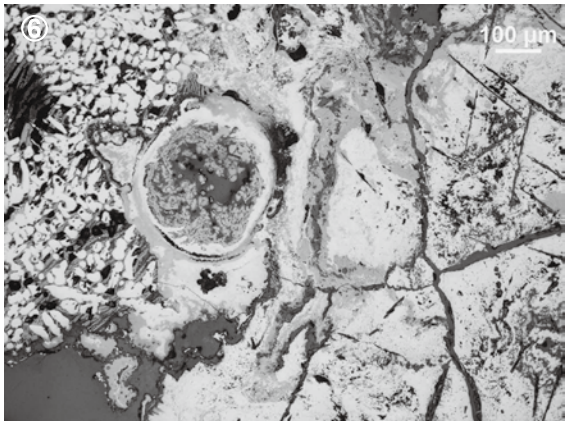




HEI-3椀形鍛冶滓（含鉄）
⑤灰褐色部：鍛冶滓、青灰色～暗灰色部銹化鉄、⑥左側：鍛冶滓、ｳｽﾀｲﾄ・ﾌｧﾔﾗｲﾄ、⑥⑦右側：銹化鉄部、過共析組織痕跡







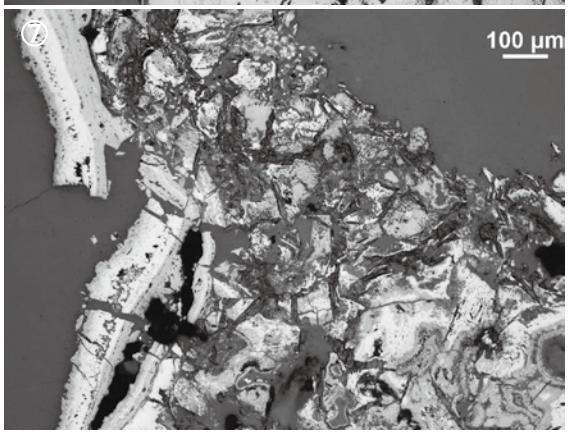
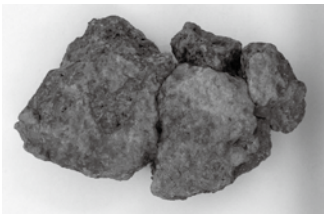
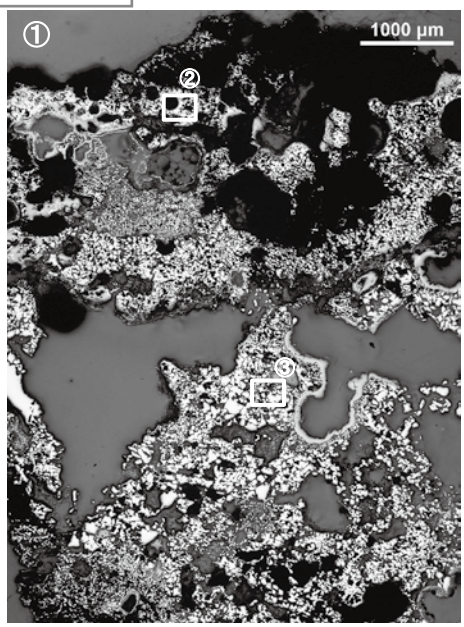
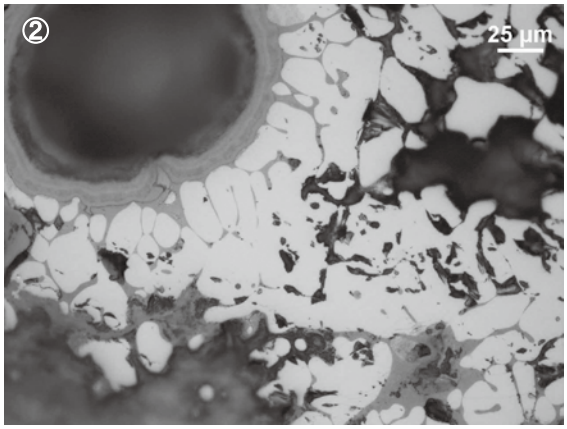


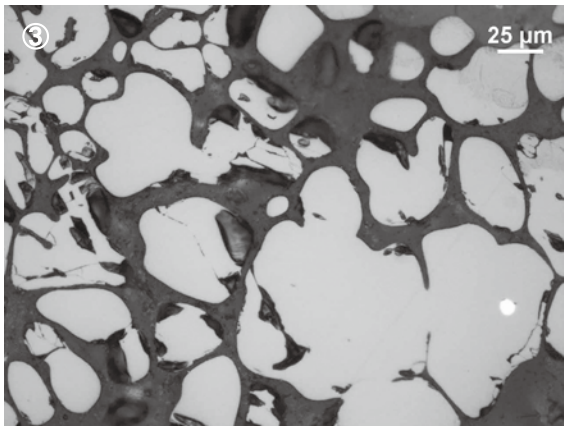
図27　椀形鍛冶滓の顕微鏡写真１

HEI-4
椀形鍛冶滓
①～③素地：鍛冶滓、ｳｽﾀｲﾄ、微小明白色粒：金属鉄

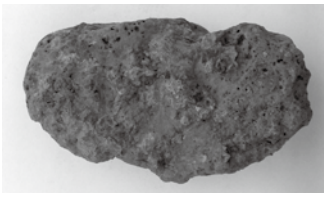


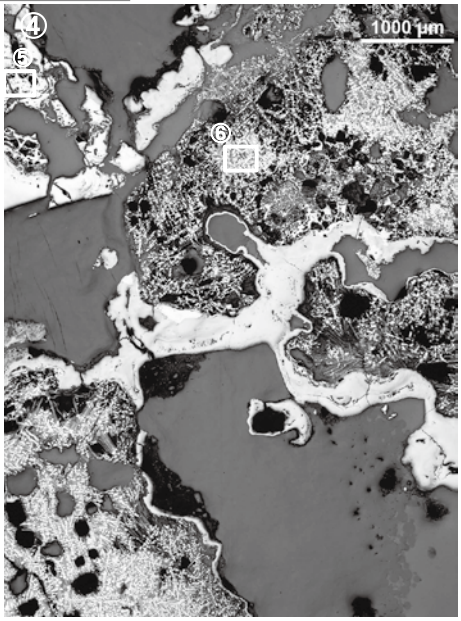


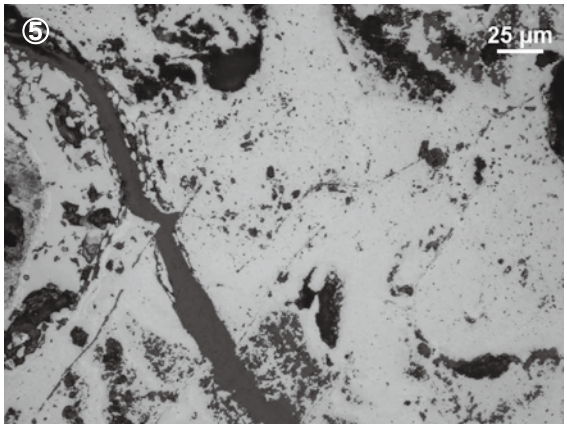




HEI-5
椀形鍛冶滓
④素地：鍛冶滓、青灰色部：錆化鉄、⑤錆化鉄部：金属組織痕跡不明瞭、⑥滓部：ｳｽﾀｲﾄ・ﾌｧﾔﾗｲﾄ







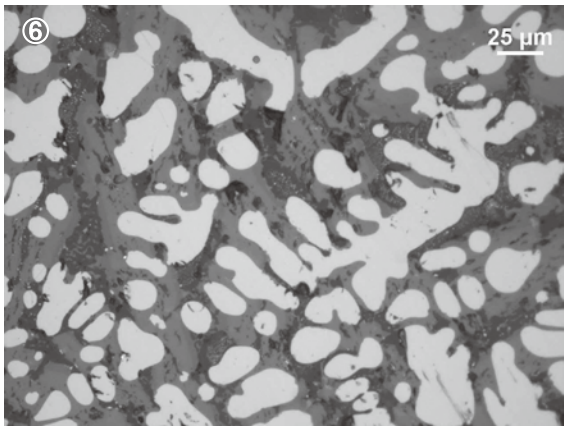


図28　椀形鍛冶滓の顕微鏡写真２

表７　供試材の化学組成

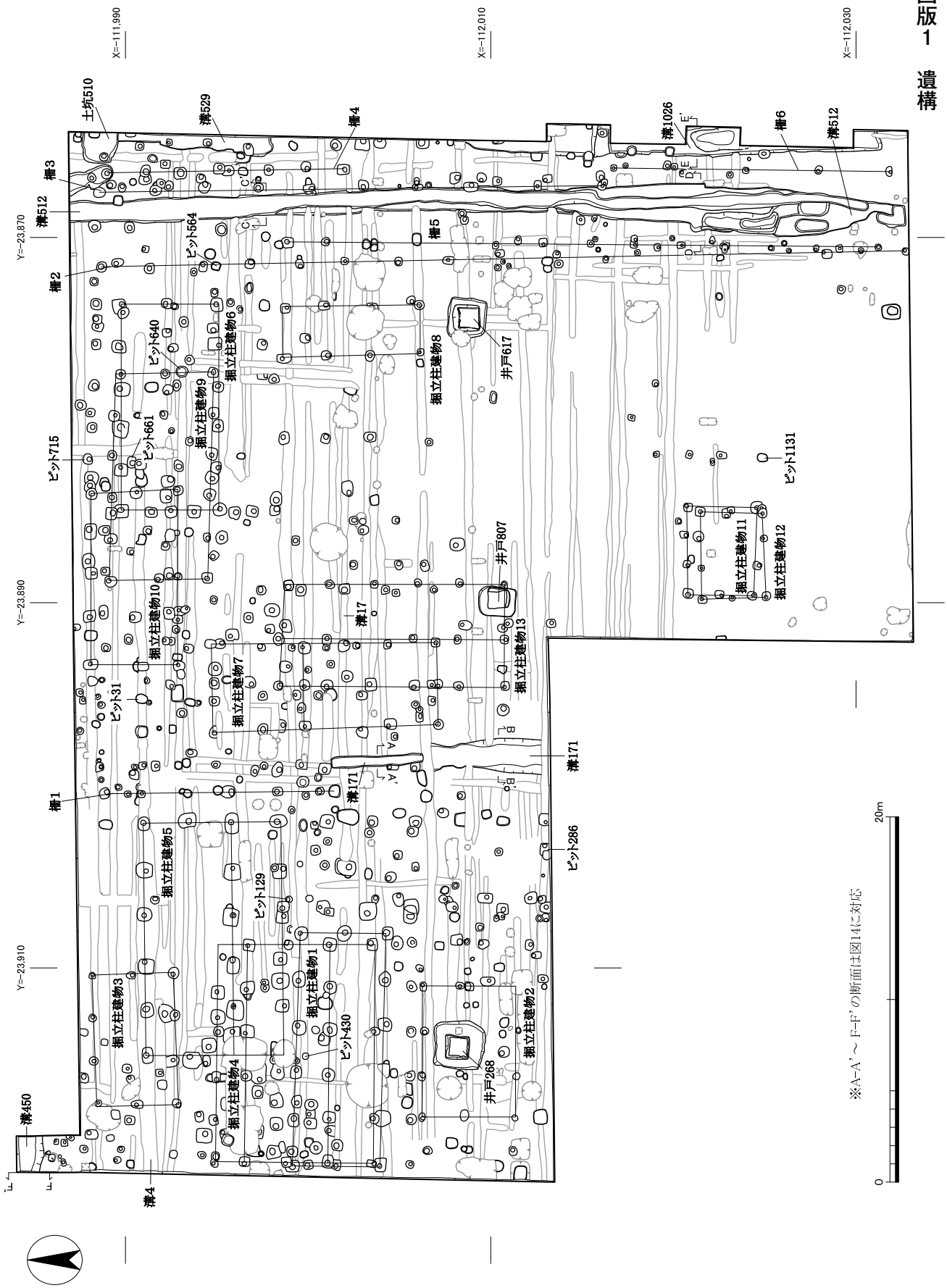
符号	地区	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2) *	酸化アルミニウム (Al_2O_3) *	酸化カルシウム (CaO) *	酸化マグネシウム (MgO) *	酸化カリウム (K_2O) *	酸化ナトリウム (Na_2O) *	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO_2)	造滓成分 Σ*
HEI-1	1区	ピット463 建物10	椀形鍛冶滓	10c代前半	45.33	0.07	40.69	19.49	24.41	5.43	1.64	0.83	0.83	0.60	0.18	0.26	0.02	0.020	0.36	0.49	<0.01	0.01	0.18	33.74
HEI-2	3区	ピット1042	椀形鍛冶滓	10c代前半	54.61	0.04	55.57	16.26	17.19	3.75	1.05	0.39	0.69	0.28	0.09	0.26	0.03	0.022	0.25	0.29	<0.01	<0.01	<0.01	23.35
HEI-3	3区	溝512	椀形鍛冶滓（含鉄）	10c代前半	53.70	0.06	40.40	31.79	13.80	3.55	1.36	0.77	0.39	0.19	0.13	0.25	0.02	0.031	0.39	0.60	<0.01	0.01	<0.01	20.06
HEI-4	3区	溝512	椀形鍛冶滓	10c代前半	60.79	0.06	54.13	26.67	7.14	3.01	0.70	0.33	0.25	0.10	0.11	0.20	0.01	0.014	0.27	0.51	<0.01	<0.01	<0.01	11.53
HEI-5	3区	溝512	椀形鍛冶滓	10c代前半	49.50	0.05	52.47	12.39	19.96	4.94	2.78	0.88	1.12	0.44	0.10	0.31	0.02	0.017	0.44	0.28	<0.01	<0.01	0.01	30.12

表８　出土遺物の調査結果のまとめ

符号	地区	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）								所見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	造滓成分	Cu	
HEI-1	1区	ピット463 建物10	椀形鍛冶滓	10c代前半	滓部:W+F	45.33	19.49	2.47	0.26	<0.01	0.18	33.74	0.01	鍛錬鍛冶滓
HEI-2	3区	ピット1042	椀形鍛冶滓	10c代前半	滓部:W+F	54.61	16.26	1.44	0.26	<0.01	0.09	23.35	<0.01	鍛錬鍛冶滓
HEI-3	3区	溝512	椀形鍛冶滓（含鉄）	10c代前半	滓部:W+F、銹化鉄部:過共析組織痕跡	53.70	31.79	2.13	0.25	<0.01	0.13	20.06	0.01	鍛錬鍛冶滓（鍛冶原料鉄:高炭素鋼）
HEI-4	3区	溝512	椀形鍛冶滓	10c代前半	滓部:W	60.79	26.67	1.03	0.20	<0.01	0.11	11.53	<0.01	鍛錬鍛冶滓
HEI-5	3区	溝512	椀形鍛冶滓	10c代前半	滓部:W+F、銹化鉄部:金属組織痕跡不明瞭	49.50	12.39	3.66	0.31	<0.01	0.10	30.12	<0.01	鍛錬鍛冶滓

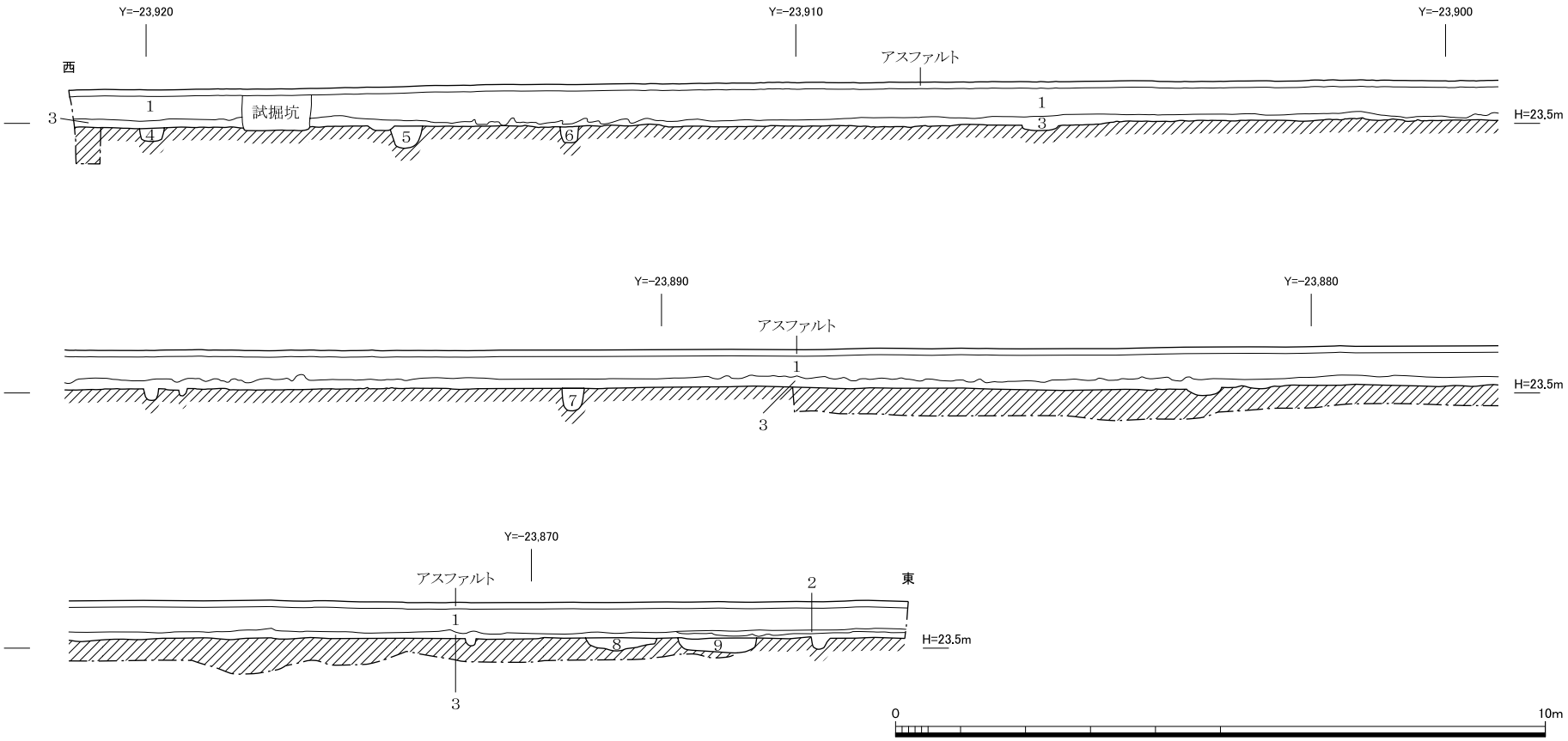
W:Wustite（FeO）、F:Fayalite（$2FeO \cdot SiO_2$）

図　　版


X=−111,990
X=−112,010
X=−112,030
Y=−23,870
Y=−23,890
Y=−23,910
土坑510
溝529
溝512
溝1026
溝450
溝4
溝17
溝171
溝286
溝1131
溝6
溝5
溝3
溝2
溝1
ピット564
ピット640
ピット661
ピット715
ピット31
ピット129
ピット430
ピット1131
井戸617
井戸807
井戸288
掘立柱建物1
掘立柱建物2
掘立柱建物3
掘立柱建物4
掘立柱建物5
掘立柱建物6
掘立柱建物7
掘立柱建物8
掘立柱建物9
掘立柱建物10
掘立柱建物11
掘立柱建物12
掘立柱建物13
20m
0
※A-A'～F-F'の断面は図14に対応

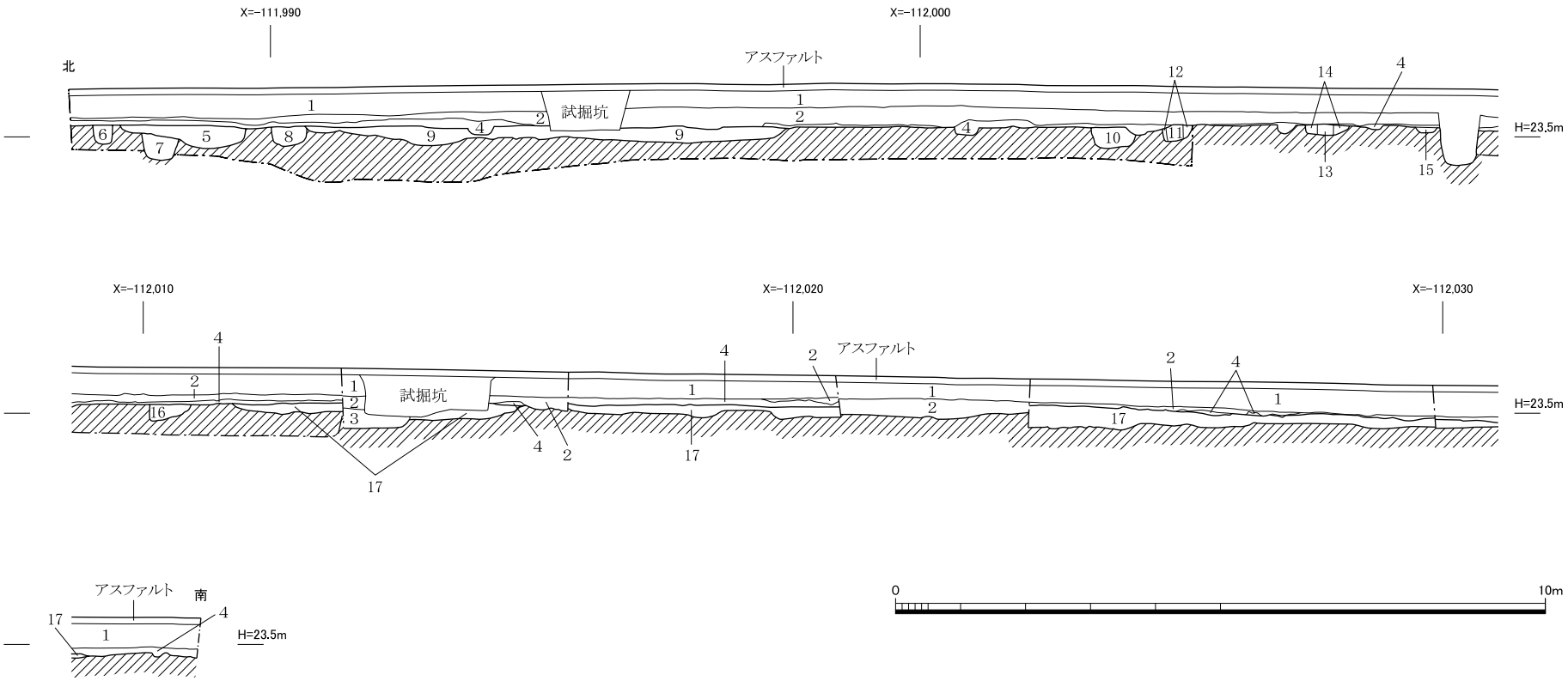
調査区平面図（1：300）

調査区北壁断面図（1：100）

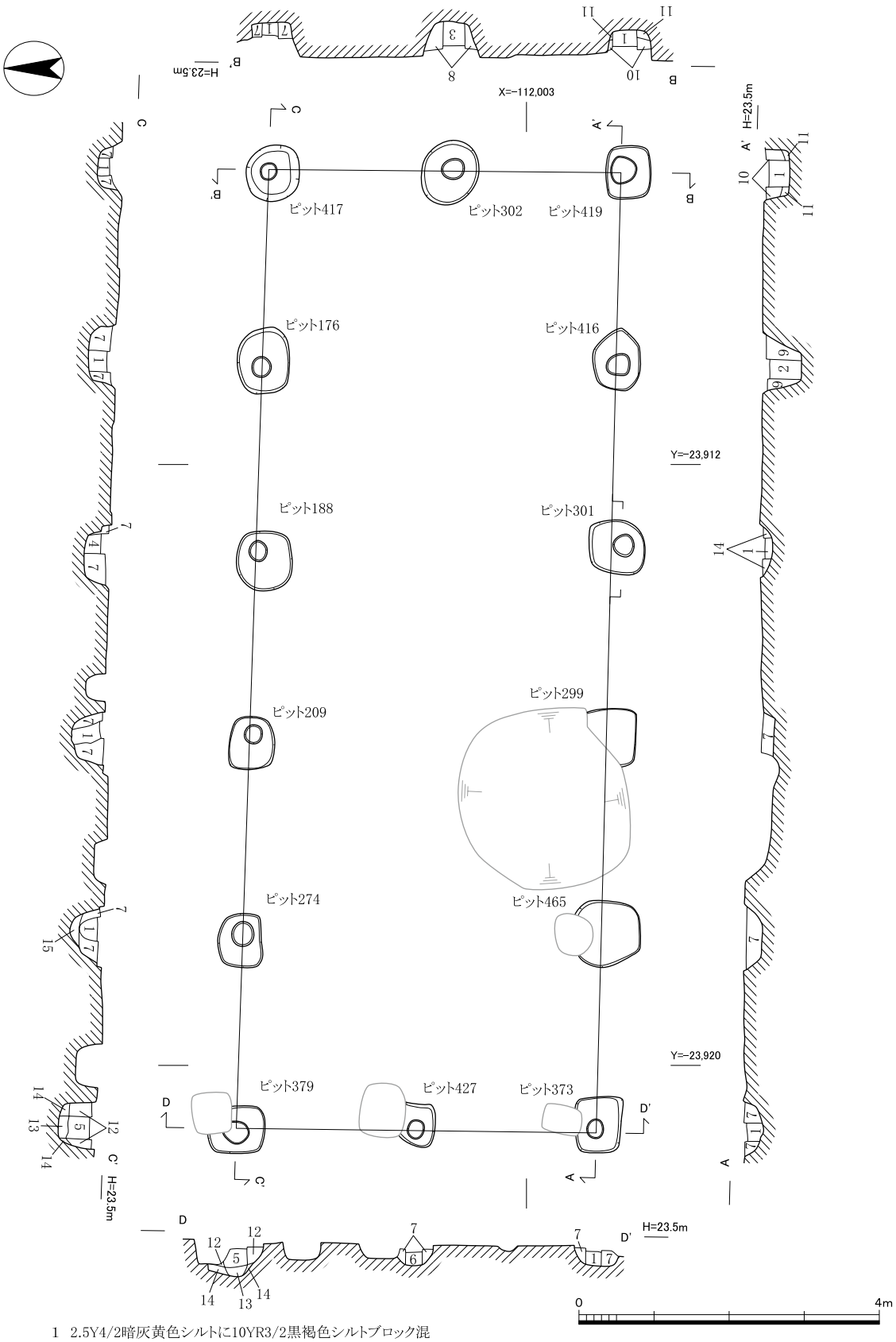


1 2.5Y6/6明黄褐色砂礫（現代盛土）
2 10YR1.1/1黒色砂泥（現代盛土）
3 10YR2/1黒色砂泥に5Y4/2灰オリーブ色シルトブロック混（耕作土）
4 10YR4/2灰黄褐色砂泥（ピット387）
5 10YR4/2灰黄褐色砂泥（ピット342）
6 10YR4/2灰黄褐色砂泥（ピット465）
7 10YR3/3暗褐色シルト（ピット825）
8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥に10YR3/4暗褐色シルト混（溝512）
9 10YR4/4褐色砂泥に10YR3/1黒褐色シルト混（土坑582）

調査区東壁断面図（1：100）



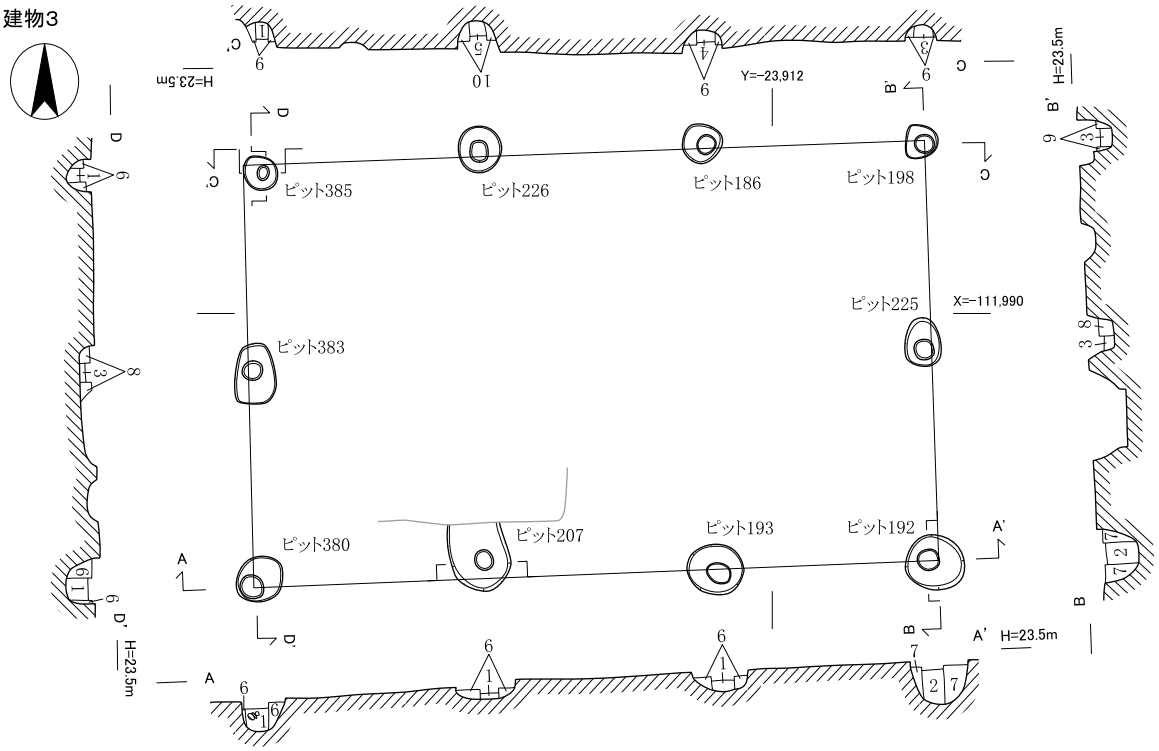
1 2.5Y6/6明黄褐色砂礫（現代盛土）
2 10YR1.7/1黒色砂泥（現代盛土）
3 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト（攪乱）
4 10YR2/1黒色砂泥に5Y4/2灰オリーブ色シルトブロック混（耕作土）
5 10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/6褐色シルト混（土坑510）
6 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR3/4暗褐色シルト混（ピット826）
7 10YR4/2灰黄褐色シルト（ピット580）
8 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR4/6褐色シルト混（ピット612）
9 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに10YR5/8黄褐色砂泥と10YR3/2黒褐色シルトブロック混（溝529）
10 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR4/6褐色シルト混（ピット545）
11 10YR4/1褐灰色シルトに10YR3/4暗褐色シルト混（ピット812）
12 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR4/6褐色シルト混（ピット812）
13 10YR4/1褐灰色シルトに10YR3/4暗褐色シルト混（ピット549）
14 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR4/6褐色シルト混（ピット549）
15 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR4/6褐色シルト混（ピット552）
16 10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルトブロック混（ピット1137）
17 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR3/2黒褐色シルトブロックと10YR4/6褐色シルトブロック混（溝1026）



1 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに10YR3/2黒褐色シルトブロック混
2 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに10YR4/2灰黄褐色砂泥混
3 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
4 10YR3/1黒褐色シルトに10YR4/6褐色砂泥混
5 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに10YR4/6褐色砂泥混
6 10YR3/1黒褐色シルト
7 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに10YR4/6褐色砂泥混
8 2.5Y4/2暗灰黄色シルト φ1～5cmまでの礫を少量混
9 10YR5/6黄褐色シルトに10YR4/2灰黄褐色砂泥混
10 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
11 2.5Y4/2暗灰黄色シルト
12 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに10YR3/3暗褐色シルトブロック混
13 10YR3/1黒褐色シルト
14 10YR4/4褐色シルト
15 2.5Y4/2暗灰黄色シルト

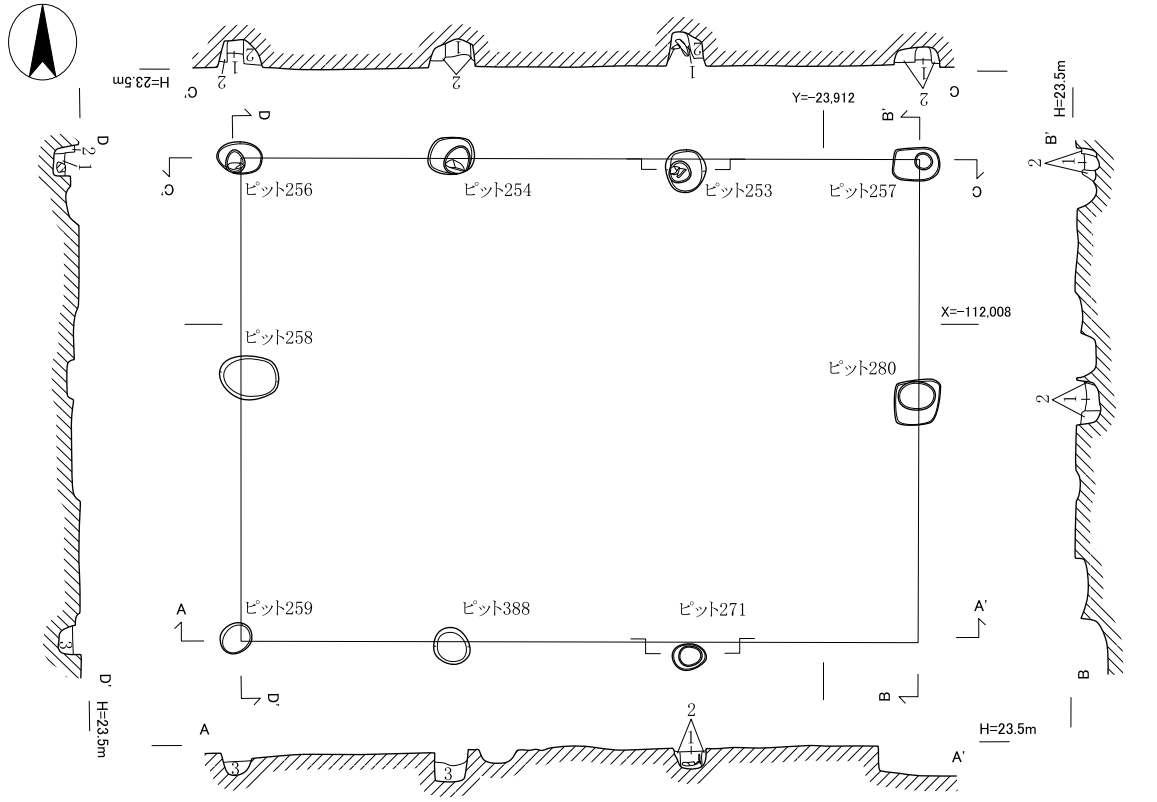
掘立柱建物１実測図（１：80）

建物3



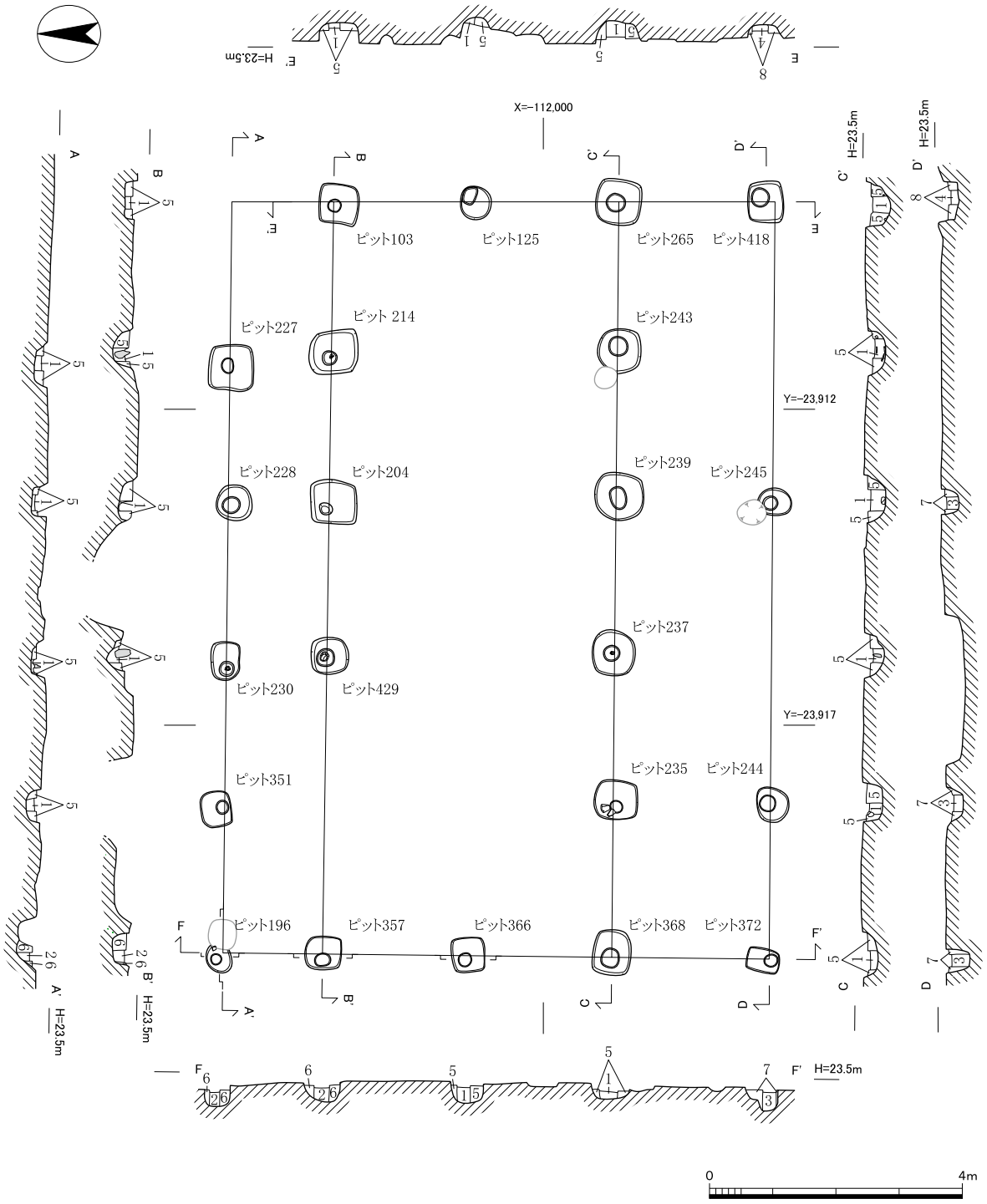
1 10YR4/1褐灰色シルト
2 10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック混
3 10YR3/1黒褐色シルトに10YR4/2灰黄褐色シルトブロック混
4 10YR2/3黒褐色シルト
5 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルトブロック混
6 10YR4/4褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルトブロック混
7 10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック混
8 10YR4/1褐灰色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック混
9 10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック混
10 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに10YR4/6褐色シルトブロック混

建物2



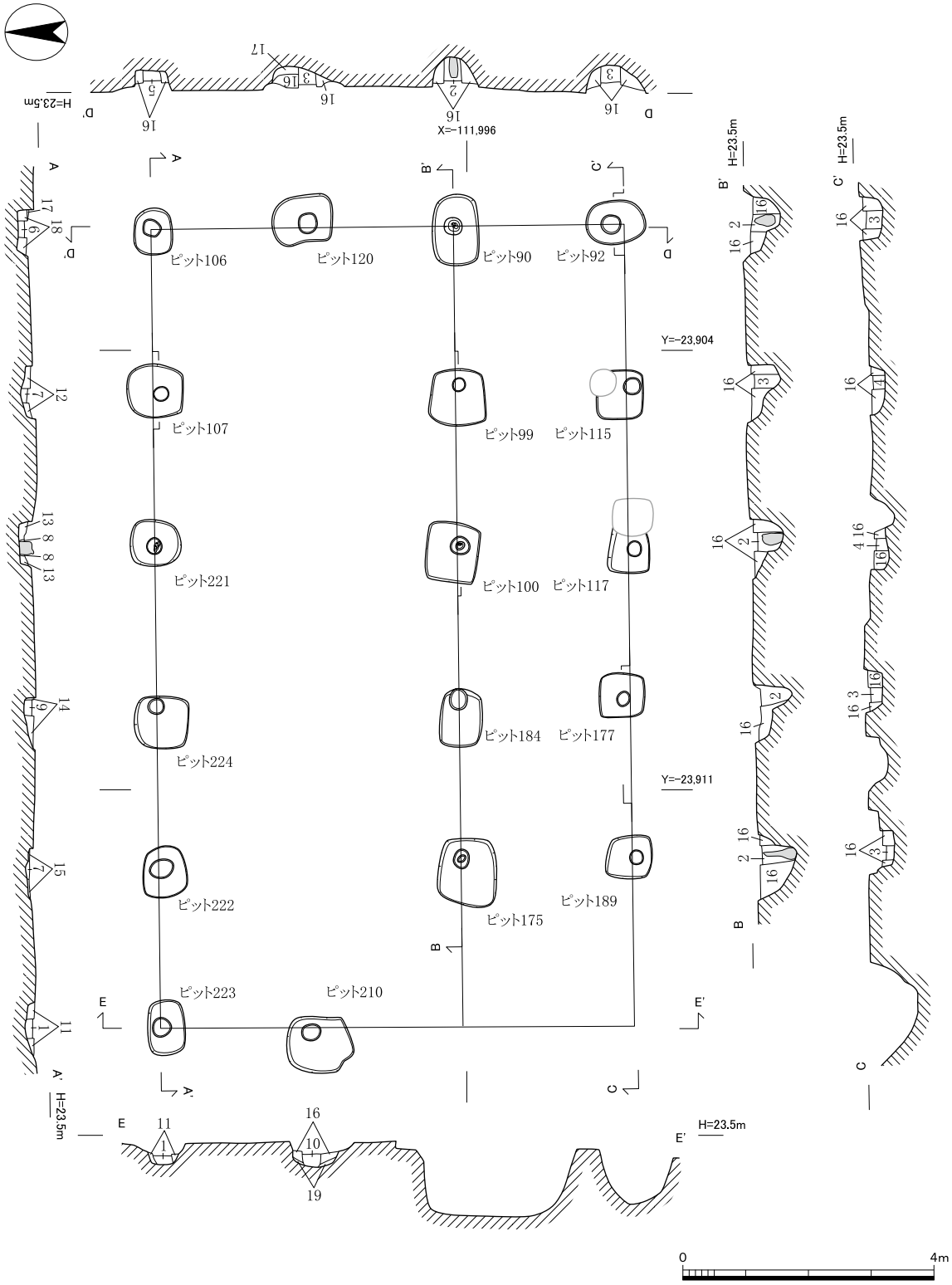
1 10YR4/1褐灰色シルト　2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト　3 10YR2/2黒褐色シルト

掘立柱建物２・３実測図（１：80）



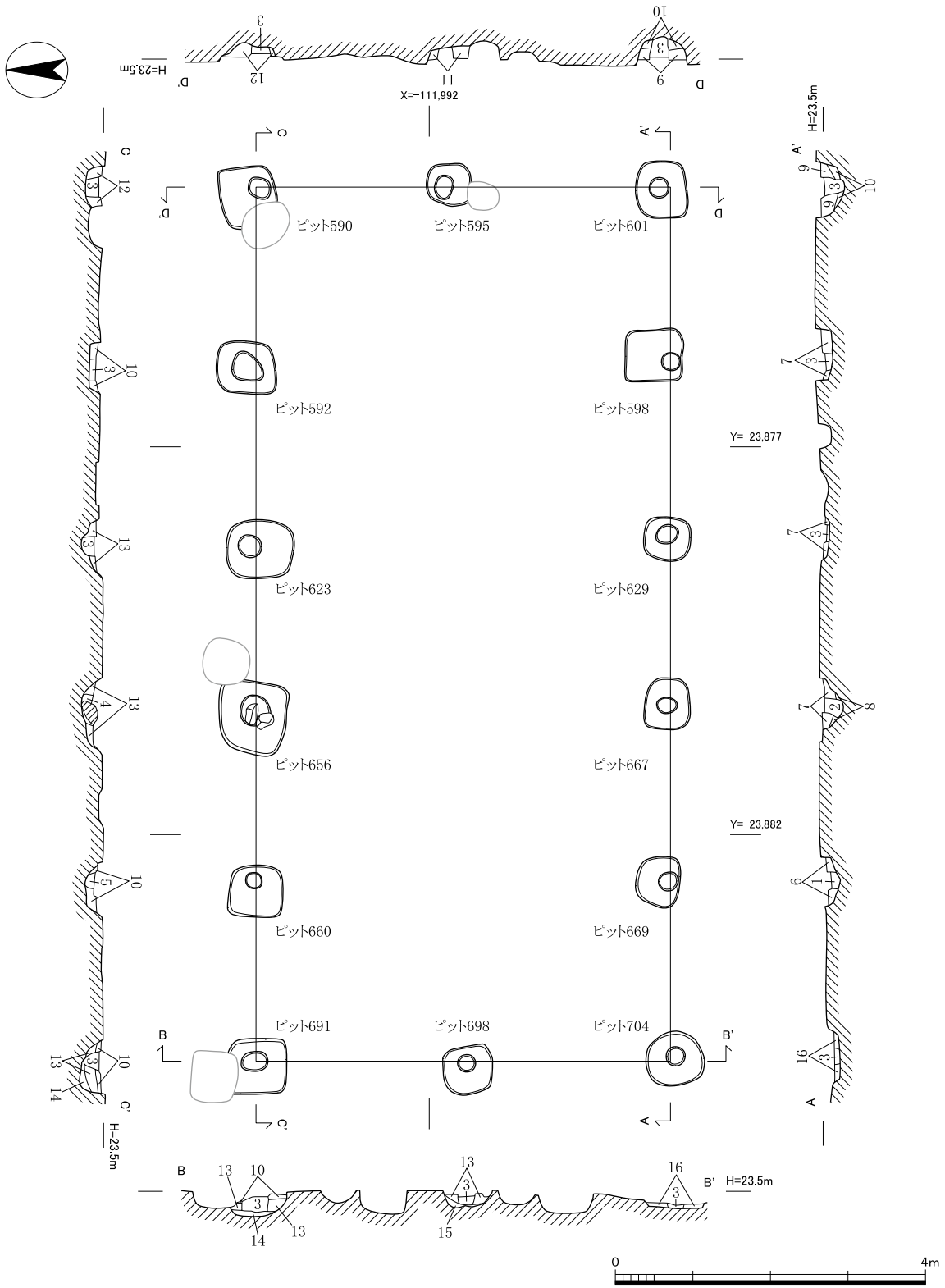
1 10YR3/1黒褐色シルト
2 10YR4/2灰黄褐色シルト
3 10YR4/1褐灰色シルト
4 10YR4/6褐色砂泥に10YR4/2灰黄褐色シルトブロック混
5 10YR4/1褐灰色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック混
6 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック混
7 10YR5/6黄褐色砂泥に10YR4/1褐灰色シルトブロック混
8 10YR4/3にぶい黄褐色シルト

掘立柱建物４実測図（１：100）



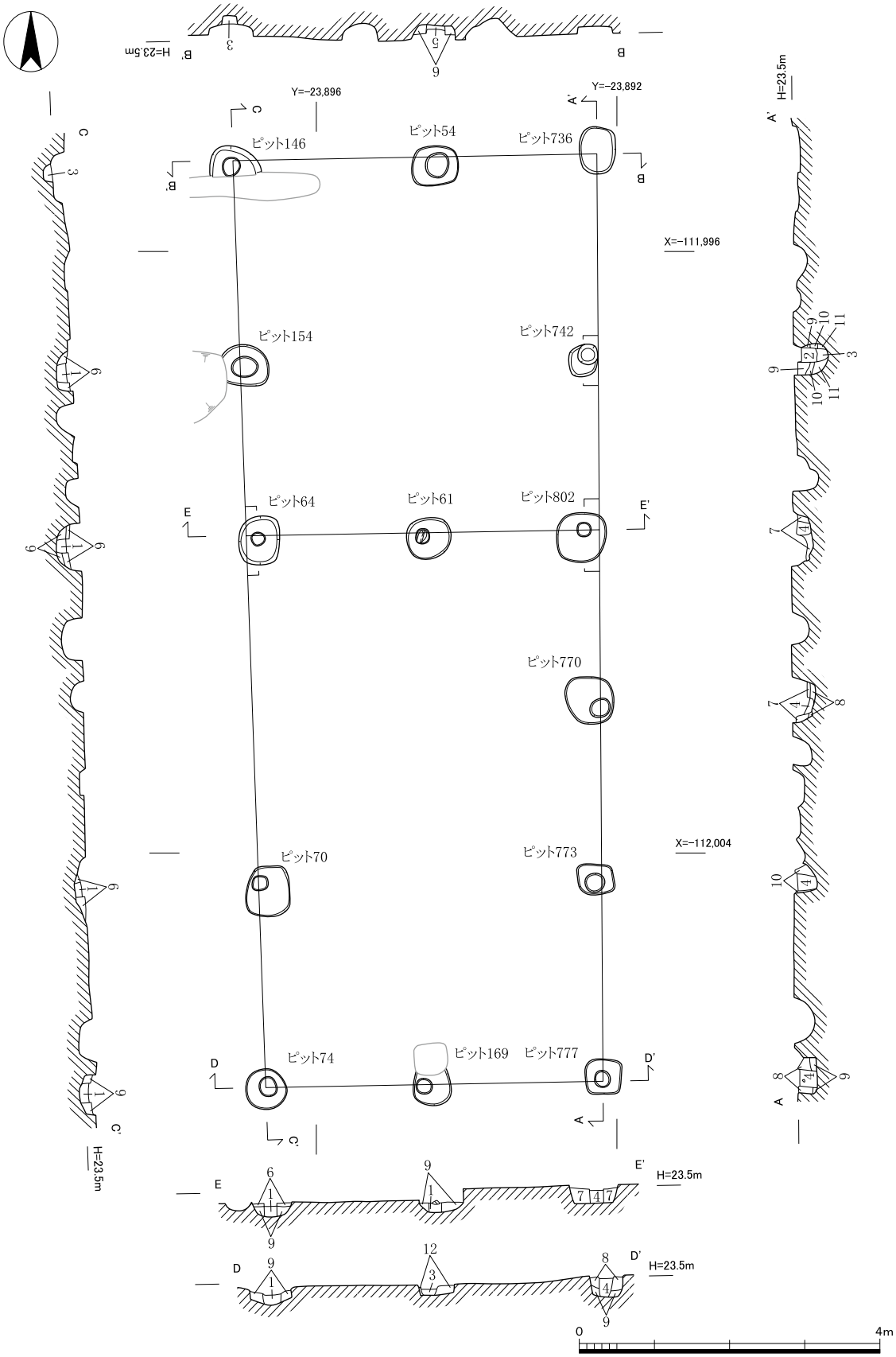
1　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥に10YR3/2黒褐色シルトブロック混
2　10YR3/1黒褐色シルト
3　10YR3/1黒褐色砂泥
4　10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR4/6褐色シルト混
5　10YR3/1黒褐色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色砂泥混
6　10YR5/6黄褐色砂泥に10YR4/2灰黄褐色砂泥混
7　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
8　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥に7.5YR5/6明褐色砂泥混
9　10YR3/3暗褐色シルト
10　10YR4/2灰黄褐色シルト
11　10YR3/1黒褐色砂泥
12　10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR4/6褐色シルト混
13　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
14　10YR4/2灰黄褐色砂泥に2.5Y4/2暗灰黄色シルトブロック混
15　10YR5/1褐灰色砂泥
16　10YR3/1黒褐色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色砂泥混
17　10YR3/1黒褐色シルト
18　10YR4/2灰黄褐色砂泥
19　2.5Y4/2暗灰黄褐色砂

掘立柱建物５実測図（１：100）



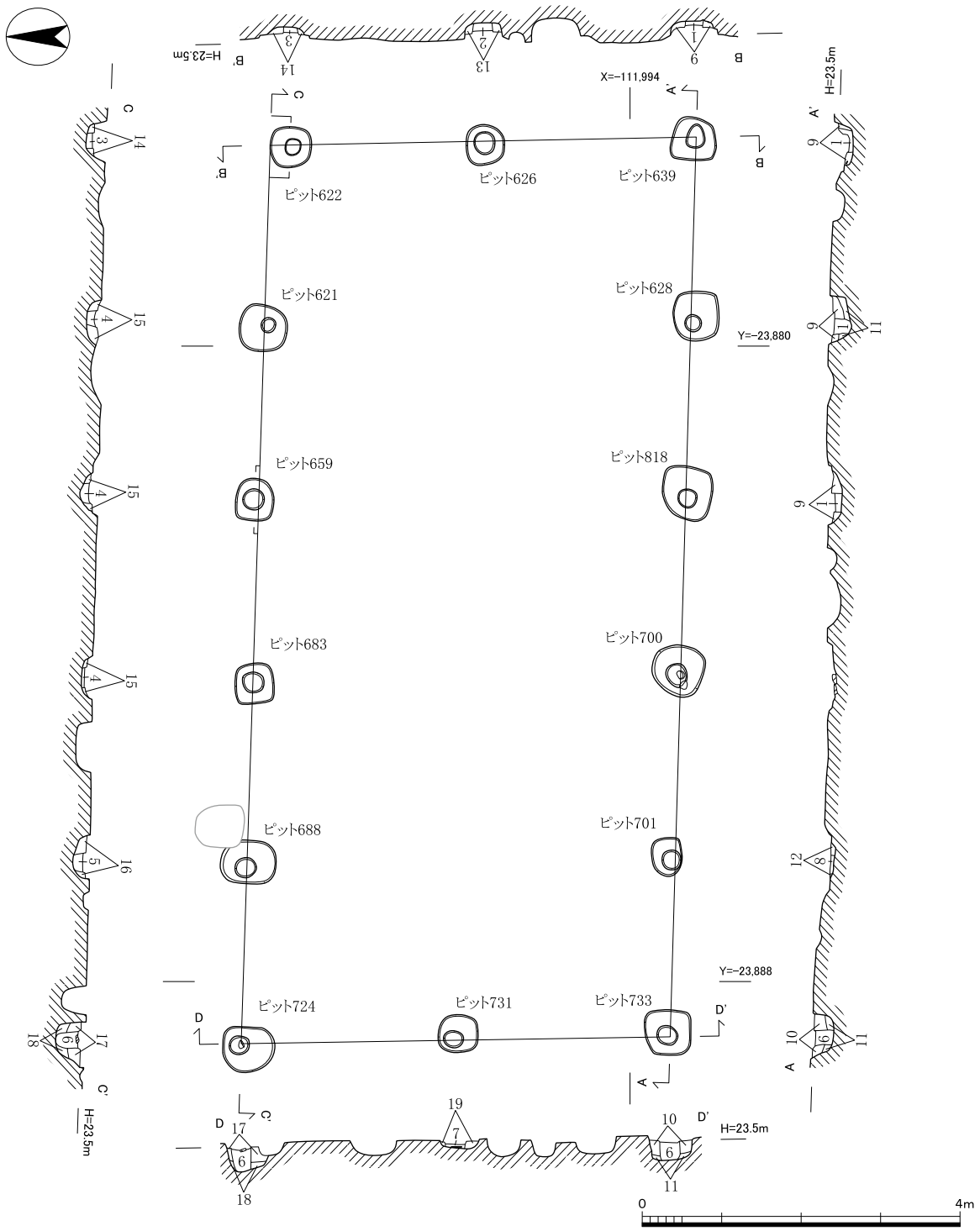
1 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR3/1黒褐色シルトブロック混
2 10YR3/1黒褐色シルト
3 10YR3/4暗褐色シルト
4 10YR3/2黒褐色シルトに10YR5/1褐灰色シルトブロック混
5 10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック混
6 10YR4/6褐色シルトに10YR3/1黒褐色シルトブロック混
7 10YR4/2灰黄褐色砂泥に10YR4/4褐色シルトブロック混
8 10YR3/4暗褐色シルト
9 10YR4/4褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルトブロック混
10 10YR4/1褐灰色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック混
11 10YR3/1黒褐色シルト
12 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック混
13 10YR5/6黄褐色シルトに10YR5/1褐灰色シルトブロック混
14 2.5Y4/2暗灰黄褐色砂に10YR3/4暗褐色シルト混
15 10YR4/4褐色シルトに10YR4/1褐灰色砂泥混
16 10YR3/1黒褐色砂泥に10YR4/6褐色シルト混

掘立柱建物６実測図（１：80）



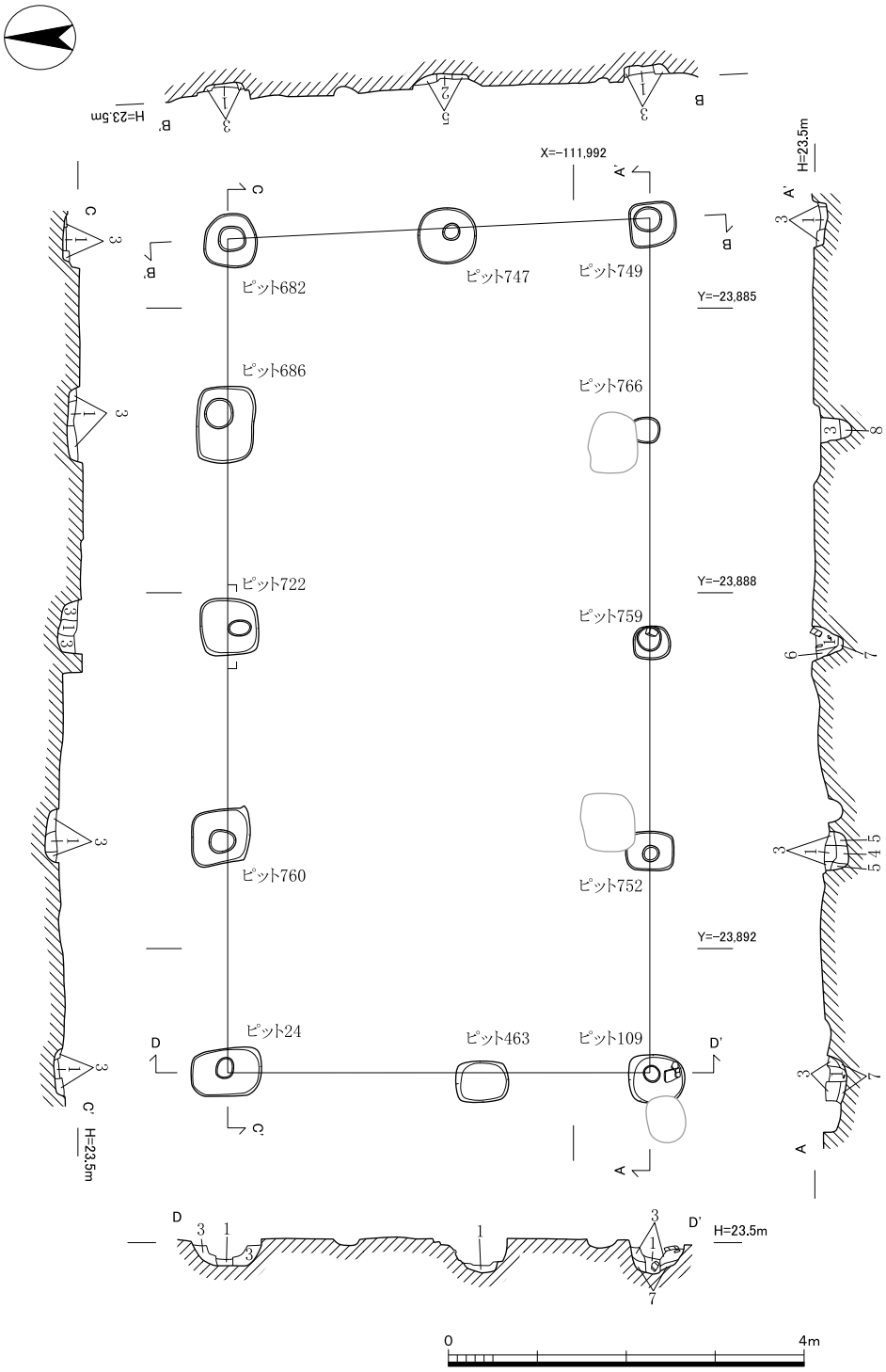
1 10YR4/4褐色シルトに10YR3/2黒褐色シルトブロック混
2 10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/1褐灰色砂泥混
3 10YR3/1黒褐色シルト
4 10YR4/1褐灰色砂泥に10YR3/1黒褐色シルトブロック混
5 10YR4/1褐灰色砂泥に10YR4/6褐色シルト混
6 10YR4/6褐色砂泥に10YR4/1褐灰色シルト混
7 10YR4/1褐灰色シルト
8 10YR4/1褐灰色砂泥に10YR4/6褐色シルト混
9 10YR3/1黒褐色シルトに10YR4/4褐色砂泥混
10 10YR3/1黒褐色砂泥に10YR3/1黒褐色シルト混
11 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
12 10YR4/4褐色シルトに10YR3/2黒褐色シルトブロック混

掘立柱建物７実測図（１：80）



1 10YR4/1褐灰色シルトに10YR4/4褐色シルト混
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
3 10YR4/1褐灰色砂礫に10YR4/6褐色シルトブロック混
4 10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/4褐色砂泥混
5 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック混
6 10YR3/2黒褐色シルト
7 10YR3/2黒褐色砂泥に10YR4/4褐色シルト混
8 10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/1褐灰色シルト混
9 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに10YR4/4褐色シルト混
10 10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルト混
11 10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルト混
12 10YR4/1褐灰色シルトに10YR3/4暗褐色シルト混
13 10YR4/4褐色シルトに10YR褐灰色砂泥混
14 10YR3/2黒褐色砂礫
15 10YR4/1褐灰色砂泥に10YR4/6褐色砂泥混
16 10YR4/1褐灰色シルトに10YR4/4褐色砂泥混
17 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック混
18 10YR3/2黒褐色砂泥に10YR4/4褐色シルト混
19 10YR4/1褐灰色砂泥に10YR4/6褐色シルト混

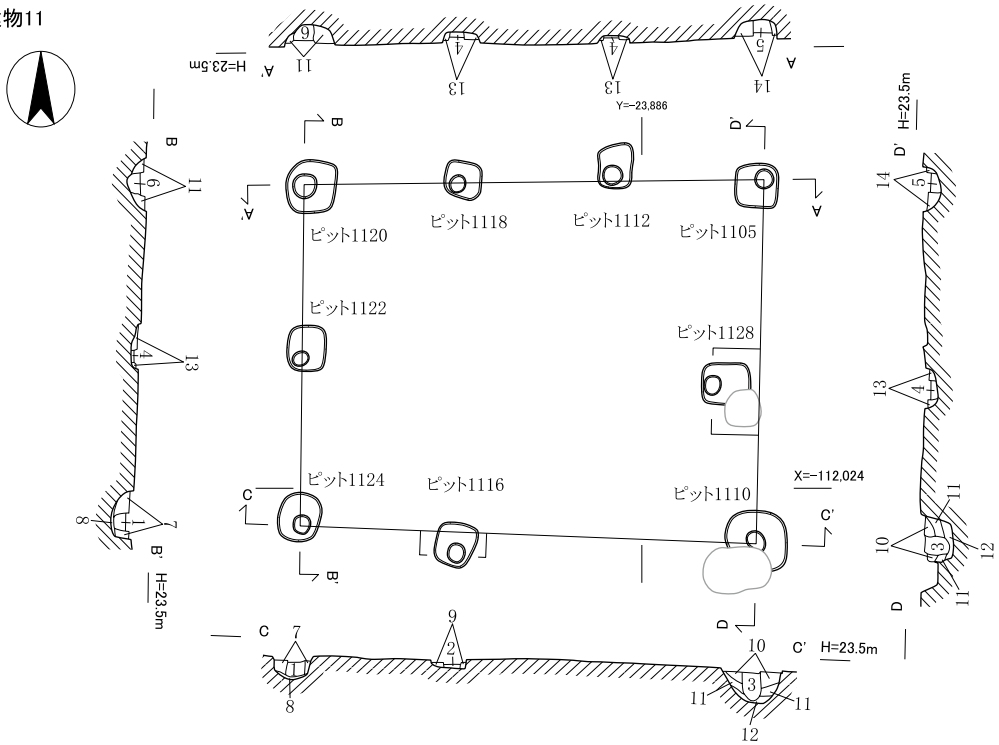
掘立柱建物９実測図（１：80）



1 10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/6褐色シルト混
2 10YR4/2灰黄褐色砂泥
3 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに10YR4/4褐色シルト混
4 10YR4/1褐灰色シルト
5 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
6 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR4/4褐色シルト混
7 10YR3/1黒褐色シルト
8 10YR3/3暗褐色シルトに10YR4/6褐色シルト混

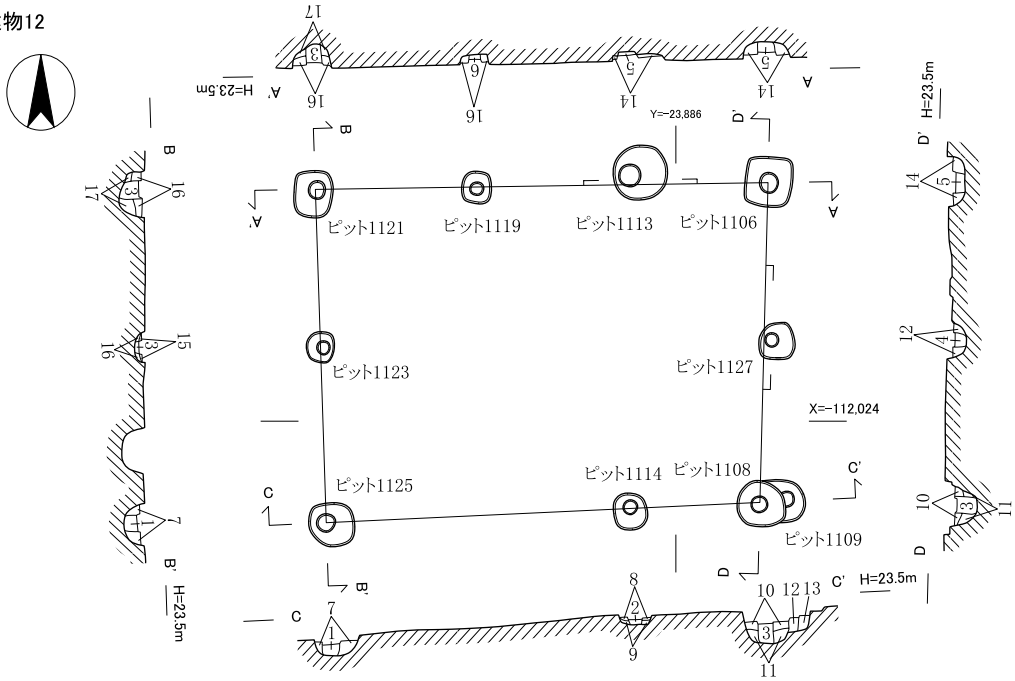
掘立柱建物10実測図（1：80）

建物11



1 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルト混
2 10YR4/2灰黄褐色砂泥に10YR4/1褐灰色シルト混
3 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR5/6黄褐色砂泥ブロック混
4 10YR4/1褐灰色砂泥に10YR5/6黄褐色砂泥混
5 10YR5/6黄褐色砂泥に10YR3/2黒褐色シルトブロック混
6 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR4/6褐色シルト混
7 10YR4/6褐色砂泥に10YR2/2黒褐色シルトブロック混
8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥に10YR4/4褐色シルト混
9 10YR4/4褐色砂泥に10YR4/1褐灰色シルト混
10 10YR4/1褐灰色シルトに10YR5/6黄褐色砂泥ブロック混
11 10YR5/6黄褐色砂泥に10YR4/1褐灰色シルトブロック混
12 10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルトブロック混
13 10YR5/6黄褐色砂泥に10YR4/2灰黄褐色砂泥混
14 10YR5/6黄褐色砂泥に10YR4/1褐灰色シルトブロック混

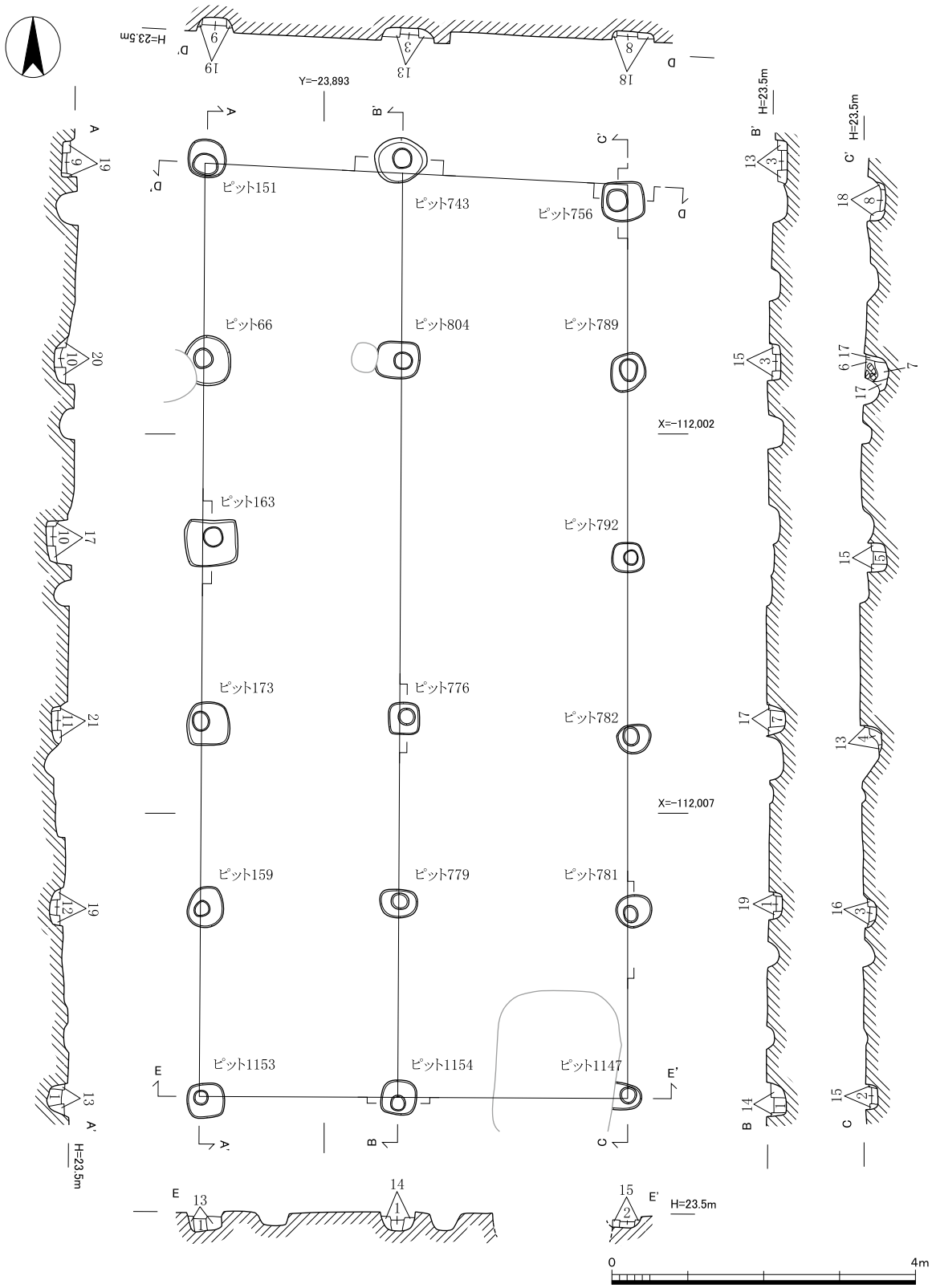
建物12



1 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR4/4褐色シルト混
2 10YR4/1褐灰色シルトに10YR2/2黒褐色シルトブロック混
3 10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルト混
4 10YR4/1褐灰色シルトに10YR5/6黄褐色砂泥ブロック混
5 10YR4/6褐色砂泥
6 10YR3/2黒褐色シルトに10YR5/6黄褐色砂泥混
7 10YR4/1褐灰色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック混
8 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルト混
9 10YR4/6褐色シルトに10YR5/1褐灰色シルト混
10 10YR4/1褐灰色シルトに10YR3/3暗褐色シルト混
11 10YR4/2灰黄褐色シルト
12 10YR4/6褐色砂泥に10YR4/1褐灰色シルト混
13 10YR4/6褐色砂泥
14 10YR5/6黄褐色砂泥混
15 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR4/4褐色シルト混
16 10YR5/6黄褐色砂泥に10YR3/2黒褐色シルトブロック混
17 10YR5/6黄褐色砂泥に10YR4/1褐灰色シルトブロック混

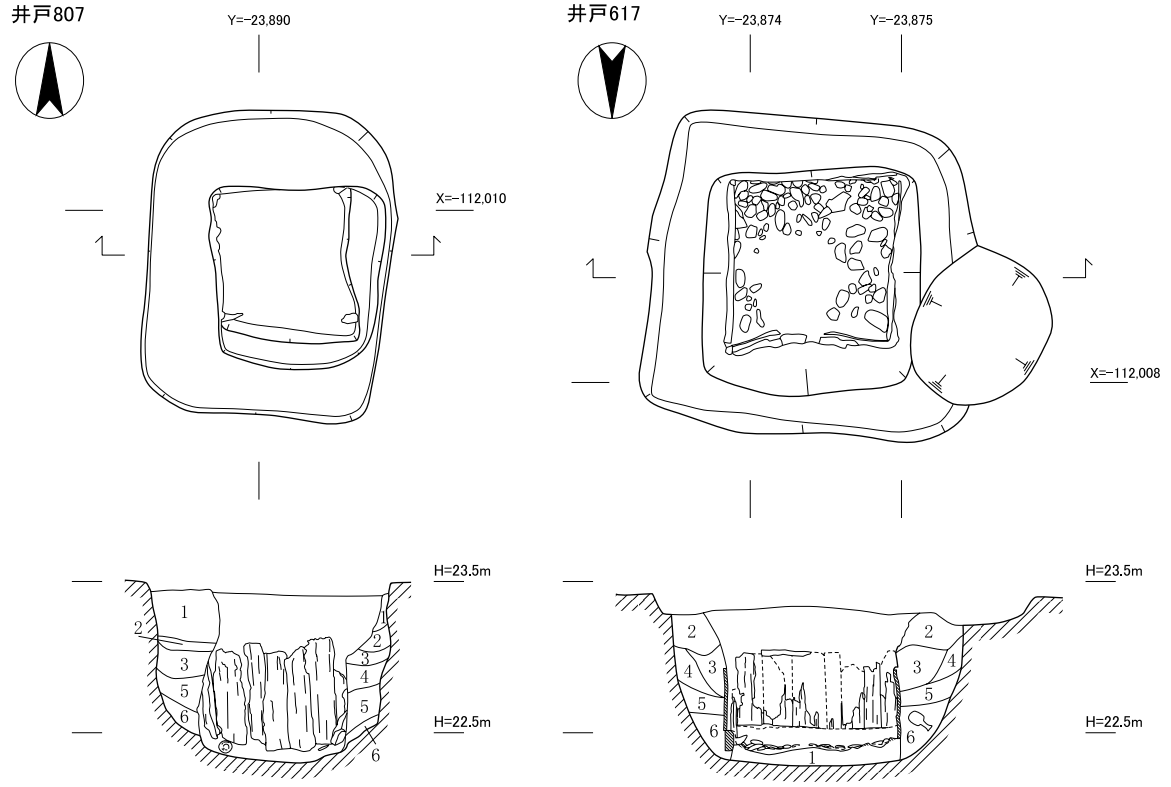
0 4m

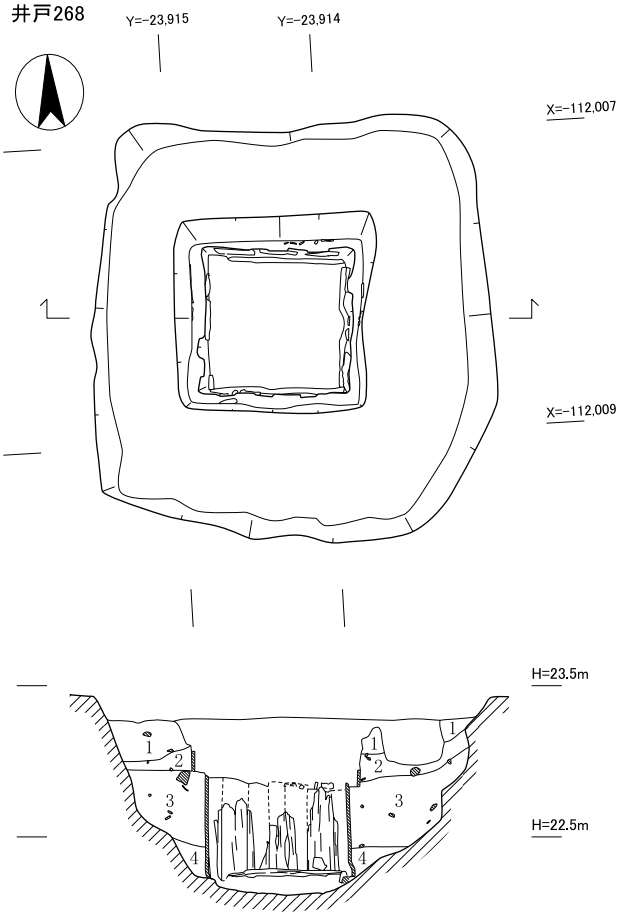
掘立柱建物11・12実測図（1：80）



1 10YR4/2灰黄褐色砂泥に10YR3/2黒褐色シルトブロック混
2 10YR4/1褐灰色シルト
3 10YR3/2黒褐色シルト
4 10YR4/4褐色砂泥
5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
6 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR3/2黒褐色シルトブロック混
7 10YR3/1黒褐色砂泥に10YR3/2黒褐色シルトブロック混
8 10YR4/2灰黄褐色砂泥
9 10YR4/4褐色砂泥に10YR4/1褐灰色シルト混
10 10YR4/4褐色砂泥に10YR3/2黒褐色シルトブロック混
11 10YR4/1褐灰色砂泥
12 10YR3/1黒褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルト混
13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
14 10YR3/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色砂泥ブロック混
15 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥に10YR3/2黒褐色シルトブロック混
16 10YR3/4暗褐色シルトに10YR3/2黒褐色シルトブロック混
17 10YR4/4褐色砂泥
18 10YR4/1褐灰色砂泥に10YR4/6褐色砂泥混
19 10YR4/6褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルト混
20 10YR5/6黄褐色砂泥
21 10YR3/2黒褐色砂泥

掘立柱建物13実測図（1：80）





井戸807
1 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに10YR3/1黒褐色砂泥ブロック混
2 10YR4/4褐色シルト 粗砂混じり
3 2.5Y3/2黒褐色シルト 粗砂混じり
4 10YR4/2灰黄褐色砂に2.5Y3/2黒褐色シルト混
5 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに10YR4/2灰黄褐色砂混
6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト 粗砂混じり

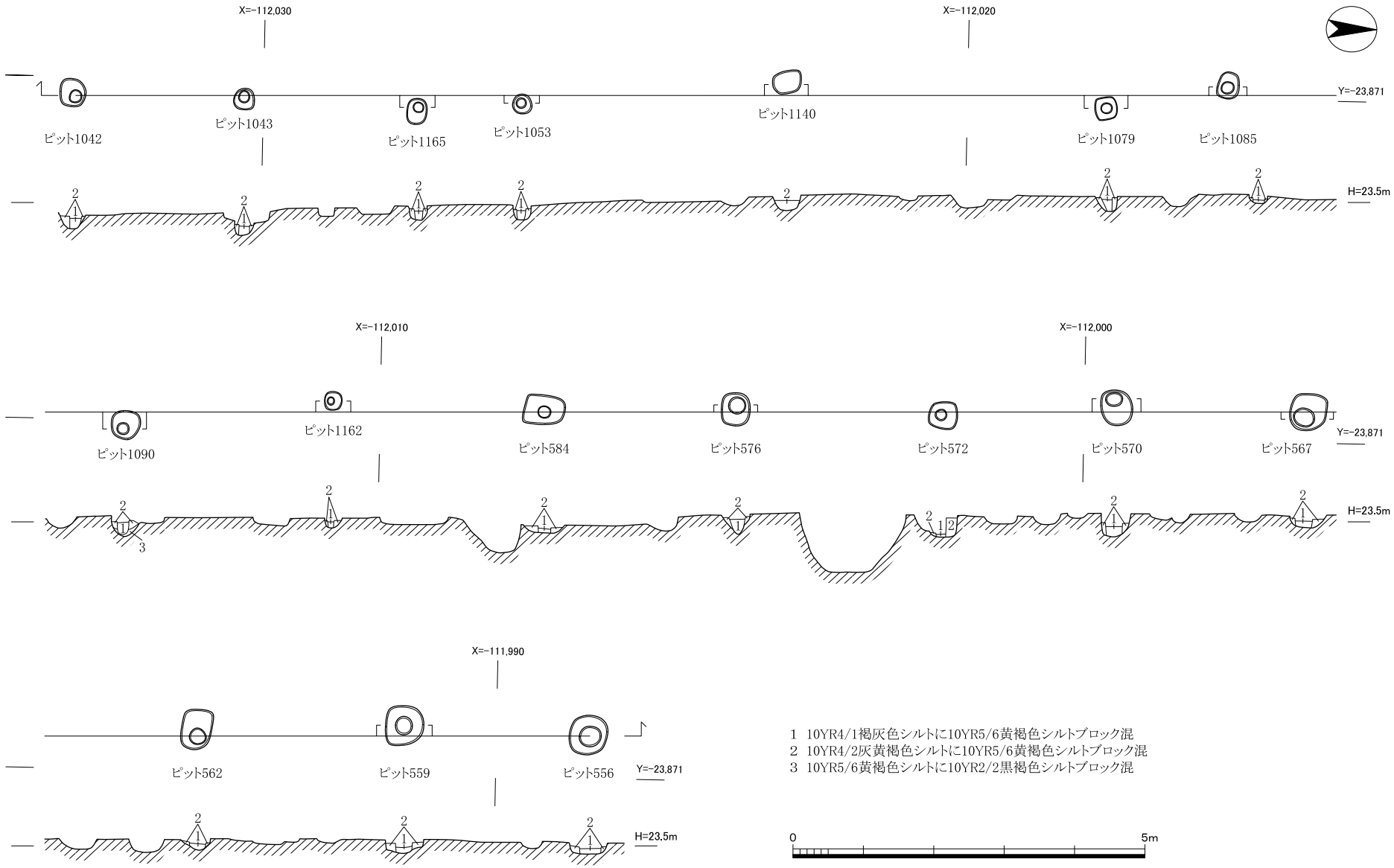
井戸617
1 10YR3/2黒褐色砂 φ～5cmまでの礫多量含む 上面には厚さ0.5cm程度の鉄分が沈着する
2 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに10YR4/2灰黄褐色砂泥混
3 10YR4/1褐灰色シルト 粗砂混じり φ～3cmの砂多量混
4 10YR3/1黒褐色シルト 粗砂混じり
5 10YR4/1褐灰色シルト 粗砂混じり φ～3cmの砂少量混
6 10YR4/1褐灰色砂に10YR4/4褐色砂混じり φ～5cmの礫多量混

井戸268
1 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 φ～3cmまでの礫少量含む 炭・土器混
2 10YR4/1褐灰色砂泥に2.5Y4/3オリーブ褐色粘土ブロック混 炭・土器混
3 10YR4/1褐灰色シルトに10YR4/6褐色砂泥混 炭・土器混
4 10YR3/2黒褐色砂泥

0 2m

井戸268・617・807実測図（1：50）

柵２実測図（１：80）

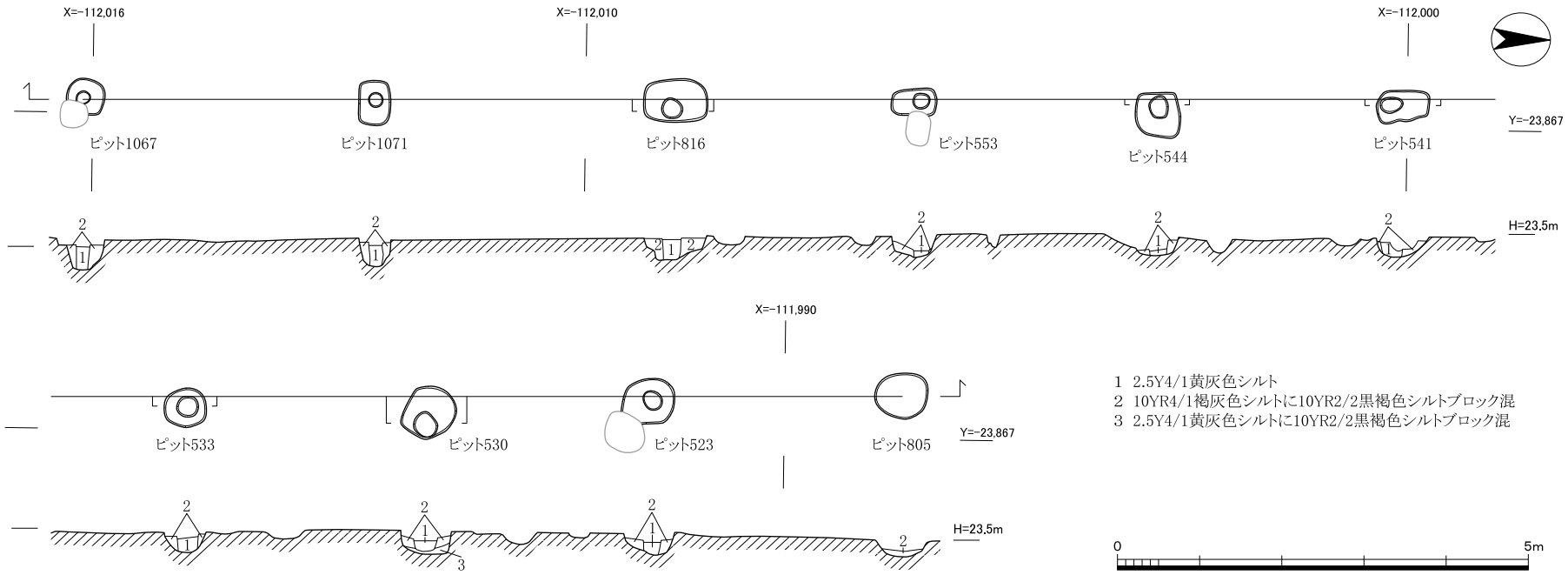


1 10YR4/1褐灰色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック混
2 10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック混
3 10YR5/6黄褐色シルトに10YR2/2黒褐色シルトブロック混

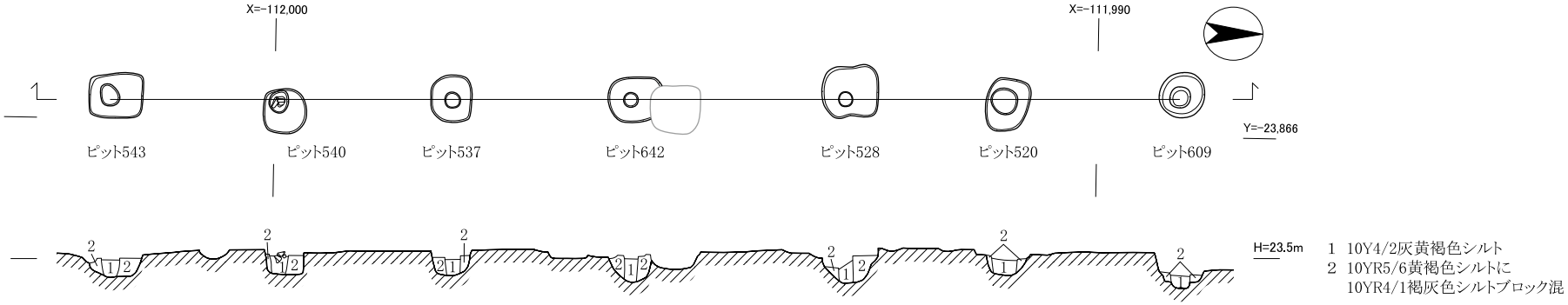
図版15 遺構

柵３・４実測図（１：80）

柵3

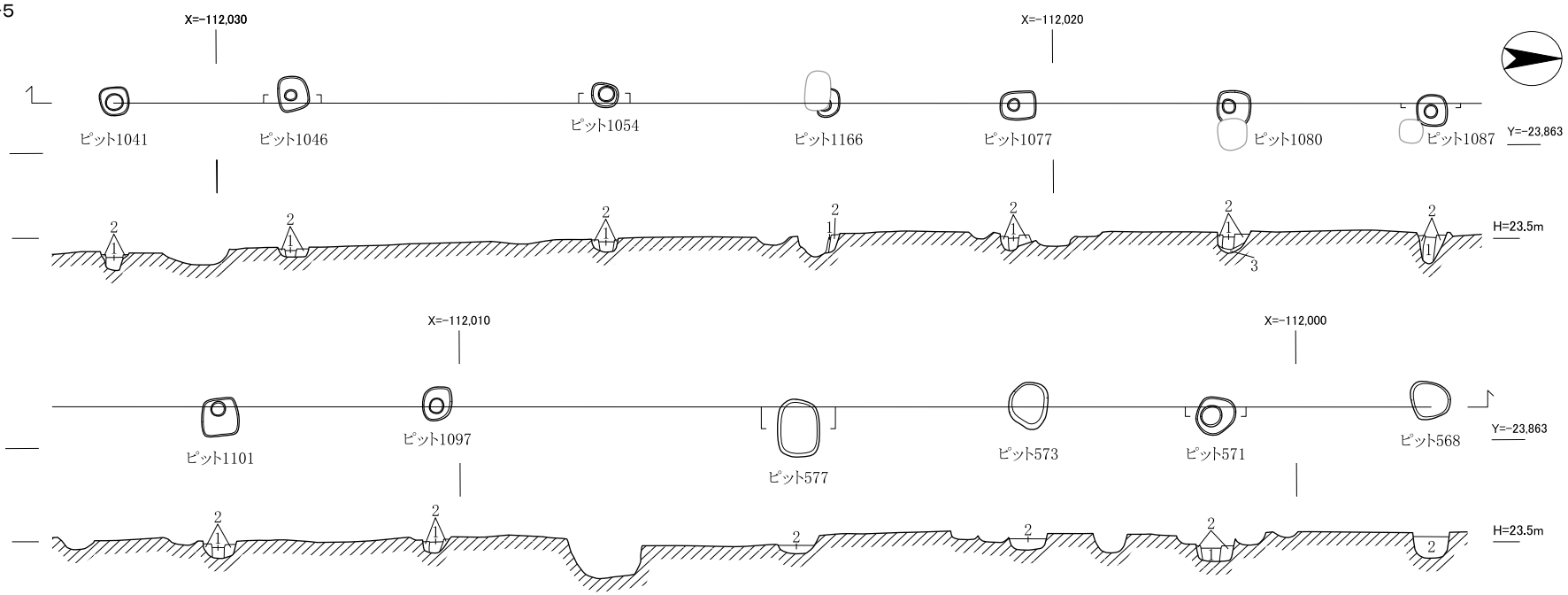


柵4



柵5・6実測図（1：80）

柵5

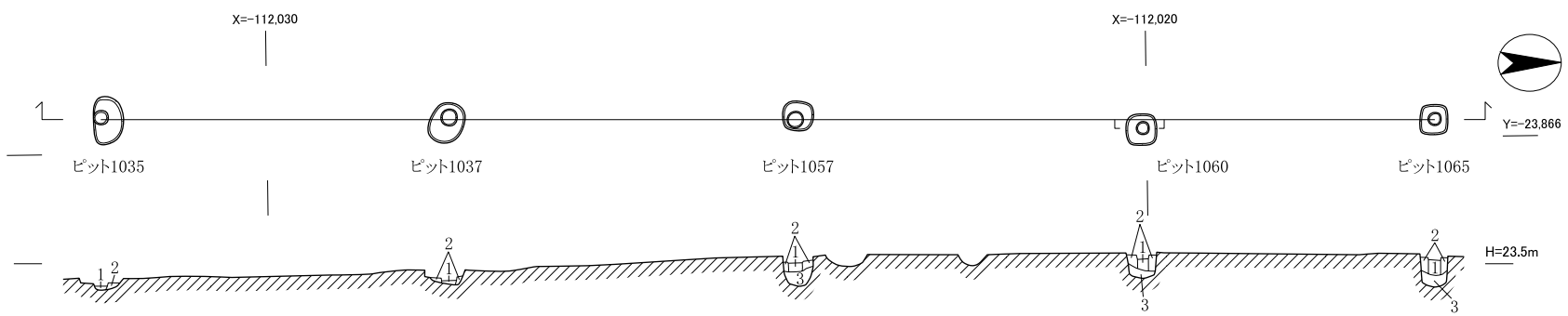


柵5
1 10YR4/1褐灰色シルトに10YR4/4褐色シルトブロック混
2 10YR4/4褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルトブロック混
3 10YR5/6黄褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルトブロック混

柵6
1 10YR4/1褐灰色シルト
2 10YR5/6黄褐色シルトに10YR4/1褐灰色シルトブロック混
3 10YR2/2黒褐色シルトに10YR4/6褐色シルトブロック混

0 4m

柵6



図版17 遺構

1　調査区西部 全景（南から）

2　調査区北東部 全景（西から）

1　調査区南東部 全景（西から）

2　掘立柱建物２と井戸268（西から）

1　掘立柱建物３（西から）

2　掘立柱建物５（西から）

1　掘立柱建物６（西から）

2　掘立柱建物７・13（北から）

1　掘立柱建物11・12（西から）

2　調査区北東部 柵２～５と溝512・529（北から）

1　調査区南東部 柵２・３・５・６と溝512・1026（北から）

2　柵３ピット1071半裁（東から）

3　柵５ピット1101半裁（東から）

1　井戸268（東から）

2　井戸268掘形半裁（南から）

3　井戸268枠内 土器出土状況（南から）

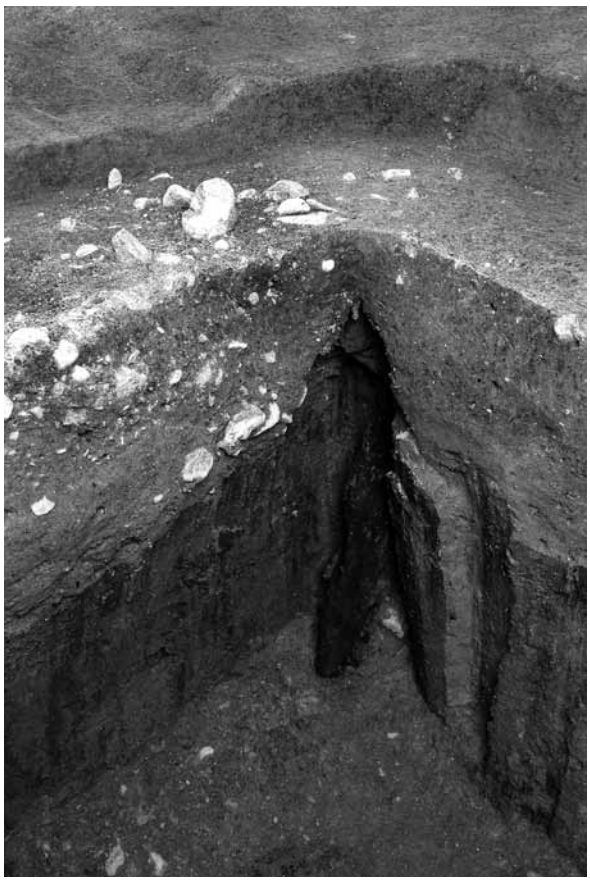
4　井戸268枠内 柄杓出土状況（南から）

1　井戸617（北から）

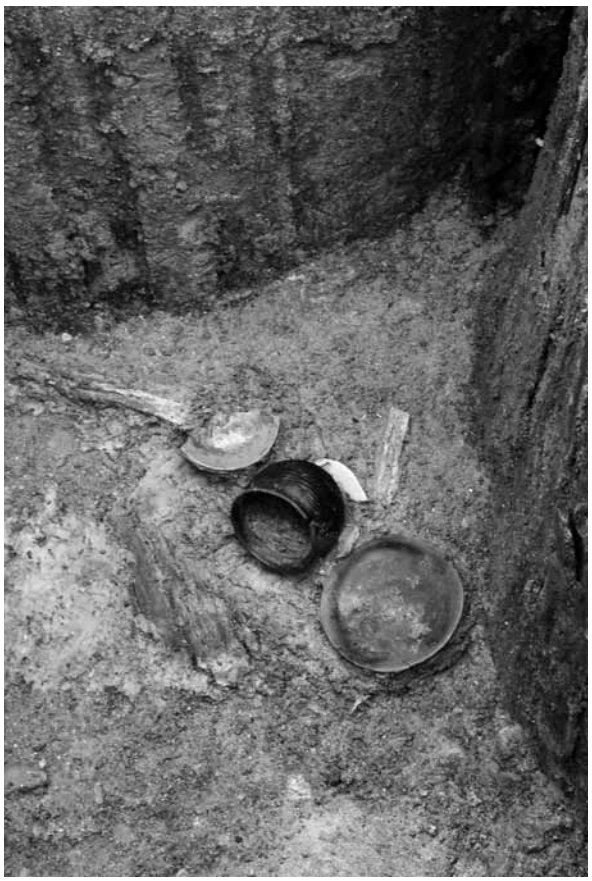
2　井戸617枠内 土器出土状況（北東から）

3　井戸617掘形 土器出土状況（北東から）

1　井戸807（東から）



2　井戸807隅柱遺存状況（南東から）



3　井戸807枠内 土器・骨出土状況（南から）

1　溝450（南東から）

2　溝171（北から）

3　ピット430（南から）

1　ピット564土器出土状況（北西から）

2　ピット564半裁（南西から）

3　ピット640土器出土状況（北から）

4　ピット661瓦出土状況（東から）

2

3

5

23

20

17

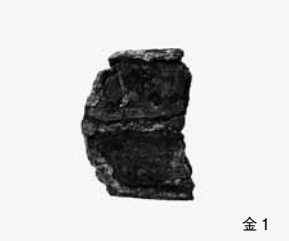
57

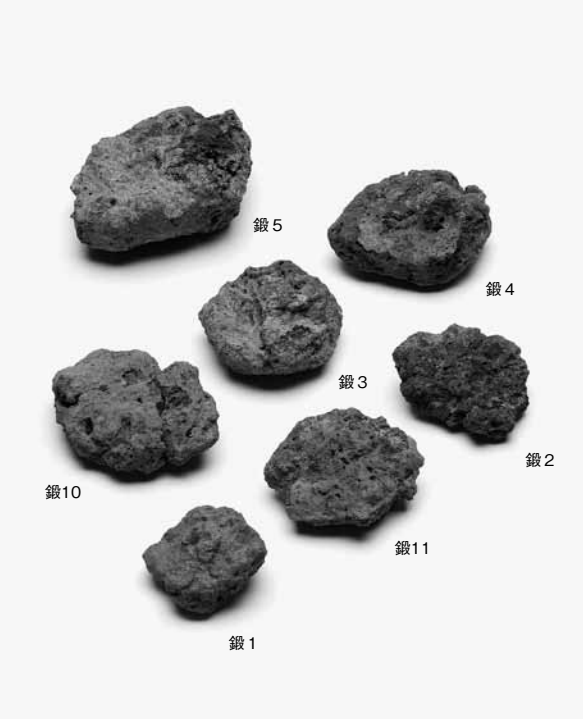
58

18

14

井戸807・617・268、ピット564出土土器





土製品・瓦・木製品・石製品・金属製品・鍛冶関連遺物

報　告　書　抄　録

ふ り が な	へいあんきょううきょうしちじょういちぼうじゅうにちょうあと
書　　名	平安京右京七条一坊十二町跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０１８－１２
編 著 者 名	鈴木康高
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2019年10月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京跡（へいあんきょうあと）	京都市下京区（きょうとししもぎょうく）西七条北東野（にししちじょうきたひがしの）町（ちょう）90ほか	26100	1	34度59分24秒	135度44分17秒	2018年４月20日～2018年11月30日	2,037㎡	施設整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡	都城跡	平安時代前期～中期	掘立柱建物、井戸、柵、溝、土坑、ピット	土師器、白色土器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦、木製品、石製品、金属製品、鉄滓	平安時代前期から中期の小規模宅地を確認した。 １町の中心で南北方向の小径を検出した。 北小路南側溝を検出した。

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2018-12

平安京右京七条一坊十二町跡

発行日　2019年10月31日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961